



TITLE:

# 「総人のミカタ」活動報告書 2017年度前期～2018年度前期

AUTHOR(S):

人間・環境学研究院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会

---

CITATION:

人間・環境学研究院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会. 「総人のミカタ」活動報告書 2017年度前期～2018年度前期. 「総人のミカタ」活動報告書 2018: 1-120

ISSUE DATE:

2018-10-01

URL:

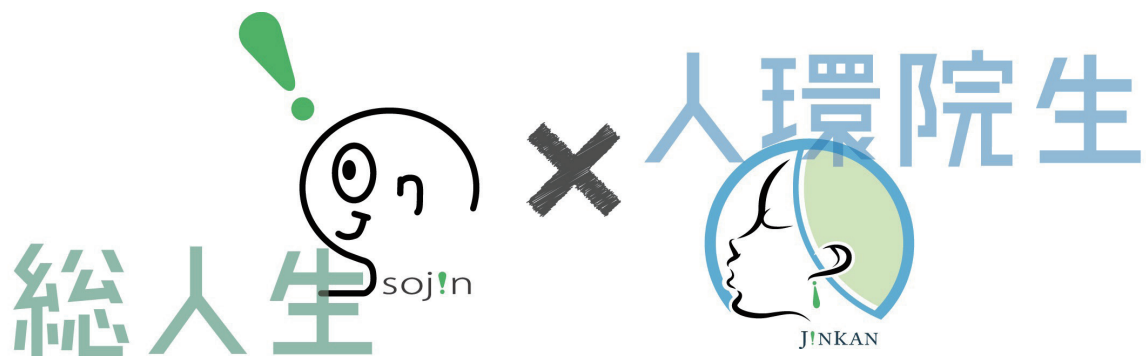
<http://hdl.handle.net/2433/235245>

RIGHT:

© 2018 by Sojin no Mikata

# 「総人のミカタ」活動報告書

2017 年度前期～2018 年度前期



人間・環境学研究科院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会 [編]  
京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部 [発行]



# まえがき

この報告書には、2017年度の4月から活動を開始した、人間・環境学研究所院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」の1年半の記録がまとめられている。今回、こうした報告書を刊行できるのも、ひとえに、この企画の運営に協力してくれた院生メンバーや趣旨にご賛同いただいた先生方、そして、この企画に参加してくれた学部生の方々のおかげである。この場を借りて、まずはお礼を申し上げる。

「総人のミカタ」の名称は、「見方」と「味方」の掛詞になっている。このうち、「見方」は、それぞれの院生が、自身の専門分野の「ものの見方」を提示するという企画の中心的なコンセプトを表している。これについての詳細は、第1部2章に示したつもりなので、そちらを参照していただきたい。それに対して、「味方」という言葉には、進路に迷いがちな総人生をサポートする、という思いを託している。各学期の最初に行なっている院生の自己紹介や毎回のフリートークは、学部生にロールモデルを提示するために設けられており、実際にそのように機能してきた。それだけでなく、総人のミカタという場は、当初の意図を越えて、院生にとっての互助組織という役割まで果たしている。

院生がそれぞれの「ものの見方」を提示することで、迷える学部生の「味方」になる。勘のいい人であれば、ここまでの話はある程度察しがつくかもしれない。だが、実は、「ミカタ」にはもう一つ意味をもたせている。それは、「味わい方」という意味での「味方」である。強引な当て字に思われるだろうが、これまでの活動を振り返ってみると、一概にこじつけとはいえないように思う。

総人のミカタには、いろいろな関心をもった参加者がいる。毎週の講義を楽しみにしてくれている学部生もいれば、特定の分野に関心があってピンポイントで参加する人もいる。「国際高等教育院騒動」をリアルタイムで経験して、総人・人環のあり方に強い問題意識をもっている院生がいる一方で、「教育」や「学際」に関心があって参加した人や、他の分野の院生との交流を求めてくる人もいる。さまざまな背景をもった、いろいろな立場の人が集い、毎回、何らかの学問的な話題を共有して、それぞれにとっての意味を引き出していく。総人のミカタは、このように多様な「味わい方」のできる場として存在してきたように思う。総人のミカタは、総人・人環の「味わい方」を豊かにする。

この企画を構想したのは今から2年ほど前だが、その時には、こんなに早く企画が現実化し、活動が継続し、そして報告書がまとめられるなど、露ほども思わなかった。それどころか、発足時のメンバーのほとんどとは、それ以前に面識さえなく、自分一人では人集めさえままならない状態だった。企画を実現するあてなど、まったくなかった。にもかかわらず、いざ伝手をたどって声をかけてみると、見知らぬ私の突然の話に、みんな快く応じてくれた。そこから、とんとん拍子に事が運び、今こうして、その軌跡の一部を活字に残す機会を得られている。これは、とても幸運なことだと思う。だが、もちろんこれが終着点ではない。この報告書が次のステップへの踏石となるよう、今後も、微力ながら尽力していきたい。

真鍋公希（総人のミカタ運営代表）

# 「総人のミカタ」活動報告書に寄せて

2017年4月から始まった人間・環境学研究科院生による総合人間学部生向けの模擬講義企画「総人のミカタ」が2018年度前期の講義を終えたのを機に、これまでの活動の総括と今後の展望を纏めると聴く。総合人間学部長、人間・環境学研究科長として、感謝の意味をこめてここに一文を寄せる次第である。

「総人のミカタ」は、人間・環境学研究科院生の純然たる自主的な発案・企画によるものである。そこには後輩である総合人間学部生への慈愛と期待が満ち溢れている。自分達がかつて戸惑い、さ迷い、懊悩した経験をもとに、企画を進める院生自身が主体的に議論を交わし学部生の意見を汲み入れ、試行と修正を重ねながら発展的で実りのある活動を続けている。京都大学初代総長木下廣次が、本学創立後最初の入学宣誓式で述べ、京都大学学生の基本姿勢として求められる「自重自敬」、「自立独立」をまさに発現した企画と言える。総合人間学部長、人間・環境学研究科長として「総人のミカタ」に関わる全ての大学院生・学部生諸氏に深く敬意を表するものである。

「ミカタ」には見方と味方の二つの意味があるという。総合人間学部という学部をどのようなものと見るのか、どうあるべきと見るのか、それをともに考えようということかと想像する。そして、総合人間学部生の先輩としてわれわれ人間・環境学研究科院生は、戸惑い、さ迷い、懊悩する貴方達の第一の、最大の味方であるとの宣言でもあるのだと思う。しかし実は、これら二つに加えてさらにもう一つの意味が「ミカタ」には込められているらしい。味わい方という意味の「ミカタ」である。

確かに「総人のミカタ」模擬講義企画を実際に覗いてみると、その三つが実感できる。総合人間学部生の味方として人間・環境学研究科院生が自分の研究について語るなかで、当該専門領域におけるものの見方を、周辺関連領域との連携のあり方を説き、学部生はそれを批判的に咀嚼し吸収することで、院生と学部生がともに自分自身による総合人間学部の見方を、ひいては人間・環境学研究科の見方、現在あるいは将来に学び修める学問領域に対する見方を培おうとしている。そして、それぞれがこうした自発的な学びの場を楽しみ味わおうとしている。毎週、木曜日、夕刻の総合人間学部棟の一室には若さに漲る知の空間が広がっている。

「総人のミカタ」の良さは、自主的・能動的であることに加え、単位などという即物的な利や目的から解き放たれて、のびのびと学問を語り、学び、論じるところにある。だからこそ、真の意味で彼らは学問を楽しむことができている。語るものと聴くものが自らの考えに基づいて学問を捉え、自由に意見を闘わせ、新たな知を吸収し、さらに自らの考えを深め広げようとしている。このような場が、学生の自主的な取り組みによって総合人間学部と人間・環境学研究科の中に生まれたことに心から感謝している。今回の活動の総括と展望をもとに、この企画がさらに磨かれ深められて、今後も持続的・発展的に進められることを願ってやまない。

杉山雅人（総合人間学部長／人間・環境学研究科長）

# 目 次

まえがき（真鍋公希）	i
「総人のミカタ」活動報告書に寄せて（杉山雅人）	ii

## 第1部 「総人のミカタ」の概要 1

活動概要と運営体制	2
「総人のミカタ」について（真鍋公希）	5
「総人のミカタ」活動年表	16
会計報告	18
メンバー紹介	19

## 第2部 講 義 21

2017 年度前期	22
2017 年度後期	48
2018 年度前期	74

## 第3部 特別企画 99

【卒業生企画】総人の卒業生の話を聞いてみよう！	100
【2017 年度末シンポジウム】	
「研究を他者に語る」の先へ——教養と学際未来を考える	104
【院生向け企画】学振申請書（DC・PD）検討会	108
京都大学吉田南総合図書館 × 総人のミカタ コラボ企画	110
「総人のミカタ」に関する研究活動	112
第五回 京都大学 学際研究着想コンテスト	112

編集後記	120
------	-----

## コラム／資料

学部生からみた「総人のミカタ」の凄さ（飯田昇平）	49
ただの模擬講義ではない（橋本悠）	103
他大学出身者のミカタ（あるいは「総人のミカタ」について語るときに私の語ること）（三升寛人）	111
アンケートの分析	98
「総人のミカタ」企画書	114
受講者向けアンケート	118
講義記録（院生記入用）	119



「総人に入学したいいいもの、何をしたらいいんだろう？」  
 「興味の方向性が決まらない……自分と相性の良い学問分野って？」  
 「せっかく人環に進学したんだから、学際的なことに挑戦したい」  
 「自分の専門分野を紹介する機会があったらいいのにな……」

**総人のミカタ**  
 毎週木曜5限 (16:30～18:00)  
 総合人間学部棟1階 1102

申込不要！  
 飛び入り参加歓迎！

総人 生 人 環 院 生  
 受講生も企画協力者も募集中！

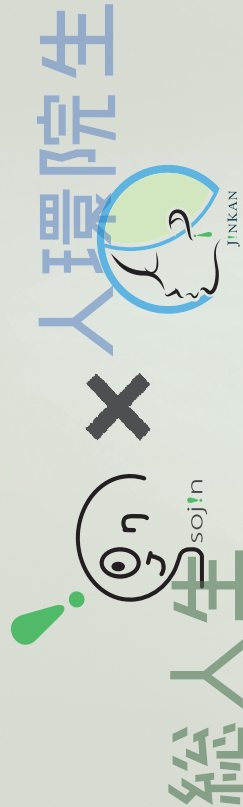
主催：人間・環境学研究院学生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会  
 後援：京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部  
 お問い合わせ：下記webページ「お問い合わせ」、または sojin.nomikata@gmail.com までご連絡ください。

詳細はこちら

総人のミカタ 検索

web ページ facebook twitter LINE

▲「総人のミカタ」2017 年度前期のフライヤー（表・裏）



「総人のミカタ」とは、人間・環境学研究院で多種多様な学問分野を専攻している大学院生が、総合人間学部の学部生に向けてレレ一形式の模擬講義を行う企画です。

専門をどうしようか迷っている——この企画は、そんな総人生の味方です。  
 いろいろな学問分野を相対的に見て比較したい——この企画は、いろんな学問分野のものの見方が学べます。  
 せっかく入学・進学した総人・人環——この企画で、総人・人環を味わい尽くしませんか？

普段なかなか話す機会のない総人生と人環院生が交流できるのも、総人のミカタの特長です。  
 一度しかない学生生活、気軽に相談できる先輩がいると、心強いと思いませんか？  
 また、研究室に閉じ籠もりがちなる人環院生にとっても、刺激と息抜きの両方を得られる場となるはずですよ。

毎回の流れ	前期スケジュール
16：30ー17：30 人環院生による模擬講義 人環院生が自分の専門分野の「もの見方」を紹介します。	4 / 13 人環の先輩たちに話を聞いてみよう！ (前期担当全員) 4 / 20 「自殺」を「社会学」する (真鍋・社会学) 4 / 27 人間発達へのせまり方——実験課題を考え (萩原・発達科学) 5 / 11 選挙と政策決定——何を基準に投票すべきか (杉谷・政治学) 5 / 18 構造と公理化 (須田・政治学) 5 / 25 理解社会学と近代資本主義の成立 (真鍋・社会学) 6 / 1 人間発達の魅力へのせまり方——発達障害児との遊びを見つめる (萩原・発達科学) 6 / 8 方法の違いと見方の違い——社会学と発達科学 (萩原・真鍋) 6 / 15 選挙と政策決定 (2) (杉谷・政治学) 6 / 22 無限と連続 (仮) (須田・政治学) 6 / 29 地球のすかたを知る——地表から地底まで、我々の足元には何があるのか (近藤・地球科学) 7 / 6 地球のなりたちを知る——地球はどのように生まれ、進化し、生命を育んできたのか (近藤・地球科学) 7 / 13 ディスカッション (2) (近藤・杉谷・須田)

### 開催概要

毎週木曜日 5 限 (人環院生は 6 限まで)  
 総合人間学部棟 1 階 1102 講義室  
 ※申込不要・飛び入り参加歓迎！  
 ※詳細・変更事項はwebページやSNSで随時更新します。

主催：人間・環境学研究院学生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会  
 後援：京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部  
 お問い合わせ：下記webページ「お問い合わせ」、または sojin.nomikata@gmail.com までご連絡ください。

## 第1部 「総人のミカタ」の概要

# 活動概要と運営体制

2018 年 9 月 6 日現在

## ◆「総人のミカタ」とは

**正式名称：**人間・環境学研究院院生による総合人間学部  
生向け模擬講義企画「総人のミカタ」

**運営主体：**人間・環境学研究院院生による総合人間学部  
生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会

**後援：**京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部

**Web サイト：**<https://sojin-no-mikata.jimdo.com>

## ◆活動の目的と内容

### ●概要と目的

人環の大学院生による、総人の学部生を主な対象としたリレー形式の模擬講義であり、以下を目的としている。

- ①院生の教育・研究能力の向上
- ②特に 1、2 回生を対象としたロールモデルの提示
- ③総人・人環における交流の活性化

### ●具体的な活動内容

**模擬講義（60 分）：**講義を担当する院生が、単に自分の研究を紹介するのではなく、自分の専門分野の「ものの見方」や「考え方」を伝えられるような講義内容を計画し、実践する。なお、講義担当者は「シラバス」（後述）を学期前に提出する。

#### [模擬講義の趣旨等]

- ・ 講義担当者 1 人につき、半期に 2 回、それぞれ別の内容で講義を行う。2 回の講義内容が連続していても構わないが、聴講する学生が 1 回目の講義に必ずしも出席しているわけではないことには注意して計画する。
- ・ 半期全体を通して、異なる分野の講義からそれぞれの「ものの見方」や「考え方」の特徴・共通点・相違点が明らかになるよう、企画を設計している。そのため、講義担当者の「学系」が、分散するよう注意する。
- ・ 講義担当者とは異なる専門分野の院生（1 名）が「**院生アシスタント**」となる。講義に関連する補助を行うとともに、講義終了後には、「**院生質疑**」を担当する。
- ・ 院生質疑では、院生アシスタントが講義内容にかかわる質問をその場で考え、講義担当者がその場で回答する。

る。ただし、単に細かな内容を詰める質問をするというより、各分野の「ものの見方」を意識した質問、つまり、講義内容で提示された視点を相対化しうような質問が求められる。なお、この方式は、2017 年度前期中に試験的に取り入れられ、2017 年度の後期から正式に導入された。

- ・ 講義もアシスタントも担当していない院生は、講義を聴講する。聴講院生は、必ず全員が、高等教育学の成果を踏まえて作成された記録用のワークシートの「**総人のミカタ講義記録**」（119 頁）を用いて、授業の構造を意識しながら、講義の内容や手法と、それに対するコメントを書き留める。このシートは、講義検討会でも使用される。なお、この方式は、2018 年度前期より導入された。

**フリートーク（30 分）：**学部生を適当な人数のグループに分け、各グループに院生が少なくとも一人入っている状態を作ったあと、講義内容から学生生活一般に関する内容まで、自由に話す。

#### [フリートークの趣旨等]

- ・ 会話しやすい雰囲気をつくることなどを目的として、先生方からの個人的な協力のもと、飲み物とお茶菓子を提供している。
- ・ 特に新入生にとって、フリートークは院生と接点を持つ稀有な機会となるだけでなく、学部生同士が交流する機会ともなる。学部・大学院での縦横の交流の場となることを目指している。
- ・ 性格や慣れなどの事情から、いきなり質問や感想を要求することが難しい学部生もいる。インフォーマルな形式を作ることは、そうした学部生に授業に参加してもらう格好の機会となっている。実際、話す内容を設定しているわけではないが、講義内容に関する会話が続くことが多い。

**検討会・フィードバック（60 分）：**講義の内容・進行などについて、「総人のミカタ講義記録」をもとに、聴講院生から質問や意見交換を行う。

#### [検討会・フィードバックの趣旨等]

- ・ 出される質問や意見は、講義の形式や進め方についての技術的なものから、内容に関連するより専門的なもの



のまで幅広い。

- ・異分野ディスカッションの内容（シラバス含む）などについての基本方針、また、吉田南総合図書館のキャンペーンへの協力や卒業生企画などの「特別企画」についての基本方針は、このタイミングで相談し、指定された担当者を中心となって対応していく。
- ・メンバー間で議論する必要がある案件や共有すべき情報がある場合には、PandA にスレッド立て、そこに話し合いの内容を記録する（異分野ディスカッションの内容についての議論など）。なお、PandA は、京都大学の提供する学習支援システムで、総人のミカタでは、それを運営用の連絡やリソースの共有に使用している。2018 年度から導入された。
- ・検討会の内容は、担当者（現在は運営代表）が、PandA の該当するスレッドに、議事録（発言者明記）を箇条書的にまとめていき、検討会終了時に、その場で更新する。
- ・異分野ディスカッションや特別企画について、重要な決定や意見提出がなされた場合、それを該当するスレッドに更新する。
- ・講義などを通じてかかわるメンバーだけでなく、人環の修士課程の院生、聴講している学部生なども、検討会に参加している。オブザーバーの参加は、2018 年度前期から導入された。

**振り返りコメント（講義担当者）・アシスタントコメント（院生アシスタント）の執筆：**講義担当者、院生アシスタントが、講義終了後から数日以内に、講義にかかわる反省事項を指定された Google フォームに記入する。

#### [振り返りコメント・アシスタントコメントの趣旨等]

- ・講義担当者は、自身の講義と検討会での質疑応答、受講生に配布した「**受講者向けアンケート**」（118 頁）の内容などを踏まえ、うまくいった点やうまくいかなかった点など、振り返りコメントを執筆する。参加者からの質問があれば、その回答を書く。
- ・それに加えて、講義担当者は、一回目の講義後は、うまくいった点、うまくいかなかった点、次回へ向けた改善の展望を執筆し、二回目の講義後には、反省点が改善されていたかななどをチェックする。
- ・院生アシスタントは、院生質疑の内容やその意図を記録するとともに、講義全体のレビューを兼ねたコメントを執筆する。
- ・これらのコメントの一部は、総人のミカタ Web サイトに公開される。

**異分野ディスカッション（半期 2 回、各 90 分）：**異なる専門分野の講義担当者が、2～3 人のペアを組み、ディスカッションを行う。

#### [異分野ディスカッションの趣旨等]

- ・ペアの組み合わせは、それぞれの専門分野の特性と、担当者の都合を加味して決定する。また、講義を担当しない院生の中から、ディスカッションをコーディネートする司会（＝担当者）を設定する。
- ・ディスカッションのテーマは、検討会で基本方針を決定する。その後、司会が中心となり、検討会、メール、PandA 内のフォーラムなどを用いて内容や進め方の詳細について相談する。司会はそれを踏まえ、ディスカッションのシラバスを執筆する。特に、企画コンセプトである「ものの見方」や「考え方」の共通点や相違点が際立つようなテーマが望ましい。研究手法や着眼点、研究する現場の雰囲気などに焦点を当てることもある。
- ・ディスカッションによっては、講義担当者の講義内容との直接的な関連を持たないことも多い。その場合も、講義担当者、司会、聴講院生が、講義内容と結びつけるよう努めることで、結果として、それぞれの専門分野の特色や差異が滲み出てくることが期待される。
- ・質疑の際などに、近接分野の聴講院生が、ディスカッションを相対化するような異なる「ものの見方」を提示し、議論に対する理解を深めるような質問をすることもある。

#### [異分野ディスカッションの構想と意図]

学部の既存カリキュラムに「学系入門科目」がある。複数の担当者によるリレー講義である点や、初学者を想定受講者とし、進路選択の参考となるような講義にするという点は、総人のミカタと類似している。恐らく、学系入門科目と総人のミカタとの大きな違いは、**自分の担当しない講義にもメンバーが出席している点に加え、異分野ディスカッションと院生質疑があること**だと思われる。これらの取り組みには、既存の学系入門科目が、各回、担当教員の研究紹介に終始しがちである点への批判が込められている。

異分野ディスカッションは、人間・環境学研究科内の学際教育研究部の支援を受けて開催されたワークショップ「学際系学部の教養教育」（2015 年 12 月）を参考に導入された。このワークショップにおいて、広島大学総合科学部の授業「総合科学概論」という、講義担当者同士がペアを作って対論する形式の講義が紹介されている（『学際系学部の教養教育 報告書』74-75 頁）。ある人環

の教員は「総合科学概論」の対論について聞き、次のように述べている。「うちの総人の学系入門っていうのをこれにぜひ組み換えたらいいんじゃないかっていう。学系入門科目って、うちやっているんですけど、基本は学系の教員が1回、1回、顔見世興行みたいにただしゃべっているだけでほとんど機能していないのをなんとかしないといけないなというのは、実は議論したんですけど、こういうスタイルでやると結構面白そうだなと思いました」(『学際系学部の教養教育 報告書』75頁)

## ◆運営業務

### ●通常の講義

#### [講義準備]

- ・ **講義担当者**：担当する講義のスライド、配布資料等の準備を行う。印刷の希望があれば、配布資料を事前に運営代表にメールで送付する。
- ・ **講義担当者以外**：運営代表は、講義担当者から配布資料を送付された場合には事前に印刷する。また、受講者向けアンケートや総人のミカタ講義記録などの準備をする。

聴講院生は、記録機材(カメラ、ビデオカメラ、ICレコーダー)を用意する。また、院生アシスタントは、飲み物やお菓子を購入する。領収書は、会計担当者に渡す。

講義の概要を各SNS(Facebook, Twitter, LINE@)を利用して宣伝する。更新の目安は、おおよそ、Facebookが火曜、Twitterが水曜、LINE@が木曜となっている。

#### [記 録]

- ・ 当日は、講義風景を動画および写真で、検討会は録音と議事録で記録している。
- ・ 記録は、随時Pandaのリソース機能で共有される。

#### [講義後]

- ・ **講義担当者およびアシスタント**：講義担当者およびアシスタントは、その講義を振り返ってのコメント等を1週間以内を目安に入力する。
- ・ **WebサイトおよびSNS担当者**：振り返りコメントおよびアシスタントコメントの入力が済み次第、記録写真とともに、総人のミカタのWebサイトで公開する。SNSの担当者は、Facebook、Twitterで周知する。
- ・ **アンケート入力担当者**：講義で受講生に配布したアンケートの結果をデータ化し、記録を管理する。

### ●学期前の準備

- ・ メンバーは、次期の講義担当者を選出する。できる限り、学部の学系が重複しないようにメンバーを揃える。少なくとも、講義担当者の中で、文系と理系の双方が存在するのが望ましい。
- ・ 運営代表を中心にメンバーが必要と考えた場合、単発での講義担当者を設定する、卒業生企画などの特別な機会を設けるなどの相談・検討をする。
- ・ 講義担当者は、指定された期日までに、「シラバス」を2回分を提出する。「シラバス」には、講義概要・教授法・配布物などの情報だけでなく、講義目標、15分ごとの講義計画などの事項が記載される。
- ・ シラバスが揃い次第、担当者がWebサイトを更新し、スケジュールや講義概要を公開する。
- ・ 担当者は、フォーマットを利用して、学期前などにフライヤーを作成し、総人棟・人環棟などへのフライヤーの掲示を、大学側の担当者に依頼する。
- ・ スケジュールがある程度決まった時点で、メンバー内で院生アシスタントの割り振りも行なう。

### ●その他の事項

- ・ メンバーは、各人が可能な範囲で運営に参加する。
- ・ 総人のミカタという研究教育活動に関する「研究」の機会を折に触れて確保するのが望ましい。
- ・ 「(総人の)ミカタのミカタ」という、総人のミカタの今後の運営や方針について話し合う集まりを、有志メンバーで定期的に開催している。食事中的インフォーマルな意見交換、少人数の打ち合わせ、資料を用意し、教員を招いた会議などさまざまな形態で行なわれる。重要な提案がなされたり、共有すべき意見があったりした場合、話し合いの内容を記録し、関係者に周知する。

## 文 献

白田泰如・佐野泰之・瑞慶覧長空ほか編, 2017,『学際系学部の教養教育 報告書——教員にとっての学際／学生にとっての学際』。

# 「総人のミカタ」について

## ——部局の歴史における位置づけと中心的理念をめぐって

真鍋公希（総人のミカタ運営代表）

### 1 はじめに

総合人間学部（以下、総人）は何を勉強するところなのかという質問に直面し、答えに窮した経験のある総人生は多いのではないか。「総人のミカタ」という名称も決まっていなかったときに執筆した企画書では、こうした身近な経験から話を始めた<sup>1</sup>。このような質問を真剣に受け止め、「総人とはどういう学部なのか」「他の学部と何が違うのか」「理念に掲げられている学際とは何なのか」といった疑問と向き合っている総人生が、実際にはどのくらいいるのかはわからない。しかし、少なくともメンバーが、この疑問に答えるために活動に協力しており<sup>2</sup>、また、参加した学部生からも同様の疑問が寄せられている。このことから、総人のミカタを駆動させる中心的な問題意識の一つは、紛れもなく、このアイデンティティをめぐるといえる。

もちろん、これは数ある問題意識のうちの一つにすぎない。総人のミカタは、第一義には、私たち院生のトレーニングの場、いわゆるプレFD活動<sup>3</sup>である。それゆえ、メンバーには、自分たちの教育的なスキルを高めようという動機が広く共有されている。この動機の背後に、アカデミック・ポストへの就職という世俗的な関心があることは否定しない。だが、そうした凡庸な利害関心より、2015年の「文系学部廃止騒動」をはじめ学問の存在意義が問い直される現代で、大学教育によってその社会的意義を再構築したいという気持ちの方が、よほど強いとは断言できる。もし、そうした問題意識がなければ、総人卒でないメンバーがこれほど多く集まり、今日まで活発な場を作り続けることはなかっただろう。

加えて、総人にも人間・環境学研究科（以下、人環）にもある交流の乏しさへの不満も忘れてはならない。多様な専門分野が集まり、それぞれの分野単位での教育が行われるという構造上、どうしても、分野が異なる学生・院生との接触機会は少なくなる。これは、とりわけ学部生の場合には、留年率などとも関連する学生支援上の課題とされてきた（白田ほか編 2017: 62-6）。総人のミカタは、こうした課題解決の一助となることも目指している。具体的には、講義の後にはフリートークの時間を設け、毎週、継続的に参加者同士が交流できる場を提供し

てきただけでなく、各学期の初回には自己紹介や院生の進路選択の経緯を紹介する機会もつくってきた。現在までの参加人数からして、留年率を改善できるほどの強力な効果は見込めないが、それでも、地に足のついた独自のネットワークが形作られたとは考えている<sup>4</sup>。

以上で挙げた代表的な問題意識の中で、ここでは、はじめに提示したアイデンティティの問題に注目して、それを掘り下げながら、総人のミカタの活動を捉え返してみたい。喫緊の社会的課題である現代の学問・教育をめぐるといえる問題ではなく、学生の当事者目線からの総人・人環

<sup>1</sup> 114 頁参照。なお、本報告書に添付をしたのは 2017 年 1 月 29 日に改稿したものだが、2016 年 11 月 3 日に執筆した初期のバージョンから、本文に大幅な修正はない。

<sup>2</sup> 総人のミカタに参加している院生メンバーについては、19 頁を参照のこと。また、こうしたメンバー個人の思いの一部は、『総人広報』第 59 号に掲載された総人のミカタ特集で紹介されている。

<sup>3</sup> プレFD とは、大学教員を目指す大学院生や OD、PD を対象とした職能開発の活動を意味する。教員を対象とした職能開発活動である FD (faculty development) の前段階という意味の和製英語であり、アメリカでは同様の活動を PFF (preparing future faculty) と呼ぶ。

<sup>4</sup> さらにいえば、単にあるネットワークができたのではなく、それがアカデミックなコミュニケーションによって担保されている点に、総人のミカタの特徴がある。真剣に準備した講義の背景や研究への思いをフリートークで語る、検討会においては講義の方法から内容まで忌憚なく質問や意見を交換する。総人のミカタでは、異なる専門分野、異なる学年の参加者のあいだで、こうした濃密なコミュニケーションが日常的に展開されてきた。同じように「交流」ということばを使っている、それは立食パーティーで研究の話をするのはまったく次元の違うものだと思う。総人のミカタは、社交の空間ではなくアカデミックな空間であった。このことは、短期的には交流の乏しさという課題の解決にマイナスだったかもしれないが、長期的にはその限りではないと信じている。こうしてみると、総人のミカタで交わされてきたコミュニケーションは、模擬講義以外の時間であっても、活動の主な参照点である「研究を語る」という教育理念と密接に関連するものなどといえる。



のつながりという問題でもなく、この問題に直面していないメンバーも多くいるにもかかわらず、それでもなぜ、アイデンティティの問題を選ぶのか。

それは、このアイデンティティの問題が、「総人・人環はいかなる組織なのか」という問いからして集団的なものであるのみならず、それが、総人・人環やその母体となった教養部でも幾度となく問われてきたものだからである。それだけに、すでにいくつかの解答が蓄積されてもいる。これらの解答は、〈教養教育〉と〈学際〉という二つの概念のいずれかを核に構成されているといえる。そこで、ここでは、この二つを焦点としてこれまでの議論を整理し、それを通して、総人のミカタが、新たに何を付け加えようとしているのかを提示することを試みる。

以下、林哲介（2013）の議論に沿って、第2節では、総人・人環の母体となった教養部で、なぜアイデンティティの問題が問われねばならなかったのかを確認し、続く第3節では、総人・人環が設立されるまでにどのような解答が試みられたのかを概観する。その後、第4節では総人のミカタの直接的な背景といってよい「国際高等教育院騒動」と「研究を語る」という教育理念を紹介し、そこに含まれつつも注目されてこなかったもう一つの側面について検討する。最後に、第5節では、この側面を総人のミカタがどう発展させようとしているのかについて論じる。

## 2 教養部の格差問題

総人・人環は教養部を母体として成立した部局である。教養部は、戦後の大学改革によって導入された一般教育<sup>5</sup>を担当する部局であり、現在の総人・人環の教員が全学共通科目の多くを担当しているのも、これに由来している。一般教育課程を担当する教員集団であることから、教養部は授業科目に合わせてポストを置く学科目制によって組織され、その結果、教養部には研究予算や助手の割り当てが少なく、また固有の所属学生をもてないなど、講座制を採る他の専門学部とのあいだには大きな待遇の差があった。他学部と同様、実態は教育組織であり研究組織でもあるにもかかわらず、制度的には後者の側面がないがしろにされていたわけである。

もっとも、この格差は京大に限定されたものではなく他大学にも存在していたが、唯一、東京大学だけは教養学部として独立した一学部を構成していた。これに加えて、東大では3年次の学部への分属が教養学部での成績で決まる制度を採っていたこともあり、他大学の教養部に比べれば、東大の教養学部は他学部に対する地位も

高かった。この東大の例が影響して、1965年ごろには、組織的な格差を解消するために教養部を学部化するという議論がなされるようになる<sup>6</sup>。しかし、学部化を実現するためには、研究組織として伝統的な専門分野の区別に依拠する各学部に比肩する明確なコンセプトを提示し、なおかつ、教育組織として担当する一般教育の質をどう担保するかを示すという二つの大きな問題を解決しなければならなかった。そのため、結局、学部化の方針は頓挫してしまう（林 2013: 19-21）。

教養部教員の他学部への分属など、格差を解消する方法は他にもあるにもかかわらず、その後もあくまで教養部を母体とする改組の方針を固持したために、この二つの問題は今日まで引き継がれ続けることになった。そして、後者の問題が〈教養教育〉に固有の意義をめぐる議論へと展開され、前者の問題に答えるために〈学際〉という理念が提示されてきたといえることができる。

それでは、〈教養教育〉と〈学際〉という二つの焦点は、具体的にはどのように参照されてきたのだろうか。以下では、(1)1976年に提出された「総合科学研究科」案、(2)1978年に提出された「科学基礎研究科」案、そして(3)現在の総人・人環につながる1980年代以降の改革案、の三つを順に確認していくことにしよう。議論を先取りしておく、これらの改革案は、〈教養教育〉と〈学際〉という二つの焦点によって描かれる楕円軌道上を運動するかのよう、一方に近づけばもう一方から遠ざかるという形で移り変わってきたといえる。

## 3 総人・人環の設立経緯と〈教養教育〉／〈学際〉

### 3.1 〈学際〉という焦点の成立——総合科学研究科案

1969年には、教養部の中だけでなく全学的にも、一般教育課程の改革に関する議論がなされるようになった<sup>7</sup>が、実際の改革にはつながらなかった。転機となったのは、1974年に大学院設置基準が制定され、大学院を学

<sup>5</sup> アメリカの general education に対応するものとして、大学入学後の2年間に割り当てられた。さしあたり、本稿では引用した資料に合わせることを優先し、意味の上では一般教育と教養教育を互換的に使っている。

<sup>6</sup> 京都大学職員組合教官部会が発行する『教官部会ニュース』の第14号には、以下のような記述を確認できる。「教養部改善の試みとして、教養部から教養学部へという考え方は、すでに、昭和40年頃からあり、正式に評議会決定事項にもなると聞か、実現を見ぬままに、いわゆる'69年紛争に突入した。」（『教官部会ニュース』(14) 1976.11: 1）

部とは独立の教育組織とみなし、学部と対応しない大学院の設置が認められるようになったことである。これは、一方で学部教育の下請けとみなされがちな教養部の地位をさらに低下させる恐れのあるものであったが、他方では教養部を母体とした研究科を設置するという新しい方向性を可能にするものでもあった。

この新たな危機感にも後押しされ、教養部を、学部をもたない独立の大学院に改組する方針が検討されるようになった。その最初の案が総合科学研究科である。京都大学職員組合が発行する『教官部会ニュース』には、研究科構想の設立趣旨が、以下のように記載されている。

近代科学が生誕して以来歩んできた学問の細分化と専門化との傾向は、学問の発達にとって不可欠の要件ではあったが、今や、人間によって立つ基礎であるとともに働きかけの対象でもある自然・社会・文化は、もはや細分化されたままの学問では抱えきれない深さと広がりを持つようになって来ている。……まさに諸学問の協力体制と、その有機的な結合とが求められ、いわゆる学際的な研究の強く要請されているときであるとの認識に立って、本研究科は、新しい体制の下に、学問の進展に寄与すると同時に現在の諸問題に対処しうる視野をもった研究者を養成することを目的とする。（『教官部会ニュース』（12）1976.04: 4）

このように、最初に構想された大学院案では、複数の専門分野による共同研究によって、現代の社会的な問題の解決を試みるという意味での〈学際〉が、中心的な理念となっていた<sup>8</sup>。それは、必然的に複数の分野の教員が所属していなければならない〈学際〉という観点が、教養部にとっては、研究組織の現状を維持しながら他学部との差異化を可能にする有効な戦略だったからだ。「教養部には、全学の9学部に対応する分野からの出身者が集っている。総合科学研究科を設置するための、最もふさわしい条件の一つはすでに内在している」（『教官部会ニュース』（14）1976.11: 3）のである<sup>9</sup>。教養部の現在の構成をそのまま強みに変え、他学部と差異化できる〈学際〉という研究理念が、改革案の中心に真っ先に浮上したのは、他学部とのあいだに存在した格差問題が、基本的には研究環境に関わるものであったことを思い出せば当然といえる。

しかし、大学院として独立した後も一般教育を担うことを主張する以上、担当する一般教育が大学院への移行によってどう変化するかについての展望を示さなければならない。総合科学研究科案は、この点の検討がかなり希薄であった。実際、他の部局からも一般教育がどう

なるのかという疑問が寄せられている（『教官部会ニュース』（13）1976.05: 3-4）。こうした疑問に対して、総合科学研究科案では「教員がそこでの教育研究活動を通じて、体得する学問的な視野や展望は、一般教育にとって非常に良い効果をもたらすであろう」（『教官部会ニュース』（14）1976.11: 5）と説明するに留まっている。ここには『一般（教養）教育の基盤となる学術研究』というこれまでになかった発想、理念（林 2013: 25）の萌芽がみられるとはいえ、それはまだ曖昧なものにすぎない。この点を明確化しようと試みたのが、次の科学基礎研究科案である。

### 3.2 〈教養教育〉という焦点からの再構築——科学基礎研究科案

総合科学研究科案でもたらされた「一般教育の基盤となる学術研究」という論点を受け、一般教育から独自の研究理念を展開しようとしたのが、科学基礎研究科案だった（林 2013: 26-35）。研究科案の中核をなす「科学基礎」の概念は、1979年度に教養部長を務めた井上健によってまとめられた。科学基礎とは、ひとことでいえば、専門分化する学問のあり方そのものを問い直し、

---

<sup>7</sup> 『京大教養部報』の第22号（1969）から第25号（1970）にかけて掲載されている大学問題検討委員会教養部会の議論では、一般教育科目を専門教育科目と互換的なものと位置づけ、学部単位の教育を専攻系列に再編した四年一貫方式を採用することで、学生が自由で柔軟に履修できる方針が望ましいとしている。また、一般教育に専門教育の基礎的内容にとどまらない固有の意義を主張する点、教養部を母体として学際研究を行う総合研究センターを新設する点など、本稿に関連する論点がいくつも提起されている。しかし、教養部を越えた全学での大規模な改革提言であり、かつ、総合研究センター独自の専攻系列を認めないことから、教養部の研究組織的側面と教育組織的側面を完全に切り離しているため、今回は検討の対象から外すことにした。なお、さらに詳しい内容については『大学の未来像について（答申）』（大学問題検討委員会 1972）も参照のこと。

<sup>8</sup> この〈学際〉の理念がいかに一般教育と結びついたのかについては、渡辺浩一ほか（2017）も参照のこと。

<sup>9</sup> この点については、「研究者としての教養部教官は、自然・人文・社会等の広汎な学問分野にわたる多様な研究者の集団として、本学における既存の学部・研究所に見られない特色をもつ集団を形成している。その意味で単一の学部とは異った超学部的な目的意識を持つ組織が考えられる」（『京大教養部報』（25）1970.01: 3）とする大学問題検討委員会教養部会の議論からの影響が読み取れる。

学問の包括性を志向するものである。

言語に限らず実験とか理論というような手段ないし道具立を使って現実に対して問いかけて意味のある事実をつくりだしていくのが科学といわれるわれわれの営みなわけですが、そのような問いかけに対する yes とか no とかの答え自体がどんな意味を持つかというのは、更に一般的な何か経験に即した『枠組』の中で意味を持ってくるわけです。もっと一般的に言えば、科学研究の背後にさらに一般的な frame work というものがあって、その中で意味のある事実かどうか判断されていくことになります。そういう一般的な frame work と科学的知識との関係、特に数学的言語との関連を問題にするのが第四の基礎論の主題であり……（『教官部会ニュース』（17）1979.10: 3）

以上のように、科学基礎の立場は、科学的検証を背後で意味づけている歴史的・社会的に共有された世界観を意識することで、学問の包括性を問うことを主張している<sup>10</sup>。専門分化の進展は、科学的に厳密な概念によって対象の操作・分析を容易にする反面で、その対象を分析しようと方向づける、科学の起源にあったはずの意味や価値を見失ってしまう。科学基礎は、専門分化によって暗黙の前提となってしまう問題を問い直し、そこに立ち返る態度を要請する。

そして、こうした主張は、一般教育を専門教育に従属させるのではなく、むしろ両者を相補的なものとする立場から導き出されている。この相補的な関係は、外国語教育を例にとるとわかりやすい<sup>11</sup>。仮に、外国語教育が専門教育の基礎となるだけのものであれば、その言語を的確に使用できるだけの語学力が習得できれば、それで十分ということになる。しかし、相補的な内容をもつという立場からすれば、文法や発音、読解能力を習得するだけでなく、異なる言語やその背後にある文化への理解を促すという自律的な目的が発見される。科学基礎の問題設定は、こうした一般教育をめぐる議論を発展させたものである。

ところで、科学基礎は、専門分化が進む学問の現状に対応しようとする点では総合科学研究科案と同じだが、そこで挙げられていた〈学際〉が諸分野を組み合わせる具体的な諸問題を解決しようとするのに対し、科学基礎は学問の問題設定を可能にする抽象的な世界観を意識しようとする点では対照的なものといえる。

一般に、あるシステムの維持・発展には分枝的あるいは部分的な協同と共に、包括的あるいは統合的な協同

が不可欠です。後者の意義は前者の正常な運転のためだけにあるというのは、いわば余りにも管理・経営主義の立場ではないでしょうか。生物に限らず、いわゆる進化といわれる過程を許すシステムは、後者の機能がある程度独立なものとしてなければ、およそ存在しえないのではないのでしょうか。私達はそういう意味で新しい研究科が必要であると考えerわけです。（『教官部会ニュース』（17）1979.10: 6）

たしかに「ヘリオトロン」とか「国際農業」というような新しい領域というものは〔科学基礎研究科の講座には〕<sup>12</sup> ない。そういう領域としての novelty はないわけでした。「かかわり方」の問題なわけです。……〔他の学部と〕同じ材料を扱うことはありうるので、領域としての novelty ではないが、立場としての novelty はありうると思うのです。（『教官部会ニュース』（17）1979.10: 7）

「部分的な協同」ではなく包括性を重視し、また、対象領域の新規性を認めずに「かかわり方」の問題とする点で、科学基礎は、いくつかの分野を複合的に組み合わせ、現代的な問題である新しい対象を研究する〈学際〉の理念からは距離を取っている。これらの主張をまとめると、総合科学研究科案から科学基礎研究科案への移行は、前者が曖昧にしか提示できなかった〈教養教育〉を理念の中心に据えて再構築した結果、そこで打ち出されていた〈学際〉という理念からは撤退したといえるだろう。

科学基礎では、科学の前提となる背後の世界観へと立ち返る態度が求められる。この方針は、次の「学術総合研究科」案でも踏襲されることになったのだが、政策的に教養部を解体しようとする流れが強まる中で、徐々にまた、〈学際〉が理念の中央に迫り出してくることになる。

### 3.3 〈学際〉への揺り戻し——学術総合研究科案から総人・人環へ

1984年に臨時教育審議会が発足し、一般教育課程の

<sup>10</sup> これは、「教養」を「故郷を持った知識」とする佐伯啓思（2014）の立場とも共通しているといえるだろう。

<sup>11</sup> この外国語教育の例は、正確には大学問題検討委員会教養部会が提示した議論だが（『京大教養部報』（24）1969.12: 1-2）、専門教育と一般教育を相補的に考えるという基本的な立場を同じくしており、直接言及されているわけではないが、時期的にも内容的にも影響があると読み取れるため、ここで参照した。

<sup>12</sup> [ ] 内は引用者が加えた注記である。以下同様。



解体・再編が現実味を帯びるようになった。この政策の流れが、最終的には 1991 年の大学設置基準の大綱化につながっていく。この流れは、教養部にとっては学部・研究科への昇格を後押しするものだったが、時流に流された急ぎ足の改革は、理念的な検討を後回しにさせることにもなった。

1984 年には、それまで科学基礎研究科案を検討・交渉してきた「科学基礎研究科設置案等調査検討委員会」が廃止され、同年に文学部教授の藤澤令夫を委員長とした「教養部にかかわる大学院問題検討委員会」が設置される。この委員会が翌年に提出したのが、学術総合研究科案である。名称が「基礎」から再び「総合」に戻ったわけだが、これはすぐに、理念の中心が〈学際〉に回帰したことを意味しない。

藤澤（1987）は、専門領域の細分化の起源を、「観想 theoria」と「実践 praxis」を厳格に区別し、学問的営為を観想と結びつける西洋の学問的伝統に求めている。なぜなら、それが実践を含めた人間の経験全体における価値や意味の問題を無視して、冷静な観察者の視点から「客観的事実」だけを扱おうとする態度に転じ、その態度こそが、範囲を限定して観察精度を高めようとする学問の細分化を引き起こすからである。そして、こうした事態では人間の生と密接につながる想念と実践を統合した全一的な知に到達することはできない。それゆえ、専門分野の視点で得られた知見は、全一的な知へと方向づけ直されなければならない。これこそが学問の「総合」である。

また、この意味での「総合」の理念と一般教育との関係は、以下のように示されている。

「教養部」の教官は、「一般教育」を通じて、不断の“学際”的緊張の中で学生に接している。理学部の学生に文学を教え、文学部の学生に物理学を教え、工学部の学生に歴史学を教える、といった日常の業務から、この緊張は自然に出てくるがそれだけではない。もっと根本的には、教養部教員が日常的に接している学生、とくに新入生には、“学問をすること”と“生きること”詳しく言えば“善く生きること”とを合致させようとする意欲、両者は合致するはずだという信念が、専門研究者よりもずっと強いからである。（新田 1986: 11）

異なる専門分野の学生と接触するという学際的な状況もさることながら、一般教育の場合は学問と生を結びつけようとする意欲ある学生と向き合わざるを得ない空間であり、それは藤澤のいう「総合」を達成するためにうって

つけの環境なのである。このように、専門分化の進展に対して、科学的な知を、人間の生ないしその生によって形づくられる意味や世界観に差し戻そうとする態度を重視し、なおかつ、そうした態度が不可欠となる空間を一般教育に求める点において、学術総合研究科案は科学基礎研究科案を引き継いだものと理解できる。

ただし、「個別領域が全体性を復帰しようとする動きを促進することをめざし、そのために、『学際』領域を教育・研究の対象として採り上げる」（新田 1986: 7）ともされており、〈学際〉との対比を強調していた科学基礎に比べると、学術総合研究科案の理念における〈学際〉の位置づけは、曖昧な部分も含まれるようになった。

さて、1987 年に、学術総合研究科に加えて「教養学部」を設置して教養部の教員を分属させ、同時に一般教育課程を廃止して各学部が「四年一貫教育」を行うという大幅な路線変更がなされた。教養学部の新設案が急浮上したのは、大学院に当時の教養部教員を全員配置できないことへの現実的な対応策であった。だが、教養学部の新設と四年一貫教育という方針とがセットになることで、一般教育と学術総合研究科との関係は不明瞭になった。そして、この案の教養学部の名称を総合人間学部と改めた案が、翌年に文部省に提出されることとなる。

最終的に、この案にもう一つだけ修正を施すことで、学部・大学院の設置が認可された。そう、学術総合研究科から人間・環境学研究科への名称変更である。これは当時、環境問題が社会的に注目されていたことを受けて文部省に要請されたもので、学部・大学院への改組を優先するために、学内で十分に議論されることなく行われた変更だった。しかし、これによって「講座説明も授業科目もことごとく環境問題と結び付けられ」（『教官部会ニュース』（38）1991.01: 3）ることとなり、結果的に、これまで後景に退いていた〈学際〉が、一気に前景化することになった。加えて、総人が全学共通科目と名称を変えた一般教育の実施責任部局となることで、人環は一般教育の実施主体から、一旦は完全に切り離された。

以上のように、当初は科学基礎研究科案の問題関心を引き継いでいたといえる学術総合研究科案は、改組を実現するために、徐々に〈教養教育〉から遠ざかるように修正され、改組される最終段階で、再び〈学際〉が理念の中心に据えられたのである。

## 4 「研究を語る」という教育理念

第2節から第3節で見たように、教養部の格差問題の解消を目的として始まった学部・研究科への昇格を目指す試みで掲げられてきた理念には、〈教養教育〉と〈学際〉

という二つの焦点が、交互に強調される形で登場していた。最初に提出された総合科学研究科案は、〈学際〉という理念が前景化した一方で〈教養教育〉との関係は曖昧なものだった。次の科学研究科案では逆に、〈教養教育〉を突き詰めた理念を考案した結果、〈学際〉からは距離を取るようになった。そして、学術総合研究科案を経て総人・人環の設立に向かう流れでは、再び、〈学際〉が中心へと迫り出してくるのに伴って、〈教養教育〉の理念や責任の問題が後退していった。このように、理念の変遷を追っていくと、それはおよそ、二つの焦点からの距離の和が等しいことで定義される楕円軌道上を周回するように並べることができる。本節では、2012年に表面化した「国際高等教育院騒動」と、その意図せざる結果として合意された「研究を語る」という新しい教育理念<sup>13</sup>を検討していくのだが、前節までの議論を踏まえると、この理念は、〈学際〉から離れて〈教養教育〉へもう一度帰しようとするもの<sup>14</sup>と理解できるだろう。

国際高等教育院の設置とそれに対する反対運動は、総人・人環が設立されて以来、最大といっても過言ではないほど教員・学生の双方に強い衝撃と危機感を与え、総人・人環のアイデンティティの問題を再び顕在化させた出来事だった。当時、国際高等教育院の設置によって目指されていたのは、端的に言えば、国の高等教育政策に沿った全学共通科目の改革である。これに対し、全学共通科目の多くを担当している総人・人環の教員は、改革計画で示された方針では「到底十分な教育は行われえないと判断」し、「9月には教授会が公式に新組織計画案に反対の決議を行いさえた」（高橋 2015: 4）だけでなく、昼休みに拡声器を使って学生運動さながらの呼びかけまで行った。これに加えて、教員の配置転換によって総人・人環が実質的には解体されてしまうかもしれないという噂が広がり、総人・人環に所属していた当時の学生の多くが、強い不安を抱くことになった<sup>15</sup>。しかし、結果的には、国際高等教育院は設置されたものの、総人・人環は解体されることなく存続し、現在でも引き続き、全学共通科目の多くを提供し続けている<sup>16</sup>。

総人・人環を揺るがしたこの一連の騒動は、その過程で、〈教養教育〉がもつ固有の学術的意義を土台とした新しい教育理念を明確化し、教員間の合意を形成することにつながった（高橋 2015）。それが、「研究を語る」という教育理念である。この理念は、2014～15年度にかけて学部長・研究科長を務めた高橋由典によって考案されたものだが、そのアイデアの原型は、2004年に提出された『教養教育に関する人間・環境学研究科・文系群会の考え』（京都大学高等教育開発推進機構）や高

橋（2013）にも見ることができる<sup>17</sup>。発表された時期は10年ほど幅があるが、議論の本筋に関わる〈教養教育〉観に変化はないので、二つを合わせて、内容を概観しておこう。

高橋によれば、〈教養教育〉の本質とは、そこでなされる「知的触発」にある。教養教育の現場では、関心も目的も異なる多様で不均質な学生を相手に講義が行われる。多くの学生にとって、その講義の内容が将来の専門に直接つながるわけではないから、学生は「今後のために話を聴く」という態度で講義に臨むこともないし、専門教育と違って前提となる共通の知識があるわけでもない。こうした状況で教育的なコミュニケーションを成立させるためには、教員は学問の核心的な内容を、前提知

---

<sup>13</sup> 2018年3月に開催したシンポジウムでは、『「研究を他者に語る」の先へ』というタイトルをつけた。これは、「研究を他者に語る」という言葉が、総人・人環の教育理念として公的に使われていると思っていたことに由来する。しかし、改めて確認してみると、いずれも教育理念としては「研究を語る」という表記になっており、「研究を他者に語る」という表現は、卒業論文の異分野教員への発表という企画名に限定されたものというのが正確なものであった。かなり重大な点を誤解していたわけだが、とはいえ「他者」という論点は、この理念を理解・検討するうえで不可欠のものと思われる。シンポジウムでの報告は、まさにこの点に注目したものであった。もちろん、本稿では正式な「研究を語る」を用いていくことにしたい。

<sup>14</sup> 「研究を語る」という教育理念の背景の一つには、京大内に学際を謳う他の部局もある現在において、学際だけでは総人・人環の固有性を主張できなくなっていることが挙げられている（高橋 [2015]2017: 52）。この点で、再度〈学際〉からは距離を取った理念だと考えることができる。

<sup>15</sup> 騒動の様子は『ゆとり京大生の大学論』（安達ほか 2013）の「はじめに」でも描かれている。また、ミニシンポジウム「岐路に立つ総人・人環」（2013年6月）、「シンポジウム：学際＝薄才？」（2014年6月）、「学際教育のゆくえ」（2015年6月）、および広島大学総合科学部とのワークショップ「学際系学部の教養教育」（2015年12月）を企画した総人・人環連絡協議会の活動も、この騒動を契機としている（白田ほか編 2017）。

<sup>16</sup> 教養部の廃止の際には、教員は総人と人環に分かれて所属することになったが、2003年に教員組織が人環に統合された。

<sup>17</sup> 『教養教育に関する人間・環境学研究科・文系群会の考え』は、2018年9月4日現在、国際高等教育院のWebページで閲覧できる（<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0185.pdf?1126112319>）ほか、『ゆとり京大生の大学論』の巻末にも掲載されている（安達ほか 2013: 165-72）。

識のない相手に届く言葉で語らなければならない。日々の研究で重視している込み入った小さな差異のおもしろさは、前提知識がなければ伝えられないのだから、教養教育の現場で語らなければならないのは、学問的な知識と常識的な知識とを隔てる大きな差異ということになる。この大きな差異を語り、学生に「意外だけれども説得的だ」「これまでとは世界の見え方が変わってしまった」といった驚きを感じさせられれば、学生を触発できたといって良いだろう。これが、〈教養教育〉が学生にとって意味をもつ理想的な状態である。要するに、「教養教育についての生命線は、聴く側をインスパイアする話ができるかどうか」（高橋 2013: 55）なのである。

また、教員の視点に立ってみると、〈教養教育〉における知的触発を核としたコミュニケーションは、専門家・非専門家（一般市民）間のコミュニケーションへと拡大して考えることができる。専門家が当たり前だと思っていることのほとんどは、非専門家には通用しない。学問共同体の中では上手く情報を伝えられるからといって、共同体の外部にいる人にも同じような方法で伝えられるとは限らないのである。そこではやはり、日々の教養教育と同様に、前提知識がなくともそのおもしろさや重要性がきちんと伝わるような言葉を探さなければならない。こう考えると、学問共同体の外部にいる人にも伝わる言葉を獲得することは、「学術を社会に開く」ことだといえる。「研究を語る」ことの背後には、この意味での公共精神がある。だとすれば、総人・人環の教員が日常的に取り組んでいるこの課題を、学生や院生にも経験させることには、固有の教育的意義が認められるはずだ（高橋 [2015]2017: 53-4）。

以上が、「研究を語る」という教育理念の概要である。この理念に基づき、現在、総人では卒業論文を異分野の教員に発表する「研究を他者に語る」が、人環の博士後期課程では指導教員がもつ全学共通科目の1コマを使った「教養教育実習」が、さらに大学院生が異分野の研究室で研究発表を行う「学際研究演習」が行われている。それぞれの場で「語る」努力がなされているわけだ<sup>18</sup>。だが、この「研究を語る」という理念には、あまり強調されていないために制度に十分に組み込まれていない、もう一つの重要な側面がある。

それは、「研究を語る」ことができるような能力・語彙を獲得するためには、専門分野の視点から考えることを宙吊りにし、非専門家の立場から自分の研究を眺め直す必要がある、ということである。「研究を語る」ことは、こうした自己相対化の契機を生み出す。「なぜ、これではなくあれを対象とするのか」「なぜ、わざわざ日常用語とは違う概念を使う必要があるのか」「なぜ、こ

んな煩雑なことをしなければ分析できないのか」「なぜ、……」。非専門家の立場からの疑問は、素朴であるからこそ、制度化され、正当化され、暗黙の前提となった専門分野の手続きを問い直す。「他者に語る」ための語彙とは、学問的なジャーゴンを日常の平易な語彙に置き換えることではない。問われていることは、その専門分野の概念や思考を、一から再構成して見せることができるかどうかなのだ。そして、研究者は、その再構成の過程で、これまで自明とされてきたことに修正を加え、別の方向があるということを発見するかもしれない。それは、学問的な前提に疑いをもたず、細かな差異にこだわり続ける研究者にはできないことだろう。

こうして、学問的な知識と常識的な知識とのあいだにある大きな差異を言語化しようとする教養教育の営みは、その専門分野の根本的な問題関心に立ち返り、そこからもう一度、問いを始めることを語る側に促す。この点において、「研究を語る」ことは科学基礎の概念と通底している。〈教養教育〉を中心に組み上げられた二つの理念は、ともに学問への原理主義的な態度を求めている<sup>19</sup>のである。

以上のように、自己相対化の経験は、研究を語り、他者に伝えるための基盤となるだけではない。それは、自分の専門分野に対する理解を深める点で、自身の研究にも還元され得る。大きな差異に驚くのは、非専門家だけ

---

<sup>18</sup> ここで注意が必要だと思われるのは、「非専門家にも伝わる語彙を獲得する」「学術を社会に開く」といった目標ばかりに目が行くと、この理念が、ただのアウトリーチと変わらないものに見えてしまうことである。知的触発とは、聴く側の知的好奇心を刺激しようとする点で、確かに、学問的な知見という情報が非専門家に伝達される以上のものだ。アウトリーチと同等にみなすのは、理念の矮小化にほかならない。いわんや、研究の話を平易で分かりやすくしゃべる、プレゼンテーション・スキルを身につける、といった技術的なレベルの話ではない。理念の背後にある知的触発という論点を見失えば、現在実施されている試みはすぐに形骸化するだろう。かといって、とりあえず非専門家に語る機会だけ用意して、発表の技術を身につけるチャンスもフォローアップも全くないのであれば、この理念はただ空虚な戯言になってしまう。「国際高等教育院騒動」から6年経ち、学生だけでなく教員も入れ替わりがあった現在、この理念をどう引き受けるのかは、もう少し議論しなければならない課題なのではないだろうか。

<sup>19</sup> 井上義和（2018）は、制度化され評価の定まった学問研究のあり方に根源的な批判を向けるこうした態度を「知」と呼び、それが成立する社会的条件を——まさに第2～3節で見てきた通り——講座制の学部／学科制の教養部という制度的な格差に求めている。



ではないのである。「語る」ことばかりに目を向けてしまうと、この逆向きのベクトルを見落としてしまう<sup>20</sup>。

総人のミカタが教養教育実習と大きく異なるのは、この自己相対化の経験に着目し、それを中心にした仕組みを取り入れていることである。次節では、総人のミカタの仕組みのうち、特にこの自己相対化の経験に関連するものを紹介しよう。

## 5 総人のミカタのコンセプト

### 5.1 「ものの見方」を伝える

総人のミカタでは、さまざまな分野の院生が模擬講義を行う。そのため、それぞれの講義の内容がつながっている必然性はない。そのまま何の工夫もしなければ、ただの模擬講義の寄せ集めで終わってしまう。だが、分野の多様性を重視すれば、4～5名の講義者の全員に共通するテーマを設定することは現実的ではない<sup>21</sup>。いったい、どのような課題を設定すれば、模擬講義の寄せ集めから脱することができるのか。

実は、総人のミカタには、講義者が共通して意識しなければならない課題が一つだけある。それは、「自分の専門分野の『ものの見方』が伝わるような講義をする」ということだ。それ以外は、講義の形式も、講義の内容も担当者が自由に設計できる。自分の研究の話をしてもらい、古典的な内容を扱っても良い。ディスカッションや作業を取り入れた、いわゆるアクティブラーニングの形式で講義を進めるのでも、一般的な大講義室での授業のように、そのほとんどが解説の時間となるのでもかまわない。ただ、それを通して、最終的には自分の専門分野の「ものの見方」を伝える。この点だけは、これまで、すべての講義者が意識して取り組んできた。このコンセプトは、「研究を語る」という理念の背後にある「知的触発」や、対象との「かわり方」の問題に独自性を見出す科学基礎と同様に、多様な専門分野の集合に統一性をもたらすのである。このコンセプトによって、総人のミカタは、ただの寄せ集めとは異なる次元に進むことができたように思う。

それとともに、このコンセプトは、「自分の専門分野に固有の『ものの見方』とは何なのか」という反省を、各講義者に促すことになる。これは、自己相対化につながる適切な課題設定だといえる。もし、「知的触発を引き起こすような講義をする」という課題を設定したとすれば、はじめて講義を経験する院生の多くは、どのような講義にするべきかわからなくなるだろう。また、「自分の研究をわかりやすく伝える」という課題であれば、模擬講義がただのアウトリーチに留まってしまう蓋然性

が高くなる。いずれの場合も、各講義者が違う視点から自分を見つめ直すという経験にはつながりがたい。

さらに、このコンセプトは受講生の講義への態度にも影響する。講義の目標が、ある分野の「ものの見方」を示すことにあると知っていれば、その講義で扱われた個別具体的な話を理解しようとするだけでなく、積極的な受講生は、その背後にある「ものの見方」の特徴を読み取る努力をするだろう。そうした態度によって、模擬講義の内容を越えたその学問の普遍性を感じることが可能になる。個別ケースに還元されない知の普遍性を感じられたとき、そこに知的触発が生じないことなど、あり得ないだろう。

以上のように、「ものの見方」を伝えるというコンセプトは、受講者を知的に触発し、同時に講義者が自己相対化を果たすためのガイドとなる。これらの経験は、総人のミカタでなされる模擬講義のすべてを貫いている。

だが、それだけではまだ、多様な分野の院生が参加していることに、積極的な意味を見出すことはできない。こうしたガイドを用意すれば、知的触発や自己相対化の経験は、現行の教養教育実習でも実現しやすくなるだろうからだ。異なる分野の院生によるリレー講義という形式には、何の意味もないのだろうか。

### 5.2 「ものの見方」を比べる

この疑問に答えるためには、「専門分野の『ものの見方』を比べる」というもう一つの課題を見ていかなければならない。総人のミカタの活動の中で、「ものの見方」を比べる機会として一番わかりやすいものは、複数の講義者による異分野ディスカッションだろう。4～5名の講義者を2組に分け、それぞれ1回ずつ行っている異分野ディスカッションでは、各講義者が自身の講義を振り返りつつ、その時のテーマについて自分の立場を紹介し、議論を行っている。ここでも、「ものの見方」を比べるという課題が設定されることで、講義者は、あるテーマに対する個々の専門分野の知見には何があるのかを紹介するのではなく、あるテーマに対して個々の専門分野

---

<sup>20</sup> しばしば、教養教育科目で語った内容が書籍化されることがあるが、そのあとがきにはだいたい、受講生の存在が刺激になったと書かれている。それがただの社交辞令でないのであれば、教員は「語る」ことで得られるものの存在も知っているはずである。ならば、このことがもつ教育効果も、もっと強調されて良いのではないだろうか。

<sup>21</sup> これは、各学系で学べることをリレー形式で紹介する総人の学系入門科目にも同じように当てはまる問題といえる。

がどのような立場からアプローチするのかを提示するように意識させられる。それに加えて、ディスカッションでは、自分の専門分野の立場が、ほかの講義者との点で共通し、どう異なるのかを示さなければならない。

ここでは、異なる分野の院生の視点を的確に理解し、そこから自分の立場を眺め直したうえで、相手との差異を語る言葉を見つけなければならない<sup>22</sup>。この際、分野が異なるとはいえ、同じ学問の地平を共有しているのであるから、第三者から見て、学問的な知識と常識的な知識との落差ほどの大きな差異を提示することは困難だろう。しかし、細かな差異にこだわってはいは、前提知識のない不均質な受講者には伝わらない。それでは、講義者はどのように語れば良いのだろうか。

その答えの一つは、ディスカッションの相手との遠近感だけでなく、自分と相手との位置関係を示すことにある。つまり、自分の専門分野と相手の専門分野とを、適切に関係づけるような語りが必要なのだ。関係づけが適切になされれば、それぞれの専門分野の輪郭も明確になる。あるテーマについて、それぞれの視点が並べられるだけの両論併記はつまらないが、そのテーマを語ることを通して、たとえ部分的にであっても学問の地図とでもいべきものが浮き上がってくるのであれば、これも知的触発につながらないわけではない。

そして、こうした「ものの見方」を比べるという課題が設定されているのは、実のところ、ディスカッションだけではない。2017 年の後期から正式に採用された院生質疑と講義後のコメントという試みは、この課題をさらに展開するための取り組みである。とりわけ、院生質疑では、相手と自分を差異化できる簡潔な質問・返答を限られた時間内で述べなければならない。実施される時間にも交わされる言葉にも限りがある中で、いかにうまく差異を語るかを意識することは、聴講する院生にも緊張感と知的刺激をもたらしているように思われる。

加えて、こうした相手との位置関係の把握は、講義後の検討会でも必要不可欠のものである。検討会では、もちろん講義の進め方に対する技術的なコメントも多く寄せられる。だが、それ以上に、「特にこの点がおもしろかった」「あの部分はもっと説明しないとわからない」といった指摘の方が、自分と相手とのスタンスの違いを知るための手がかりとなる点で、より重要なものといえる。また、同じポイントについて、複数の分野の院生が異なる評価を下すことで、それぞれのコメントを行った院生が属する専門分野間の差異が明らかになることもある。このように、総人のミカタの日々の活動には、講義者以外の院生にとっても、自分の分野の「ものの見方」を捉え返し、他の分野との関係を考える機会が多く用意されて

いる。冒頭に述べたように、総人のミカタは、第一に私たちのトレーニングの場なのである。

しかし、「ものの見方」を比べるという課題は、質の異なる自己相対化の契機となるだけではない。受講生にとっても、知的触発とは異なる効果を与えているように思われる。学部教育では、「研究を他者に語る」によって語る側の立場に立つ機会が用意されているが、学部生は、基本的には聴く側の立場からさまざまな講義を受講することになる。それぞれの講義に参加し、「落差の経験をたくさん、とことん味わうというのが、総合人間学部の教育の一番の核〔高橋による発言〕」（白田ほか編 2017: 103）なのである。

とはいえ、そうした知的触発の経験をたくさん味わった後には、それらの経験をどのように受け止めるのか、どのように関係づけ意味を見出していくのか、ということにも取り組まなければならないだろう。自分が興味・関心をもっている事柄の核心は何なのか、おもしろいと思った講義のどの部分が自分にとっては大事なのか、といったことを考えるためには、複数の落差の経験を、自分なりに位置づけ直すことが必要になる。つまり、複数の経験を結びつけ、より広い視野から意味を与えるコンテキストをつくらなければならないのだ。

〔鷺田清一〕その意味では、むかしもいまも教養のポイントは自分でコンテキストを編むことにあるのかもしれない。僕たちは歴史的な存在です。コンテキストのなかにいる。ところが、そのコンテキストはすぐには見えない。自分なりにマッピングするということは、とりもおさず、なぜ自分がこういう存在なのかを知るということですね。（大澤 2018: 51）

本稿が主張しているのは、おもしろかった分野を組み合わせさせて「学際」的な卒論を書かせなければならない、ということではない。一人ひとりの学生が、落差の経験をたくさんして、そこから、それぞれのコンテキストを紡いでいく。そこまで至らなければ、たくさんの落差の経験も、結局は、十分な意味をもち得ないのではないか、ということだ。そうであるとすれば、落差の経験を提供する場だけでなく、コンテキストの編み方を学ぶ場も必要なはずである。

「ものの見方」を比べるという課題を通して、院生が、

<sup>22</sup> この点に注目して、研究が語られる「他者」を分節化したのが、2017 年 12 月の大学教育学会および 2018 年 3 月のシンポジウムでの報告であった。なお、それぞれ 112 頁、104 頁を参照のこと。

自分の専門分野と相手の専門分野とを適切に関係づけようとすることも、一つのコンテキストを編む行為といえる。つまり、総人のミカタは、受講者にコンテキストの編み方を実践して見せる場でもあるのだ。今の総人・人環に、他にもこの役割を果たせる場があるのだろうか<sup>23</sup>。

## 6 おわりに

〈教養教育〉を中心に組み上げられた理念は、一般教養教育の現場で、不均質な学生と対面せざるを得ないことから議論を始めていた。そこでは、専門教育と相補的な役割を果たすために背後の世界観との関係を示し、学問知と「善く生きること」とを合致させようという要求に応じ、前提知識を共有しない相手を触発することが求められる。それぞれの理念は、すべて、専門知に対する「他者」と直面せざるを得ないという状況から始め、この「他者」との対話を通して、学問の細分化によって見失われた根源的な問いに到達しようとする。ここで、もし、根源的な問いに到達できたとすれば、そのとき、「他者」はどうなるのか。恐らく、そこには学問の包括性が現れ、生と結びついた全一的な知に至り、そして、知的触発が生じるだろう。その結果、対話の相手であった「他者」は、ある種の全体性を共有する存在へと変化するのではない。「他者」は、根源的な問いを共有することで、「他者」ではなくなる。これらの理念が想定する「他者」は、教養教育の現実から導き出されたように見えて、実のところは、理想とする弁証法を駆動させるために必要とされているのだ。その意味で、これらの理念は、〈教養教育〉に調和的なものを求めすぎている。

加えて、〈教養教育〉を中心に組み上げられた理念は、多様な専門分野の研究者で構成された組織であったとしても、〈教養教育〉に取り組む態度は全体に共有されているとみなしている。そうすることで、多様な構成員を一つに統合できるのは確かである。だが、この論理を強調すれば、異分野の研究者も、もはや「他者」としては現れてこないだろう。ここでも、これらの理念は、最終的には、「他者」の他者性を見えなくさせる。

総人のミカタがこれらと異なるのは、『『ものの見方』を比べる』という課題が示しているように、専門分野間の差異に着目している点である。その差異を積極的に提示し、一つのコンテキストを編み上げていく。そして、そのコンテキストから振り返って、自己を相対化しようとする。自己—他者の二項で自己相対化を果たそうとするこれまでの理念に対して、総人のミカタは、異分野という第三項を取り入れ、複数の相対化の回路を用意している。そこでは、ある種の全体性に到達することなく、

差異は差異のままであり続けるからこそ意味をもつ。

それゆえ、総人のミカタを、「他者」と、「他者」のままで対話を続けていこうとする試みだということもできる。それは、複数の分野の共同研究としての〈学際〉を達成するためには不可欠の態度といえる。〈教養教育〉を中心に組み上げた理念が示していた学問への原理主義的な態度は、第三項を取り入れることで、〈学際〉の可能性の条件となり得るのだ。

思えば、楕円の一つの焦点から発せられた光は、必ずもう一方の焦点を通るのであった。これまでの理念が、二つの焦点のいずれかに近づいた結果、もう片方の焦点からは離れるばかりだったのに対し、総人のミカタのコンセプトは、〈教養教育〉の理念を精査するところから始まり、〈学際〉を照らし出す道筋を示すことができる。これまで見てきたように、この二つの焦点が選ばれたことは歴史的な偶然に過ぎないし、ましてや、この二つの焦点が重なる必然性はない。ただ、そうした偶然が折り重なった延長にいるからには、二つの焦点を関係づけ、引き受けるあり方があっても良いのではないだろうか。まだ不十分な点も多いかもしれないが、総人のミカタは、そうした試みだといえる。

## 文 献

安達千李・新井翔太・大久保杏奈ほか編、2013、『ゆと  
り京大生の大学論——教員のホンネ、学生のギモン』  
ナカニシヤ出版。

<sup>23</sup> この本稿の立場に対して、コンテキストを編むことは、すでに現在の教育で行われているという主張もあるだろう。実際、学説史を学ぶことは編まれたコンテキストを学ぶことと等しく、また、レポート・論文の執筆は先行研究のレビューを通して自身の研究を位置づけるという点で、コンテキストを編む行為そのものである。したがって、現在行われている専門分野内での教育の延長で、知的触発の経験を自分なりに意味づけ直すことも十分可能だという主張は、正当なように思われる。本稿の立場から、この主張を批判するためには、一つの専門分野内でコンテキストを編むことと、複数の専門分野を関係づけることとの質的な差異を明確に示す必要があるが、結局、それについては検討できていない。その一因は、〈教養教育〉をめぐる理念に比して、〈学際〉の理念を十分に整理できていないことにもあるように思われる。今後の課題としたい。ただし、編まれたコンテキストを提示する、または、コンテキストを編むことを課題とする教育がなされている一方で、コンテキストの編み方を実践して見せる教育がないということは、やはり指摘しておかねばならない。



- 井上義和, 2018, 「知の変容とアカデミズム——講座制・教養部・師弟関係」日本教育社会学会・稲垣恭子・内田良編『教育社会学のフロンティア2 変容する社会と教育のゆくえ』岩波書店, 75-97.
- 白田泰如・佐野泰之・瑞慶覧長空ほか編, 2017, 『学際系学部の教養教育 報告書——教員にとっての学際／学生にとっての学際』.
- 大澤聡, 2018, 『教養主義のリハビリテーション』筑摩書房.
- 佐伯啓思, 2014, 『学問の力』筑摩書房.
- 大学問題検討委員会, 1972, 『大学の未来像について（答申）』京都大学.
- 高橋由典, 2013, 「教養教育について今考えていること」安達千李・新井翔太・大久保杏奈ほか編『ゆとり京大生の大学論——教員のホンネ、学生のギモン』ナカニシヤ出版, 52-6.
- , 2015, 「はじめに」『人環レビュー 2013』: 4-5.
- , [2015]2017, 「『研究を語る』という教育課題——総合人間学部の新たな試み」白田泰如・佐野泰之・瑞慶覧長空ほか編『学際系学部の教養教育 報告書——教員にとっての学際／学生にとっての学際』50-7.
- 新田博衛, 1986, 「学術総合研究科の特色と意義——教養部を中心として」『京都大学大学院学術総合研究科の構想——人類のよりよき生存の条件と可能性の探求』京都大学, 7-12.
- 林哲介, 2013, 『教養教育の思想性』ナカニシヤ出版.
- 藤澤令夫, 1987, 「学術総合の理念について——その真にリアルな根拠は何か」『教養部の改革と学術総合の理念をめぐる諸問題』京都大学, 1-8.
- 渡辺浩一・白田泰如・寺山慧ほか, 2017, 「学際教育を求めて——Interdisciplinarity の歴史と理論」白田泰如・佐野泰之・瑞慶覧長空ほか編『学際系学部の教養教育 報告書——教員にとっての学際／学生にとっての学際』, 105-22.

# 「総人のミカタ」活動年表——始動～2018 年前期

2018 年 9 月 6 日現在

年月日	場 所	分 類	活動内容
2017 年 1 月 29 日			『『総人のミカタ』企画書』を作成する
2 月 19 日			twitter アカウントを開設する
21 日			「企画意図と背景」を作成する
3 月 6 日			「総人のミカタ運営委員会運営規約」を作成する
4 月 8 日	京都府立り溪		総人合宿に参加し企画を宣伝する
～9 日	少年自然の家		
13 日	総人棟 1102	講 義	人環の先輩たちにはなしを聞いてみよう !!
20 日	総人棟 1102	講 義	「自殺」を「社会学」する
27 日	総人棟 1102	講 義	人間発達の謎へのせまり方
5 月 11 日	総人棟 1102	講 義	選挙と政策決定
18 日	総人棟 1102	講 義	構造と公理化
25 日	総人棟 1102	講 義	理解社会学と近代資本主義の成立
29 日			京大オンラインメディア 360°に取材記事「総人からの挑戦状～院生が提示する新しい大学教育のカタチ～」が掲載される
6 月 1 日	総人棟 1102	講 義	人間発達の魅力へのせまり方
8 日	総人棟 1102	ディスカッション	方法の違いと見方の違い
15 日	総人棟 1102	講 義	選挙と政策決定 II
22 日	総人棟 1102	講 義	無限と連続
29 日	総人棟 1102	講 義	地球のすがたを知る
7 月 6 日	総人棟 1102	講 義	地球のなりたちを知る
13 日	総人棟 1102	ディスカッション	「科学」とは何か
8 月 3 日			第 5 回京都大学学際研究着想コンテスト 2017 で書類選考を通過する
10 月			『らいふすてーじ』2017 年 10 月号に「京大探偵団『総人のミカタ』に迫る！」が掲載される 『京都大学総合人間学部広報』59 号に「特集 領域交差型院生 FD 総人のミカタ」が掲載される
5 日	総人棟 1102	講 義	院生が語るホンネの学系・研究室紹介
12 日	総人棟 1102	講 義	見えない「こころ」をどう捉える？
19 日	総人棟 1102	講 義	「定義」の作り方
26 日	総人棟 1102	講 義	ことばを理解するとはどういうことなのか
27 日			第 5 回京都大学学際研究着想コンテスト 2017 で最終発表会に参加する
11 月 2 日	総人棟 1102	講 義	史料に広がる世界を探る
9 日	総人棟 1102	講 義	間主観性でとらえる「こころ」のハナシ
16 日	総人棟 1102	ディスカッション	コミュニケーションを考える
30 日	総人棟 1102	講 義	学際教育について / 物理学の方法、ブランコのこぎ方を例として / そしてあなたは総合人間学部でなにをするか
12 月 2 日	関西国際大学 尼崎キャンパス	学会発表	大学教育学会 2017 年度課題研究集会でポスター発表「学際性を養成するプレ FD——京都大学大学院人間・環境学研究所における院生発案型プレ FD『総人のミカタ』をめぐる」を行う

年月日	場 所	分 類	活動内容
2018 年 1 月 7 日	総人棟 1102	講 義	どのようにして $\lambda$ -(BETS) $_2$ FeCl $_4$ は低温で反強磁性絶縁体転移するのか。そして、その何が楽しいのか？他にどんな楽しいことがあるのか？
14 日	総人棟 1102	講 義	列島の中世を旅する
16 日	人 環 棟 333	特別企画	総人の卒業生の話聞いてみよう !!
21 日	総人棟 1102	講 義	話し手にとってのことは、聞き手にとってのことは
11 日	総人棟 1102	講 義	言葉で私たちは何をしているのか
18 日	総人棟 1102	ディスカッション	「教養」として問うべきもの
3 月 2 日 2 日	総人棟 1102	特別企画	「研究を他者に語る」の先へ 京都大学 FD 研究検討委員会編『2017 京都大学の FD——京都大学の教育を、語り合う』にプレ FD の取り組みとして寄稿文が掲載される
4 月			入学式オリエンテーションで活動を宣伝する
12 日	総人棟 1102	講 義	人環の先輩の話聞いてみよう !!
14 日 ～15 日	京都府立り湊 少年自然の家		総人合宿に参加し企画を宣伝する
15 日	総合館東棟 404	特別企画	学振申請書 (DC・PD) 検討会
19 日	総人棟 1102	講 義	人環の先輩の話聞いてみよう !!
26 日	総人棟 1102	講 義	禁忌と両義性の人類学
5 月 6 日	総合館東棟 404	特別企画	学振申請書 (DC・PD) 検討会
10 日	総人棟 1102	講 義	海洋生物の自然史
17 日	総人棟 1102	講 義	セックス・アンド・ザ・アンソロポロジー
17 日			ミカタのミカタ第 1 回
24 日	総人棟 1102	講 義	文学のミカタ①
31 日	総人棟 1102	講 義	数学における解析学
6 月 7 日	総人棟 1102	ディスカッション	フィールドの風景・探究の現場
14 日	総人棟 1102	講 義	フラクタルと呼ばれる図形
14 日			ミカタのミカタ第 2 回
21 日	総人棟 1102	講 義	文学のミカタ②
28 日	総人棟 1102	講 義	どこからが観光？ どこまでが移動？：観光学入門
7 月 2 日	吉 田 南 総 合 図 書 館		吉田南総合図書館企画「論文・レポート執筆のススメカタ第 3 弾 卒論・修論執筆応援キャンペーン」のリアル卒論・修論展示に出展する (～2018 年 8 月 3 日)
2 日	吉 田 南 総 合 図 書 館		吉田南総合図書館編「卒論・修論体験談 2018 先輩たちはこうしました。」に寄稿文が掲載される
5 日	総人棟 1102	講 義	海洋生物の自然史
5 日			西垣順子氏 (大阪市立大学准教授) により Web サイト「カナリア倶楽部」で総人のミカタが紹介される
12 日	総人棟 1102	ディスカッション	文理の双極: "似" で "非" ? "非" で "似" ?
8 月 2 日	吉田南 総合 図書館・環 on		吉田南総合図書館主催「卒論・修論執筆応援キャンペーン特別企画 総人のミカタ座談会」に登壇する
9 月 3 日			ミカタのミカタ第 3 回
5 日 ～6 日	国際高等研究所		メンバー合宿を開催する

※講義タイトルの副題は省略している。

# 会計報告

2018 年 9 月 6 日現在

総人のミカタは教員等からの寄付金と大学院生の持ち出しを主な財源として運営されている。過去 3 期分の収支を表 1 に示す。また、各期の収支の詳細を表 2 ～表 4 に示す。2017 年度前期は寄付金額が少なかったため赤字であったが、その後は寄付金額の伸びもあり、おおよ

そ黒字である。しかし、総じて財政状況は安定していない。各学期の途中では大学院生の立替金を即時決済できるほどの現金残高がなく、各種のイベントにおいて寄付金を募るまでは一時的に赤字となっていることが多い。

表 1 過去 3 期分の総収支

期	期収入額 (円)	支出額 (円)	差額 (円)
2017 年度前期	26,000	26,702	- 702
2017 年度後期	14,500	7,713	6,787
2018 年度前期	34,000	25,850	8,150
総 計	74,500	60,265	14,235

表 2 2017 年度前期の収支内訳

期項目名	期収入額 (円)	支出額 (円)
寄付金	8,000	-
懇親会参加費	18,000	-
お茶菓子代	-	9,716
懇親会費用	-	16,986
総計	26,000	26,702

表 3 2017 年度後期の収支内訳

期項目名	期収入額 (円)	支出額 (円)
寄付金	14,500	-
懇親会参加費	-	-
お茶菓子代	-	7,713
懇親会費用	-	-
総計	14,500	7,713

表 4 2018 年度前期の収支内訳

期項目名	期収入額 (円)	支出額 (円)
寄付金	24,000	-
懇親会参加費	10,000	-
お茶菓子代	-	8,155
懇親会費用	-	17,695
総計	34,000	25,850

# メンバー紹介

2018 年 9 月 6 日現在

## ◆共生人間学専攻

- ・ 伊縫 寛治（いぬい かんじ）：博士後期課程 2 回生。  
大阪大学基礎工学部卒業。専門は数学、力学系。
- ・ 岡久 太郎（おかひさ たろう）：博士後期課程 3 回生。  
東京学芸大学教育学部卒業。専門は認知言語学、相互  
行為研究。
- ・ 近藤 真帆（こんどう まほ）：博士後期課程 2 回生。  
京都大学総合人間学部卒業。専門は心理学、精神障  
がい者ケア。
- ・ 須田 智晴（すだ ともはる）：博士後期課程 2 回生。  
京都大学総合人間学部卒業。専門は数学、力学系。
- ・ 谷川 嘉浩（たにがわ よしひろ）：博士後期課程 3 回生。  
京都大学総合人間学部卒業。専門は哲学、観光学、教  
育学。
- ・ 町田 奈緒子（まちだ なおこ）：博士後期課程 3 回生。  
京都大学教育学部卒業。専門は発達心理学、質的研究、  
セクシュアル・マイノリティ。
- ・ 真鍋 公希（まなべ こうき）：博士後期課程 2 回生。  
京都大学総合人間学部卒業。専門は社会学、映像研究。
- ・ 三升 寛人（みます ひろと）：修士課程 1 回生。島根  
大学法文学部卒業。専門は分析哲学。
- ・ Loredana Scorus（ロレダナ スコルシ）：博士後期課  
程 3 回生。ブカレスト大学外国語学部卒業。専門は  
美学、日本庭園論。

## ◆共生文明学専攻

- ・ 大森 穂乃香（おおもり ほのか）：修士課程 2 回生。  
京都大学文学部卒業。専門は日本近代文学。
- ・ 竹田 響（たけだ ひびき）：修士課程 2 回生。中央大  
学総合政策学部卒業。専門は文化人類学。
- ・ 田中 瑠莉（たなか るり）：修士課程 1 回生。立教大  
学観光学部卒業。専門は文化人類学、観光学。
- ・ 福田 真郷（ふくだ まさと）：修士課程 3 回生。京都  
大学文学部卒業。専門は文化人類学。
- ・ 三宅 香帆（みやけ かほ）：博士後期課程 1 回生。京  
都大学文学部卒業。専門は国文学。
- ・ 村上 絢一（むらかみ じゅんいち）：博士後期課程 2  
回生。京都大学総合人間学部卒業。専門は歴史学、日  
本中世史。
- ・ 山根 直子（やまね なおこ）：博士後期課程 2 回生。  
同志社女子大学表象文化学部卒業。専門は日本近代文  
学。

## ◆相関環境学専攻

- ・ 杉谷 和哉（すぎたに かずや）：博士後期課程 3 回生。  
京都府立大学公共政策学部卒業。専門は公共政策学、  
政治学。
- ・ 萩原 広道（はぎはら ひろみち）：博士後期課程 1 回生。  
京都大学医学部人間健康科学科卒業。専門は発達科学、  
リハビリテーション学。
- ・ 山守 瑠奈（やまもり るな）：博士後期課程 1 回生。  
京都大学農学部卒業。専門は海洋生物学。

## ◆修了生

- ・ 近藤 望（こんどう のぞみ）：博士後期課程 2017 年度  
修了。京都大学総合人間学部卒業。相関環境学専攻(岩  
石学・地球化学)。
- ・ 瑞慶覧 長空（ずけらん ちょうくう）：修士課程 2017  
年度修了。京都大学総合人間学部卒業。相関環境学専  
攻（物性物理学）。

## ◆学部生サポーター

- ・ 飯田 昇平（いいだ しょうへい）：京都大学総合人間学  
部 2 回生。
- ・ 橋本 悠（はしもと ゆう）：京都大学総合人間学部 2 回  
生。

（専攻別、五十音順）



- ① 他分野の院生とつながる！
- ② 教育経験につながる！
- ③ 自分の研究にもつながる！

分野越境型院生FD

# 総人のミカタ

毎週木曜5限 (16:30～18:00)

総合人間学部棟1階

人環院生

企画協力者 大募集中！

主催：人間・環境学研究科院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会  
後援：京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部  
お問い合わせ：下記webページ「お問い合わせ」、またはsojin.no.mikata@gmail.comまでご連絡ください。

詳細はこちら

総人のミカタ 検索



webページ

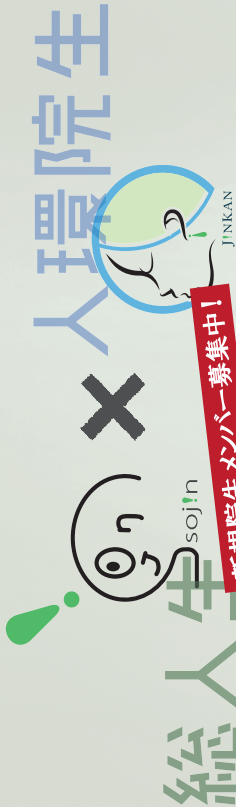
facebook

twitter

LINE



「総人のミカタ」とは、人間・環境学研究科で多種多様な学問分野を専攻している大学院生が、総合人間学部の学部生に向けてレシー形式の模擬講義を行う企画です。



新規院生メンバー募集中！

「総人のミカタ」では、新規院生メンバーを募集中！

修士・博士後期課程は問いません。もちろん、文系・理系も問いません。

ご興味をもっていただけたら、webページやSNS、またはメールにてお気軽にご連絡ください！

sojin.no.mikata@gmail.com

毎回の流れ ※運営上の都合で変更になる場合があります。

日時： 毎週木曜日 5～6限

場所： 総合人間学部棟 1階 1102講義室

16：30～17：30 人環院生による模擬講義

- ・2回の講義と1回の学際ディスカッションを担当します
- ・自分の専門の「ものの見方」を伝えるというテーマにあわせて、事前に題材や方法を計画します
- ・講義の実施日は、準備の時間なども考慮して、担当者の予定を優先して決めています

17：30～18：00 フリートーク

- ・数名のグループに分かれて、学生生活などいろいろな話題を話しながら学部生と交流します
- ・講義の内容についての感想や質問を受講生から直接聞くこともできます

18：30～19：30 フィードバック ※人環院生のみ

- ・講義の方法や内容に関して、よかった点、修正した方がいい点などを率直に言い合います
- ・他分野の視点から意見をもらうことで、次の模擬講義の課題がはつきります
- ・参加者を実施したアンケートから、学部生の理解度などについても検討します

企画の意図

1. 実際に講義を経験できる

- ・模擬講義では主な対象である学部生に向けて、自分の専門分野の「ものの見方」を紹介する講義を行います。講義の題材や形式は自由に選べます。
- ・効果的な講義について考え、実践した経験は、将来、教員になった時に必ず役に立ちます。
- ・また、他分野のメンバーの講義から、参考になる方法や進め方のヒントも得られるでしょう。

2. 自分の研究や分野を見つめ直すきっかけに

- ・講義やフリートークでは、学部生から頻りに質問を受けます。また検討会では、講義について他分野の院生の意見ももらいます。
- ・これらは講義の改善だけでなく、研究の中で自明視していた点への気づきにつながります。つまり「総人のミカタ」は教授法の改善だけでなく、自分の専門分野を見つめ直し、相対化するきっかけにもなるのです。

3. 他分野との距離感を学ぶ

- ・「総人のミカタ」では講義だけでなく、講義を担当した異分野の院生との学際ディスカッションも行います。「学問の世界の中でどこに位置づけられるのか」という地理感覚を、登壇者・受講者とともに身につけることが目標です。
- ・相手の論点をつかみ、的確に議論を進めるのは難しいですが、専門に閉じこもってはいけません。こうした経験も、必ず今後の研究に生きてくるでしょう。

総人のミカタ

主催： 人間・環境学研究科院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会  
後援： 京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部  
お問い合わせ： 下記webページ「お問い合わせ」、またはsojin.no.mikata@gmail.comまでご連絡ください。



## 第2部 講義

## 【講義紹介】

各講義の概要。Web サイト掲載用に執筆されたもので、受講生に語りかける文体になっていることが多い。

## 【講義を終えて】

担当者による講義後のコメント。Web サイト掲載用に執筆されたもので、受講者からの質問に返答しているものもある。2018 年度前期からは、「2 回目に向けて」「1 回目以降の改善点と手応え」も記述するようにした。

## 【院生質疑と回答】

2017 年度後期から正式に導入された。院生アシスタントによる質問とその意図、講義担当者からの回答が記載されている。

## どこからが観光？ どこまでが移動？：観光学入門

2018 年 6 月 28 日実施 / 担当：谷川嘉浩（哲学・観光学） / 通常回（第 1 回）

## 講義紹介

観光学とは何か？——この問いに、「イエス」、つまり「最近観光した」と思ったら、どこに行ったのでしょうか。この講義では、こうした素朴な疑問から始めることにします。

「観光」は私たちの生活の中に、ありふれた形で確認することができます。フェイスブックが観光のログと化している友人があなたにもいるでしょう。けれど、観光学において、また「観光」を定義しようとしている人はいないに等しいのです。定義しようとしても、本論に活きてこない定義を序論で申し訳程度にやるだけというのが実情です。

この講義では、「観光」ということで、私たち（＝当日教室にいる人）はどういうことを想定しているのかを考えてみましょう。また、当日は、観光学（Tourism Studies）という複合的に込められた意味合いをシリアスに受け取ることで、またにも必要十分な観光の定義を考えるのではない方で、「観光」を考え、「観光学」をイメージしてみることにします。

良いというわけでもないけれど、基本的には家にいたいし、ずば抜けて観光するのが好きではないという方もいかもしれません。というが、私がそうです。そんな人間が、観光学のどこを面白いと思ったのかという点まで話せるのではないかと思います。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標**：観光の必要十分な定義の不可能性。「観光」は、どんな視点から見かに応じて内実を変えるフレーム／プリズムであるということ。その視座の一環に代わるものとして、観光学内のさまざまな分野があること。

**講義の進め方**：【～15 分】観光の経験についてフロアに聞き、観光概念を自明にしているということを確認する。観光事例をいくつかスライドに表示し、何が観光に該当するか、フロアに聞く。【～30 分】観光を定義する際の説明を紹介し、現在の観光学は読者の共通理解を深めることを示す。【～45 分】歴史的文脈を加えたあとで、現代の観光学にあたるものを批判的に紹介する。余裕があれば、英語圏での

学会成立を追い、その系譜を描く。【～1 時間】時間が足りなければ、前の話の続き。最後に、観光学と出会った経緯、観光学を面白いと思えたジョン・アーリーの『観光のまなざし』について触れる。以上はスライドを用いる。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想**：観光学という分野があることに驚いた方も多かったようでした。普段来ない参加者が来てくれたことも嬉しかったです。

他の講義は 2 回ある中で、1 回ですべてを聴こうとした結果、やや詰め込み気味になったかもしれません。観光学という分野の概観と、自分独自の研究・視点の両方に言及することは避けられないことでした。今後の授業編成に宿題として残したいと思います。

感想を聞いていると、学習分野（Discipline）でない、観光学という学際的な分野（Studies）の特性にかかわるものが多くありました。

「観光学の理論的な学際性と、実態との乖離を意識しながら、冷笑的にならずに、自分はどう研究していくのか」という個人の関心を、総合人間学部、人間・環境学研究所という「学際」を理念に掲げる環境において、実態を意識しつつどう振舞うのかという個々人の問題につなげてもらえたような気がします。

難って、観光学の中の私だけでなく、研究科の中の私について、改めて見つめる機会になりました。ありがとうございました。



## ◆院生質疑と回答

① **観光の誕生はいつか？**（質問者：宗教的な目的を帯びた物に近代社会の「観光」と今（私たちが経験する「観光」との関係を、歴史的な側面から探ろうとしたから）

⇒ **回答**：19 世紀におけるマス・ツーリズムの成立が一つの画期となった。特定の国家の国民に主体が限定された「観光」からの脱却はそれより時代が下る。

② **観光学はどこまでできる？**（質問者：観光学を総合人間学部で学ぶにはどうすれば良いのか提示して欲しいから）

⇒ **回答**：その気になればどこでもできる。ただし指導教員に観光学への関心があるかは別。

## ◆アシスタントコメント

今回の講義では観光学という学際的な学問領域に対して、哲学の立場から検討がなされました。観光学の研究史、観光現象の範囲、日常性との関係、等々の検討素材を経由して、なお執拗に「観光」を（定義すること）にこだわった点に今回の講義者の立場がうかがえます。「観光学者は、観光の定義を（実質的に）語っている」という現状から逃げることなく、真摯に向きあった中で生み出された貴重な成果だったと思います。これはあらゆる学際研究が抱える課題への一つの回答とも言えるでしょう。

さて今回は「観光の誕生はいつか」という質問を用意しました。わが国では観光古道や観音霊場といった中世以来の「巡礼」地が知られています。時代が下って近世（江戸時代）ではいわゆる「参詣」が有名ですが、こちらは「巡礼」の性格とともに「観光」の性格も見いだせるようです。こうしたとき、宗教的な意味を帯びた土地への移動や「旅」というものが、「観光」とどのような関係にあるのか、批判的な観点から検討することで、また次の問いに進むように思います。村上（歴史学）



## 検討会でのコメント（一部）

## 【良かった点】

- ・観光学の現状批判をしながら、シニクになり過ぎない程度という方が良かった。
- ・到達目標を示した点。
- ・アニメの例など、自身の関心を明示した点。
- ・抽象的な考えを観光に当てはめていくという谷川さんのスタイルが出ていて良い。
- ・Studies と Discipline の問題なので、緩人らしい問題につながっていた点。

## 【改善すべき点】

- ・パソコンが何度かフリーズした。
- ・せっかく体験談を集めたのだから、もっと使っても良かった。
- ・マイクを持ったまま笑うのが気になる人がいるかも（笑うときは静す）。
- ・観光の定義を広げていくと、異化作用と何が違うのかという問題になる。観光の独自性をどう扱うのか、観光学という Discipline の扱いがどうなるのかという疑問につながる。
- ・観光をやっている人が自分の Discipline に依拠しているという点も、これに批判的なのかどうかがわからなかった。
- ・定義をアップデートしていったが、どこが変わったのかもっと強調できた方が良かった。
- ・観光は旅と一緒に論じた方が良かった。
- ・差異を経験することとは、どういふことなのか。例えば、ストリートビューの場合は？ 観光は、具体的な身体経験や移動がやはり必要に思う。
- ・用意した資料を使わなかった。
- ・講義が 1 回だけだと新興ジャンルは同じパターンになりそう。2 回あることで、パリエーションが増える。ミカタの講義が 2 回あることの意義はここにある。

119

## 【講義の目標・内容について】

講義担当者が作成したシラバスの一部（転載）。「一般的な講義や入門書との違い」は、年度や回によって記載の有無が異なる。

## 【アシスタントコメント】

院生アシスタントによる講義後のコメント。2017 年度後期から導入された。Web サイト掲載用に執筆されたもので、講義内容のレビューも兼ねている。

## 【検討会でのコメント（一部）】

講義後にメンバー内で行なわれた検討会・フィードバックの発言録から一部を抜粋した。また、「受講者向けアンケート」で寄せられた受講者からの質問や意見も記載した。

※1 特別回（導入、異分野ディスカッション）ではレイアウトが一部異なっている。

※2 各項目の詳細については、第 1 部 第 1 章「活動概要と運営体制」（2 頁～）を参照のこと。

# 人環の先輩たちにはなしを聞いてみよう !!

2017 年 4 月 13 日実施 / 担当：講師全員 / 特別回（導入）

## 講義紹介

皆さんはどうして総人を選んだのですか？ これから総人でどんなことをしようと思ってますか？ 初回は私たち、総人のミカタの講師メンバーが、1 回生だった頃を振り返りつつ、どうして今の専門分野で研究をしているのかをお話します!! それぞれに紆余曲折がありながらも、一貫した思いで歩んできた道のりを、反省や皆さんへのアドバイスも含めて紹介していきます。

後半では参加者の皆さんと、総人でしたいこと、大学の講義の感想、これからの勉強方法や大学生活のことなどについて、気軽にお話する時間もつくりまします。お茶やお菓子も準備していますので、ぜひお越しください!! お待ちしています。

## ◆講義を終えて

今回はメンバー 9 名の自己紹介と、今の専門に辿り着くまでの道のりを中心にお話しました。気になる対象はなんとなく決まっていたけどどうアプローチするのかで専門を迷った人から、いろいろな専門や研究室を渡り歩きながら今のテーマを見つけた人まで、進路を選択するときに経験した悩みは人それぞれでしたが、メンバー全員に共通していたのは、最初から明確な目標や将来像があったわけではなく、手探りで自分の興味や関心を突き詰めてきたということでした。

総合人間学部は学際系学部ということもあって、今回参加してくれた総人生の中にも、自分のしたいことがなかなか見つけられないという人がいたと思います。少しだけ先輩である僕たちが今回伝えたかったのは、自分の目標をすぐに決める必要もなければ、その目標のために突き進むことだけが「良いこと」でもない、ということです。正確に言えば、僕たちがそんなことを言っても説得力がないんですけどね（笑）。でも、ストレートに目的地に着いてしまうより、寄り道をしながら目的地を探していく方が、楽しい旅になると思いませんか？ これからこの企画を、そんな旅のための地図や方位磁針のようなものにしていきたいと思います。

院生メンバーの情熱が余りすぎて、予定の時間をオーバーしてしまいましたが、それでも多くの方がフリートークの時間まで残ってくれて、いろいろとお話ができて

良かったです。まだまだ話したりないこともあると思いますので、来週もぜひお越しください!

真鍋（社会学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・人数は総人合宿のアンケートよりは下回ったが、聞いている態度を見る限りは満足度が高かったように思う。
- ・フリートークを延長して残ってくれた人も多かった。需要には応えられていたのではないかな。
- ・自己紹介の後、院生個々人のことについて、より詳しく聞いてくれる学生もいた。それぞれ関心が出てくることもありそうだと期待できる。

### 【改善すべき点】

- ・写真の肖像権のことは口頭で伝えたり、スライドやレジュメで伝達したりということを徹底する必要がある。
- ・上回生をもっと引き込んでいけるような工夫があると良い。
- ・アンケートの裏面の記入が乏しい。慌ただしかったのもあり、アンケートの記入時間をしっかりとった方が良い。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・第 1 回、いろいろな話が聞けて楽しかったです。





# 「自殺」を「社会学」する

2017 年 4 月 20 日実施 / 担当：真鍋公希（社会学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

さて皆さん、人はなぜ自殺をしてしまうのでしょうか。「その人の個人的な事情で生きることが苦しくなり、あるいはその人が悲観的な性格だったせいで、自らの意思で命を絶ってしまったのだろう」。きっとこのように考える人が多いと思います。この極めて個人的な行為にみえる「自殺」が、実は「社会」によっても規定されていると言うと、皆さんはどう思いますか。死刑や戦争によってもたらされる死や、交通事故のようなアクシデントならまだしも、自ら選んだはずの「自殺」でさえ「社会」によって引き起こされると主張しているのですから、これには違和感を覚えるのではないのでしょうか。

「社会学」とは、人間のさまざまな行為を「社会」によって説明していく学問です。人間は絶対にどこかの社会に所属していますから、その社会に知らないうちに拘束され、その拘束のもとで行為を選択します。だから社会学では、自殺のように個人が選んだように見える行為も、実は社会の影響を受けた結果だと考えるのです。

今回は、フランスの社会学者 E. デュルケーム（1858～1917）の自殺の分析を見ていくことで、こうした社会学の基本となる「ものの見方」を学んでみましょう！！

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**総人のミカタ、記念すべき初回の授業を担当しました。来てくれた皆さんありがとうございました。今回は社会学の古典の王道である『自殺論』の一部をテキストに沿って読み解きながら、「社会的な考え方を理解する」と「研究方法のポイントを知り体験する」という2点を、講義の目標として掲げていました。「研究方法のポイントを知り体験する」という観点では、有名なプロテスタントとカトリックの自殺率の違いを引き起こす理由について、2つの宗派の違いを資料に示したうえで、ペアワークで皆さんに実際に考えてもらいました。この部分は比較的好評だったようで、アンケートでは「他の人と意見交換でき、一方的な講義でないのが良かった」「社会学の研究方法に触れられて、自分のやろうとしていることとは違うように思ったが、面白かった」という意見もいただきました。

一方で院生の反省会では、社会的な考え方を示す序盤の抽象的な話の進め方、全体的なペース配分や質問をした後のフォローの仕方、資料の不手際など、改善点もたくさん指摘してもらいました。これらの点は、メンバー間で共有して次回以降の講義に活かしていきたいと思います。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**「人間の行為を「社会」によって説明する」という社会学の基本的な視点を理解する。

**講義の進め方：**E. デュルケーム『自殺論』のうち、自己本位的自殺と呼ばれる類型を中心に扱う。統計データを分析した研究なので、実際のデータを用いて講義を進めることで、デュルケームの統計データの解釈を迫体験してもらう。形式は基本講義だが、解釈のところでペアワークも検討。導入 10 分⇒『自殺論』40 分⇒まとめ 10 分。

**一般的な講義や入門書との違い：**社会学史や入門講義では知識として紹介されがちな『自殺論』の内容そのものについて、受講生自身に考えてもらう。統計の結果ではなくて、そこからどのような解釈を引き出し、一般化していくのかという研究方法を経験してもらう。



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 全体的にわかりやすくまとまっており、面白い。
- ・ 導入の問いかけとインタラクションが面白かった。学問の入り口が伝わったのでは。自分で勉強になるなと思って聞いていた。
- ・ 終了後、1 回生が講義を踏まえながら質問していたので、理解が行き届いていたし、疑問を引き出す良い講義だったのではないかと思う。
- ・ メディアの使い方はうまい。スライドを双方向的に使うなど。
- ・ 高校の縛りのきつさなど身近なところに落とし込んでいる受講者がいて良かった。
- ・ プロテスタント・カトリックの違いの話はペアワークの課題としてはうまくいっていた。回答者が前の回答者の意見を批判するようなことがあったのでフォローを。

### 【改善すべき点】

- ・ 質問の仕方について気になったことは、質問するけど、「なるほど」でおしまいになってしまう。ある程度どんな答えが来ても応答した方が良い。
- ・ 好みにもよるが、ペアワークは興味本位で来た程度の人には敷居が高く感じられるかもしれない。
- ・ 専門用語、日常語と違うところを説明しなかった。
- ・ 聞いたあとの回答について、さらっと流すときがあって（特に後半の余裕がなくなって）、もう少し取り上げても良かったのでは？ と思う。
- ・ もう少し具体的な導入ができれば良かった。
- ・ 前半はフィードバックが丁寧だったが、後半はそうではなかった。
- ・ 個人でのシンキングタイムが最初にあると良い。
- ・ 質問は複数人に一気にするよりは特定の人に限り、話を進める方が良い。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ 社会学の研究方法に触れられて、自分がやろうとしていることとは違うと思ったが面白かった。
- ・ 他の人と意見交換でき、一方的な講義ではないのが良かった。
- ・ 誘導がわかりやすく、内容が理解しやすかった。



# 人間発達の謎へのせまり方——実験課題を考えてみる

2017 年 4 月 27 日実施 / 担当：萩原広道（発達科学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

皆さんも、わたしも、生まれたときは赤ちゃんでした。言葉をもたず、直立二足歩行もできず、他者はおろか、自分自身ともうまくコミュニケーションをとることができないまま、この世界に仲間入りしたのです。それなのに、赤ちゃんは生後約 1 年で歩くことができるようになり、そのおよそ半年後には有意味語を発するようになります。わたしたちはみな、当然のようにこの来し方をもって、さらに成長・発達を遂げ、いまを生きています。でも、自分が通ってきた道であるにもかかわらず、わたしたちは「なぜ歩けるようになったのか」「どうやって言葉を習得したのか」といった問いに明快な解を与えることはできません。発達科学は、このような人間発達の謎に迫り、そのメカニズムを明らかにしようとする学問です。

この講義では、人間の発達の軌跡（奇跡）を動画で簡単に紹介した上で、発達科学に関するいくつかのトピックについて取り扱おうと思います。「運動」「認知」「言語」「社会性」などから受講者の皆さんの興味に応じて実際に行われた研究を示し、発達の魅力・面白さに迫ります。研究の「結果」というよりも「問いを解決するためにどのような工夫を施したのか」について皆さんと一緒に考え、議論しながら、研究のプロセスを味わいたいと考えています。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**①当たり前だと思われていることが、実は謎だらけだということを知る。②発達研究における実験方法の工夫について思考し、自分が研究するときのイメージを膨らませる。

**講義の進め方：**【～ 15 分】人間発達について動画を見ながら概観する。【～ 20 分】研究の対象・目標、主な方法論、関連する分野についてざっくりと説明する。【～ 55 分】実験で明らかにしたい「問い」と、方法論の概要を最初に伝えて、方法論の工夫のポイントについて受講生に考えてもらう。【～ 60 分】まとめと次回予告。

**一般的な講義や入門書との違い：**受講者自身が卒業論文などで研究することを考慮して、研究の「結果」よりも、その結果が導き出された「過程」に力点を置く。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**本講義では、発達科学の中でも「子どもの言語発達」の研究を紹介しました。真鍋さんの社会学の講義では人間を「集団」としてとらえて、社会的な枠組みからいろいろな事象を見つめるという「ミカタ」でした。それに対して、発達科学では「個々」の人間の成長・発達の軌跡をつぶさに見ていくことが多いです。その意味で、それぞれの学問分野の違いがくっきりと対比できる内容になったのではないかと思います。さて、院生の反省会で挙げたトピックについて、3 つほど補足しておきます。

①「機能」という用語について。この用語は少しわかりにくかったかもしれませんね。「名詞」の発達でいうところの機能は、例えば「櫛」なら「とかす」とか、「フォーク」なら「刺して食べる」というように、それぞれの道具に固有の使用法のことを指します。前回の講義では、「モノの名前」と「コトバ」とを結び付けるときに、「形」が大事なのか、この「機能＝使用方法」が大事なのか、ということを確認する実験課題について考えました。とても面白いアイデアを皆さんが挙げてくださったので、時間が足りないくらい白熱しましたね。もしかすると、次回の萩原担当回で「答え合わせ」するかもしれません……でも、できたら自分で調べてみてほしいなあとも思います。

②ネタの消化。眠気覚ましにと思って出した写真ですが、「あれは何だったの？」と聞かれたので、ここで消化しておきます。仮装で有名な京大卒業式ですが、萩原はなんと「青色 LED」に扮しました。ただ、わかりにくかったのかマスコミには一切声をかけられず、一部の理系学生だけがざわざわ……と反応してくれました（笑）。ちなみに、卒業式で「蛍の光」斉唱の間、会場でひとりピカピカと発光していたことを申し添えておきます。

③文献検索の方法について。京大では、いろいろな学術雑誌をフリーで読むことができます。論文を探すときの検索方法について、もっと詳しく説明したかったのですが、時間の都合でさっと流してしまいました。このやり方は、次回の萩原担当回の冒頭で丁寧に紹介したいと思いますので、知りたい方は早めにお越しください！



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

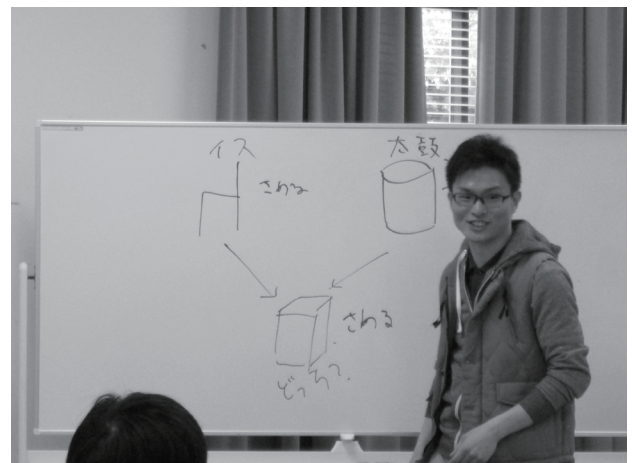
- ・トークもうまく素材の使い方も印象的。
- ・みんな楽しんでいた。
- ・導入はすごく良かった。

### 【改善すべき点】

- ・ラスコーの壁画について説明が必要だったかも。
- ・ネタの出し惜しみがあったのが気になる。
- ・受講者アンケートに「わからなかった言葉や概念はありましたか？」といった項目を入れたら良いのでは？

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・入門科目との差別化があるのか少し疑問。
- ・この分野に興味がもてました。



# 選挙と政策決定——何を基準に投票すべきか

2017 年 5 月 11 日実施 / 担当：杉谷和哉（政治学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

この国には選挙というものがあります。選挙をするとき、テレビニュースや新聞、インターネットなどを通じて、さまざまな情報が飛び交います。それぞれの立候補者は、自分がもちろん当選したいわけですから、いかに自分が良い候補者であるか、また、自分たちの政党が良いところであるかをアピールします。特に、若年層の投票率が低いことが問題になっていますから、政党も若年層に投票してもらえよういろいろなことをやっています。また、新聞をはじめとするメディアや NPO も、若年層にもっと政治へ興味を持ってもらえるようにキャンペーンを行っています。こういったキャンペーンやイベントで多く言われているのは、「この人が何となく良い人だから」とか、「お父さんと知り合いだから」といった理由ではなく、しっかりと「政策」を見て投票しましょう、ということです。確かに、しっかりと政治家や政党が何をしたいのかを調べて、投票することの方が良いように思えます。

ですが、話はそう単純でもありません。あらかじめ「この政策をやります」と言っているにもかかわらずできなかったり、政策が思っていた効果を生まなかったりすることがあるからです。この講義は、私たちが投票するときに、政治家や政党の政策をどのように見れば良いのかについてささやかな手がかりを提供しつつ、答えのない問いである政治の問題について、皆さんと一緒に考えていくことを目的としています。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**受講者に政治や政策を考える手がかりを与える。政治学や公共政策学の知見を用いて、一体それらの学問が何を考えているのかを示す。

**講義の進め方：**政策についての理論や先行研究について講義。PPT かレジュメ。政党のマニフェストやパンフレットを配布してどこに投票するかを考えてもらう（なぜこの政党が良いのか、この政治家が良いのかについて簡単に議論してもらうのもアリ？ 一回目は講義だけにした方が良くかもしれない）。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回の講義は、政治の難しさをみんなと一緒に考える内容でした。政治学や公共政策学の入門講義ではなく、政治の難しさを強調しながら、「わかりやすい」だけではダメなんだ、というメッセージをお伝えしました。今までの二回の講義とはまた、一味違ったものだったと思います。講義後の反省会では、レジュメの作り方や、講義の内容、伝え方など、多岐にわたる指摘、助言をもらいました。次回の講義でできるだけ反映させたいと思います。アンケート及び、反省会で出た内容を踏まえて、いくつか補足をしたいと思います。

①政治における「右」と「左」について。かなり雑に流してしまいましたが、政治において「右」と「左」という概念は非常に重要です。語源は、フランス革命期に議長席から右側の位置に保守的な人たちがいて、左側に革新的な人たちが位置していたところからきていと言われています。一般的に、「右」あるいは「右翼」と呼ばれる人たちは伝統を重んじ、急進的な改革に批判的です。「左」に位置する人たちは、伝統よりも人間の理性を重んじ、急進的な改革を望んでいると言われています。しかし、今日ではこれらの言葉は非常に多義的に使われています。講義で触れたフランスの政治家、マリーヌ・ルペン氏は、「極右」と呼ばれていますが、彼女は移民の受け入れを拡大することに反対しており、EU に批判的です。ルペン氏はまた、国際協調よりも自国を強くすることを重視しています。こういった傾向はドナルド・トランプ大統領とも共通しているポイントです。ルペン氏やトランプ大統領は大きく言って「右」に括られる政治家です。ただ、国ごとによって「右」や「左」とされる人々の主義・主張は異なっているので、注意が必要です。この辺りはかなり複雑な議論があります。次回の講義でも、もう少し補足できればと思います。

②民主主義について。民主主義という概念は非常に難しく、複雑なものです。ブックガイドであげた、佐々木毅『民主主義という不思議な仕組み』は、とてもよくできた入門書ですので、もう少し深く考えてみたい、という人は一度手に取ってみてください。

③選挙について。今回の講義では政治の難しさを強調し過ぎるあまり、皆さんの政治への関心の芽を摘んでしまったかもしれません。ただし、政治や政策について完璧に理解していなかったとしても、選挙に行くことはで

きますし、選挙に現に行っている人たちも完璧に政治について知っているから行っているという訳でもありません。奨学金の問題や就職など、皆さんがこれから直面する、あるいは今直面しているさまざまな問題を出発点に、政治について少しずつ考えていけば良いのではないのでしょうか。

④政治的中立性について。中立に気をつかって喋っていた、という鋭いコメントをいただきました（笑）。よく見えていますね。政治学を教えたり、投票や選挙について講義をしたりする際に難しいのはこの点です。教壇の上から、一方的に「こっちの方が良い」と教えることは政治教育の文脈ではご法度だとされています。なぜなら、教師のような立場にある人の発言は、生徒達にとって大きな影響力を持っているからです。教師がどちらかに偏った考えを教えることは、生徒達から自由に考えることを奪うことになりかねません。ただし、政治において何らかの考えや特定の主義主張を全く持っていない人は本当にいるのかどうかというのも難しいところです。場合によっては、「中立」という立場でさえも、誰かを暗黙裡に応援することに繋がりがかねません。また、どれ程注意を払っても、教えている人の好みや主観が入ってしまうものです。誰かが言っていることを鵜呑みにせず、自分で吟味する能力が必要とされています。

⑤政治の難しさは分かった、で、私たちは何を学べば良い？「政治学のディシプリンや学説を教えてほしかった」というコメントをいただきました。確かに今回の講義ではほとんど触れることはしませんでしたね。今回の講義では、政治の難しさを前提とした上で、政治の問題にアプローチする学問はどう考えてきたかを皆さんにお伝えしたいと思います。最後の部分で、政治の難しさを前提とした上で、「皆さんはどんな一歩を踏み出すか」という問いかけをしました。が、今回の講義では私が踏み出した一歩がどんなものなのかをお伝えできればと思います。もちろん、今回の講義に来られなかったという人も大歓迎です。

⑥「わかりやすいことはだますこと」。印象に残った人が多かったようなので、この言葉について最後に補足しておきます。これは私自身が考えたものではなく、ガヤトリ・C・スピヴァクという比較文学者・思想家の言葉です。スピヴァクは政治学者ではありませんが、そのテキストからは学ぶこともたくさんあります。彼女の本はかなり難しいですが、機会があれば手にとってみるのも良いかもしれません。

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 院生同士の質疑について、質疑を見せること自体に意義がある。
- ・ シャベリや間の取り方、立ち位置の動き方は設計されていた。
- ・ 講義の意図を種明かししたのは良かった。
- ・ 院生質疑のライブ感は良いのでは。
- ・ スライドは遊びがあって良かった。

### 【改善すべき点】

- ・ 良くも悪くも一方向。スライドではなく、黒板を用いて勢いでやった方が良いのでは。
- ・ 見出しの違いはわかりづらい。
- ・ 良くも悪くも柔らかい。で、政治学では……という話を少し付け加えるだけでも良いのでは。
- ・ スタイルが完成されているからそれで良いけども、早口なところは直した方が良い。
- ・ 両方併記スタイルは止揚してほしい。踏み込んだ議論の紹介をする必要がある。
- ・ あのシャベリ方で会場に質問すると、レトリカルなのか本気なのかかわからない。問いかける意味じゃなくて問題提起的なものと感じてしまう。
- ・ 講義はわかりやすいが、他方で物足りないのでは。
- ・ 結局難しい問題だということを示すだけでなく、それが学問的にどう扱われているのかを示した方が、じゃあ本読んでみようということにつながるのでは。





# 構造と公理化

2017 年 5 月 18 日実施 / 担当：須田智晴（解析学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

「無限」とは、誰にでも馴染みのある概念である。それが何かははっきりわからなくても、何かしらかのイメージは持っているのではないだろうか。しかし、この概念は決して簡単なものではなく、ときに不合理を生む。無限にまつわるパラドックスは数多く、それらはどれも一筋縄ではいかない。

さて、数学と無限とは密接に関わっている。例えば自然数全体という対象を考えた瞬間、私達は無限を相手にしていることになる。それでは、無限による不合理を回避するため、数学はどのような方法を用いているのか？ それを知るにはまず数学の方法論を把握しておく必要がある。

そこで今回は、公理的方法という考え方を紹介する。これは大まかに言って、公理により考察の対象を規定するという方法である。そして、この方法論こそが数学を数学たらしめていると言っても過言ではない。数学とは公理により定まる構造を対象とした学問なのだ。紹介するさまざまな具体例を通じて、このことを実感していただければと思う。

理化については説明不足だったため、理解できず難しいと思った方も多かったかもしれません。その点については申し訳ありません。しかし少なくとも、日頃よく知っている簡単な対象でも、きちんと定式化するのはかなりの大仕事になるということは伝わったでしょうか。なお、今回配布した演習問題の答えは次回に配る予定です。

さて、今回は無限をテーマに講義を行います。この概念にまつわるパラドックスもいくつか紹介する予定ですので、お楽しみに。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**公理的方法とは何かを説明する。また、さまざまな具体例を通じて数学の考察対象にもいろいろあるということを実感してもらう。特に、自然数のように直感的には簡単な対象でも公理化すると案外むずかしく見えるということを実感してもらう。

**講義の進め方：**基本的には板書により説明する。また、ハンドアウトも配布する。

**一般的な講義や入門書との違い：**一般的な数学の講義では「共通認識」として言及されることの少ない事柄について述べたい。また、入門書ではあまり見かけないような具体例を多数紹介したい。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**初回は数学の方法論についてのお話をしましたが、いかがだったでしょうか。大学以上の数学は高校までの数学とは一味違うということを感じていただけたなら幸いです。また、最後に紹介した自然数の公



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 締まりのある講義で良かった。バリエーションが広がる。
- ・ 板書の良さがあった。しゃべり方に不満はあまりない。
- ・ 終わった後に深刻な表情で何か考えている感じがして良かった。

### 【改善すべき点】

- ・ だから、いや、とかが口癖で意味を持っていない。
- ・ 演習問題で実際に手を動かせた方が良かったのではないか。
- ・ 個別の具体例があった方が良い。
- ・ 受講生にとっては自信なさそうにも見える。
- ・ 受講生からの質問は回収できたのか。
- ・ 反応が二極化するのさもありなん……という立場は良いけど、両方拾うなら授業の流れを言っておいた方が良かった。
- ・ 結構全体的に難しかった。
- ・ 院生の質問は少し消化不良。
- ・ しゃべり方に安定感あるが、黒板に向いているときが多い。しゃべるのと書くのとメリハリをつけるべき。
- ・ 横の体重移動はしぐさとして微妙。もう歩いたら良い。
- ・ 板書は良いけど時間がかかる。時間プランは複数あった方が良い。
- ・ 専門用語が多かった。順番は工夫できるのでは。



# 理解社会学と近代資本主義の成立

2017 年 5 月 25 日実施 / 担当：真鍋公希（社会学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

第 1 回では「人間の行動を社会が及ぼす拘束力から説明する」ことが、社会学の基本的な「ものの見方」であることを説明しました。つまり、社会⇒個人という方向性について考えたのですが、今回はそれとは逆、つまり個人⇒社会という方向について、社会的に考察してみたいと思います。

そして今回考えるテーマはずばり「資本主義」。私たちはモノやサービスを効率的に取引する経済活動を行って、日々の生活を営んでいます。このような経済活動のことを資本主義と呼ぶことができますが、今日につながる近代資本主義には、それ以外の時代の経済活動とは異なる特徴的な精神性があります。その精神性とは「無駄を徹底的になくし、より多くの利益を生み出す」ことを重要視する、「合理的」な活動こそが望ましいとする態度です。それでは、この精神性はいつごろ、どうして生まれたのでしょうか？

第 1 回のときにとりあげたデュルケーム『自殺論』とならぶ社会学の有名な古典である、M. ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』を読み解きながら、この問いに対してウェーバーはどのように答えを提示したのかを一緒に見ていきましょう。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**いわゆるミクロ社会的なアプローチの考え方を知ると同時に、質的な研究方法についても理解する。

**講義の進め方：**ウェーバーが解釈した資料を提示し、そのあいだにどのような精神性の差異を見出すことができるのかを考えさせる。今回は対話形式を試みる。初回のデュルケームとの対比関係を示す。

**一般的な講義や入門書との違い：**教科書では知識や結論が先行しがちな『プロ倫』の内容について、ウェーバーの思考を辿りながら、質的なデータの扱いを学ぶ点。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回の講義では、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』を通して、「個人⇒社会」という方向性を考えること、それから、文献を使った質的な研究の論理構成を捉えること、を講義の目標にしていました。前回の『自殺論』が「社会⇒個人」と量的な研究ということだったので、単発で受講しても大丈夫だけれど、2 回受けると相補的な内容になるという構成にしたのですが、参加された皆さんはいかがだったでしょうか。

最後の院生質疑では、この二つの論点をさらに引き出してもらえ、質問をもらいましたし、フリートークでも引き続き、関連した話題で皆さんとお話することができました。興味を持ってもらえたようでとても嬉しいです。機会があればぜひ『自殺論』『プロ倫』を実際に読んでみてください。

また量／質という調査方法の違いと、「社会⇄個人」の関係に注目するという社会学の見方は、再来週の萩原・真鍋のディスカッションの切り口になります。今回参加したという人も、できなかったという人も、来週、再来週のミカタにぜひ遊びに来てくださいね。

また前はスライドでしたが、今回は板書を使った講義スタイルに挑戦してみました。テンポが遅く感じたという感想ももらったので、まだまだ改善の余地がありますが、それでも個人的には楽しく、手ごたえを感じながら講義ができました。ディスカッションはしませんでした。対話形式の質問には鋭い返答をもらったので、僕自身も勉強になりました。





## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- 黒板、話し方ともに良かった。ダイナミックで良かった。
- 宗教改革 500 年は良かった。みんなが知っている話題で余談は大事。
- 後半、熱さがあって良かったのでは。

### 【改善すべき点】

- 黒板ではテンポが遅く感じられた。もっとテンポ良くても良かったのでは。
- もう少しインタラクションがあっても良かった。
- インタラクションするときはフロアに向かってする。
- 受講者がお客さん感覚でいるから間延び感が出る。レジュメ引用については読み上げてもらうという手もある。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- 黒板は慣れていないでしょうし、間延びしてしまうので使わない方が良いのでは。



# 人間発達の魅力へのせまり方——発達障害児との遊びを見つめる

2017 年 6 月 1 日実施 / 担当：萩原広道（発達科学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

わたしたちは、言葉を交わすことで他者を知り、自分の気持ちや考えを伝えますよね。けれども、それは当たり前のことではありません。言葉を介した他者とのやりとりが可能になるためには、その発達の基盤として、「カラダ」を介した「環境」とのやりとりがとても大切です。ここでいう「環境」は、モノとの関わりという物理的環境と、ヒトとの関わりという社会的環境とを合わせたものです。

この講義では、自閉スペクトラム症児 1 名を対象とした作業療法のセッション場面（子どもと萩原との「遊び」の動画）を観ながら、「カラダ」と「環境」とのやりとりそのものが成立していく過程について、受講者の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。「環境」とのやりとりの拮抗りと深まりが、言語を介したコミュニケーションの土台として重要な役割を果たしているということを実感してもらえると嬉しいです。

前回は「実験」を使って「量的」に発達をとらえる視点を紹介しましたが、今回は「実践」の中で「質的」に発達をとらえていきます。同じ学問分野の中にも、その手法や考え方に共通点や違いがあることを知ってもらえるよう工夫したいと思います。また、冒頭で前回の講義の概要と補足説明を行う予定です。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**①当たり前だと思われていることが、実は謎だらけだということを知る。②「研究」になりきらない「実践」の観察を通して、日常の疑問から仮説を生成する過程を体験する。

**講義の進め方：**【～ 10 分】前回の補足。【～ 15 分】作業療法の紹介。【～ 55 分】作業療法場面の動画を見ながら、受講者と議論を進める。特に、「当たり前」が成立しない世界や、「どのように仮説を生成するか」の過程に焦点を当てる。【～ 60 分】まとめ。

**一般的な講義や入門書との違い：**受講者自身が卒業論文などで研究することを考慮して、日常場面から仮説を導き出す「過程」に力点を置く。また、受講者と一緒に、講師も考える。「登壇者＝すべてを知っている人」では

なく、受講者とともに不思議がる存在であることを示し、大学での学びは単なる知識伝達ではないことを知ってもらう。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**発達科学、2 回目の講義はいかがでしたか。院生の反省会では「アナーキーな講義」と評されました。狙ってやったとはいえ、うまく整理がつかず混乱したという方も多いかもかもしれませんね。ちょっとだけ反省です。

感想で気になったコメントをひとつだけ。「強み／弱みという考え方は問題ではないか」という主旨のものです。確かに、「この子は〇〇には強い／弱い」と断定してしまうと大いに問題アリです。けれども、あえてそのような切り口で眺めてみると、漠然と流れていた情報が整理されやすくなって展望が開けてくることも事実です。質的な研究手法もしくは実際の臨床では、このように「手段的に」ある切り口から場面を捉えて、それを参照軸にするということがよく行われていると思います。いったん仮説を立ててみる、そうしないと情報はただの景色として流れてしまうからです。ここで大切なのは、「こういう切り口で見ているぞ」ということに自覚的であることです。講義中にもお話しましたが、「〇〇が弱み」だと思ったら、次に「それを強みとして捉えるとどうなる？」というように視点を反転させたり、「他の場面でも確認できる？」というように立てた仮説を疑ってかかったりします。この類の手法を取るなら、この第二の作業は必ずセットになります。

「発達科学」の専門家は多かれ少なかれ、何かしらかの「発達観」「子ども観」をもっていると思います。そのような価値観に依拠して研究するという宿命をもった学問ですから、危なっかしい部分もたくさんあるでしょう。けれども、それでも非常に重要な分野だと僕自身は思っています。次回のディスカッションの回で、この点についても議論を深められたらと思います。ぜひご参加ください！

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 前回と比べてスムーズ。
- ・ 双方向的なコミュニケーションは良い。記憶にも残りやすい。

### 【改善すべき点】

- ・ 周りの人とのディスカッションなど、学生に考えてもらうことに時間を使いすぎ。学問的な内容をもっと入れても良いのでは。
- ・ 意図していただろうが、グループの意見を聞くときに他の班が喋っていて、少しカオスな感じになっていた。意見を聞くときは全体が傾聴するようにコントロールした方が良い。
- ・ 強み・弱みという言い方が良くないという意見について、表裏一体という話はしたけど、大事などころを伝える工夫が必要。
- ・ 実践の位置づけなど、最後駆け足になったのが少し残念。
- ・ 自分の分野のストーリーに収束させる必要があるのではないか。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ 一筋縄ではいかない、とても時間と手間のかかる、緻密で面白くて素敵な分野だと思いました。
- ・ 「発達障害児は階段を横に歩いている」という言葉は非常に印象に残った。





# 方法の違いと見方の違い——社会学と発達科学

2017 年 6 月 8 日実施 / 担当：萩原広道（発達科学）・真鍋公希（社会学）  
・近藤真帆（心理学：司会） / 特別回（異分野ディスカッション）

## 講義紹介

社会学と発達科学、これまで 2 名の講師がそれぞれ個性的な講義をしてきましたが、どうだったでしょうか？ 2 人の講義は対象や内容が全然違っていましたが、実は共通して、それぞれの分野の量的・質的な研究方法を 2 回の講義に分けて紹介してきました。今回はその共通点を手がかりに、各講義の内容も少し振り返りながら、お互いが異分野だからこそ生まれる疑問や問題意識を遠慮なくぶつけ合う「学際ディスカッション」を行います。このディスカッションを通して、それぞれの分野の「ものの見方(ミカタ)」の違いが、よりくっきりと浮かび上がってくることでしょ

う。後半は他の院生や参加者の皆さんにも議論に混じってもらって、これまで出てきた違いを乗り越えて、社会学と発達科学の間で、真の「学際性」を達成するためにはどうしたら良いのか、ということについても話を広げていきたいと思います。2 名の講師のこれまでの講義を受けてきた人はもちろん、ミカタに初参加の人も大歓迎です。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**二人の講師の議論を通して、各分野のものの見方の違いを対比的に示す。単に同じ対象を扱うというを超えた次元で、二つの分野の差異を乗り越える可能性について、意見交換する。

**講義の進め方：**【～ 10 分】各講義の復習（双方の視点から質的・量的なものを扱った）。【～ 15 分】互いにそれぞれのアプローチについての質問。【～ 25 分】お互いの質問に回答（登壇者でもう少し話を広げる？）。【～ 90 分】他の院生⇒参加学生という形でフロアに開いていく。

**一般的な講義や入門書との違い：**共通の対象を扱うことを超えた次元での学際的な研究の可能性を考察する。

## ◆講義を終えて

学際ディスカッション 1 回目、参加された皆さんありがとうございました。最初は真鍋・萩原両講師が、お

互いに質問をぶつけあうことから始まり、後半は学部生からも多くの質問をもらって、充実した議論をすることができたように思います。90 分間のつもりでしたが、結局 18:30 過ぎまで議論するという白熱した時間になりました。議論は拡散する一方で着地点を見出すことはありませんでしたが、お互いの分野に対して抱いていた印象が変わったり、意外な共通点が見つかったりして、登壇者としても学ぶことの多い時間でした。また参加者アンケートで「この企画は学際的だったと思いますか」という質問に対して、「学際的とは何かがわからないので何とも言えない」という主旨の回答をもらいました。このような回答をもらった一因は議論が収束しなかった点にあるのでしょうか、たかだか 90 分で「学際的」な着地点を見いだすよりも、参加してくれた方の中にそもそも「学際とは何か」という、より根本的な問いが生じたということの方がむしろ、企画として成功しているのではないかとメンバー一同考えています。



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

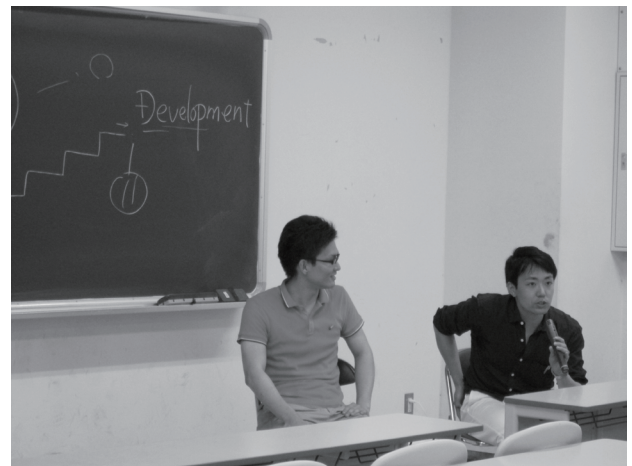
- ・ 進行が大変スムーズであった。
- ・ 研究に向かった個人史的な背景と学問の中身の話題がどちらも出され充実していた。

### 【改善すべき点】

- ・ 一回の発言が長い。端的な形でまとめるべき。最初に結論を述べるべき。
- ・ 質問を板書する書記が必要ではないか。
- ・ 予想以上に時間が延長した。
- ・ 登壇者の返答を司会が要約するなど工夫が必要。
- ・ フロアとの応答が少なかった。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ 社会学や発達科学が哲学から受けた影響はどのようなものか。
- ・ 社会学において個人はどのように考慮されるのか。
- ・ 小さなスケールの集団を社会的に考えるときの利点／欠点について。
- ・ アソシエーションや学校への通学などの社会的な慣習が発達に与える影響について。
- ・ 大学生を社会的・発達科学的に考えると？
- ・ 社会と個人の関係を問う社会学の意味。
- ・ 「豊かな発達」とは具体的にどんな意味を持つか。



# 選挙と政策決定 II

2017 年 6 月 15 日実施 / 担当：杉谷和哉（政治学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

前回の講義では、政治の難しさをお伝えしました。投票に行かないと私たちの意見は伝わらない。かといって、投票に行ったとしても満足のいく結果が得られるとは限らない。政治とはとても難しいものなのです。今回の講義は、そのような前提を踏まえた上で、政治学が何を考えてきたか、このような政治の難しさはどう向き合ってきたかについてお話したいと思います。

ところで、政治学を勉強している、という、「政治家になりたいの？」と訊かれることがあります。このような話は、この頃は減ったと言われているのですが、確かに、なぜ政治について学ぶのかという疑問は常に存在しています。政治学は、政治家になりたい人、あるいは政治に関わりたくない人にとって、無関係なものなのでしょうか。

今回の講義では、政治学が考えてきたことを伝えることによって、私たちが生きる中で関わっていく政治の問題とどう向き合うべきかについてお教えしたいと思います。また、この政治学とも非常に深い関係がある公共政策学に関しても、今回の授業でお話します。政治学と公共政策学がどう違うのか、これ自体実はすごく難しい問題なのですが、皆さんが今後、学問の世界に飛び込もうとするときに参考になる、ざっくりとした地図をお渡しできればと考えています。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**政治学がどういった学問なのか、それを学ぶ意義を伝える。

**講義の進め方：**PPT か板書。①政治学は政治家になるための学問？⇒違う。市民が政治学を勉強する意義を先行研究をもとに説明する。②公共政策学って何をするの？⇒学際的な学問であると同時に、「役に立つ」ということを貪欲に目指している、という側面をプラスに捉えたい（役に立つ、というのを批判的に捉える風潮の逆張り？役に立ってって良いんだよ、と伝えたい）。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回の講義は、前回で説明した政治の難しさを踏まえたうえで、政治学が現実の政治の問題とどう向き合ってきたかについて話しました。学問が社会にいかに関わるべきかという問題は、非常に深く、答えが出ないものです。日本では、1990 年代、政治学が現実政治の改革に大きな役割を果たしましたが、結果だけを見れば、政治改革の結果は芳しくないものになっています。しかし、政治学は既に新しいアプローチから、現実政治を改革しようという試みを展開しています。その試みに終わりがくることはないでしょう。政治学は決して「政治家になりたい人」や、「政治に特に関心がある」といった一部の人のための学問ではないのです。

反省会では、発表のスライドの内容や、喋るスピードなどについてアドバイスをいただきました。今後に活かしていきたいと思います。学生からのご意見に答えます。

「リベラル」の定義について。今回の講義では、保守派が伝統を重視するのに対して、リベラル派は人間の理性を重んじている、とごく簡単に説明しました。リベラルが理性を重んじている、というテーゼに違和感をおぼえた方がいらっしゃいました。補足しておく、このことは決して、保守派が理性を軽視して、学問的な営みに携わってきていないということを意味しているのではありません。根源的な部分では、これは人間観に関わってくるものです。

保守派は、人間ができること、人間という存在そのものは限界を内包していると考えます。このことから、人間が理性を行使して何もかもを思い通りにできる、という発想を批判します。人間が伝統を軽んじ、理性のみで社会をつくろうとした結果が、フランス革命後の混乱であり、社会主義の悲劇だった、と彼らは考えます。このようなことを踏まえ、人間の理性よりも、長い間続いてきた伝統や文化といったものの方が重要で、価値があるものだとし、それらを大切にすべきだ、と主張するのが保守と言われる立場の人たちです。

これに対してリベラル派は、人権や平等といった普遍的な価値を大切だと考えます。それらは、人間が理性を行使することによって生まれる考えです。リベラル派は、伝統や文化といったものに人間を抑圧する側面があることを指摘します。そして、人間は理性をもって世界を良



い方向に導くことができると考えています。

これら二つの考え方には、それぞれ良い面もあれば悪い面もあります。どちらの立場をとるかは皆さんの自由です。それぞれの立場から書かれた優れた政治学の本もあります。そういったものを読む中で、自分がどのような立ち位置にいるべきか、ということを考えてみるのも良いかもしれません。

ある意見で、リベラルは「外国が好きだけ」ではないかというものがありました。確かに、一部のリベラル派の意見の中にはそうに映るものもあるかもしれません。ただ、思想や立場を考える上で重要なのは表層的な意見や言説のみに捕らわれるのではなく、それらの根底にある人間観、世界観をしっかりと掴むことにあります。一部の言説に拘泥して、実感や自分が知りうる狭い世界のみで臆断することは、人や思想を判断する上で好ましいことではありません。どのような立場をとるにせよ、その発言の奥底にある発想や信条について思いを馳せることが重要なのです。

政治的な対立においては、これらの信条は重要な意味をもちます。本当の争点はどこにあるのか、何が今、問題になっているのかといったことは、上述した粘り強い思索と考察を経なければ分かりません。政治学もこういった問題を常に考えてきた学問の一つであり、学問とは、世界を見る枠組み＝世界観を私たちに与えるという重要な役割も担っているのです。

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 割とうまくはいていた。前回は受けすぎていたので、このくらいが普通かな。
- ・ ジョークが受けなかったときの敗戦処理がうまくいった。

### 【改善すべき点】

- ・ 教室前方が暗くて遠いのでノリについていきにくい。物理的に遠いということがノリに関係している。
- ・ アクションがあっても良い。
- ・ 焦っている感があった。引き出しをほかに持っておくか、ジェットコースター的に引き上げておくか。
- ・ 一回どこかでインタラククションを入れた方が良かった。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ 前回は考えさせられるスタイルだったが、今回は講義形式でそのバランスが良かった。



# 無限と連続

2017 年 6 月 22 日実施 / 担当：須田智晴（解析学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

前回から予告していたように、今回は「無限」を扱う。この概念は決して単純ではなく、安易に取り扱えば不合理を生む。そのように危険な無限を数学はいかにして飼いならしたかを伝えるのが、今回の講義の主なテーマである。数学における無限の取り扱い方は慣れてしまえば単純であるが、発想の転換を要する。その工夫を味わっていただければ幸いである。

さて、高校以来慣れ親しんでいる「実数」の概念と無限とは非常に深い関連がある。このことを実感していただくため、実数が数学ではどのように定義されるのかも紹介したいと思う。そこでのキーワードは「連続性」である。

講義の最後に、無限にも種類があるという驚くべき事実を紹介したい。自然数も実数も「無限個」存在するが、後者の方が圧倒的に「多い」のである。このことを示すのはそれほど難しくはないので、時間があれば講義でもその証明を紹介したい。

後に、前回の演習問題の解答を添付いたします。今回お配りした演習問題の解答はまた次週に公開したいと思います。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**数学における「無限」の取り扱い方を紹介する。また、実数がどのように定義されるのかを見る。最後に、無限にも「種類」があることを説明する。

**講義の進め方：**黒板に板書することで進める。可能な限り具体例を用いて説明を行う。

**一般的な講義や入門書との違い：**一般的な大学 1 回生向けの講義ではあまり触れられない話題を選んで紹介したい。また、入門書よりも具体的な問題に即して説明を行う予定である。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回は数学における無限の取り扱い方や解析学の基礎である実数の定義の仕方を大まかに紹介しました。言葉足らずな面が多々あり理解が難しかったかもしれません。すみません。

極限の操作のように普段使っている言葉で説明すれば比較的簡単なものであっても、それを厳密に定式化することは難しいということが伝わったならば幸いです。最



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

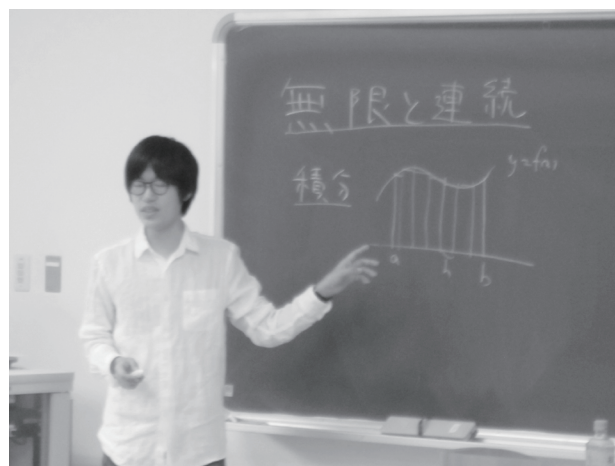
- ・ 数学的に面白い概念があるとわかったのは良かった。

### 【改善すべき点】

- ・ 概念の説明はあったが、数学という学問分野がどういうものの見方をしているのかについての言及がなかった。
- ・ 今回、半ば意図して突き放したが、もう少し練ればもっとついてこられる話し方、間の使い方ができたのではないかな。
- ・ 板書の内容をもっと受講者目線に。パラドックスを不思議ですねーというのはダメなのでは。初回よりも親切度が激減した。
- ・ 講義の意図や構成の説明、内容の全体的な意味を説明する。
- ・ 論述を見せてあげるのではなく、直観的なイメージを見せてあげることを心がけた方が良かった。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ デテキント切断について、よくわからなかった。





# 地球のすがたを知る

## ——地表から地底まで、我々の足元には何があるのか

2017 年 6 月 29 日実施 / 担当：近藤望（地球科学） / 通常回（1 回目）

### 講義紹介

私たちは日本という島国に住み、この日本は四方を海に囲まれている。そして海の向こうにも他の島々や大陸があり、これら海と陸地は大気に包まれ、大気のさらに向こうには広大な宇宙が広がっている。以上のような描像は私たちが一般的に持っているものと思うが、これらは地球という惑星のほんの表層のすがたに過ぎない。地球の内部は非常にゆっくりと、しかし大規模に動いており、この地球内部の動きが表層環境にさまざまな影響を与えている。

講義 1 回目では地球の内部には何があり、どのような過程で我々の生きる表層環境が保持されているのか、を話題とする。特に、現在の地球のすがたを語る上で欠かせない、地球内部と表層を繋ぐ「プレートテクトニクス」に焦点を置いて話を進める。

だが、楽しんでいただければ幸いです。

次回講義では、地球の誕生と進化について紹介し、なぜ太陽系の惑星のうち地球だけで生命が繁栄したのかを解説します。今回よりもわかりやすい構成と話運びを心がけますので、ぜひ観きに来てください。

### ◆講義の目標・内容について

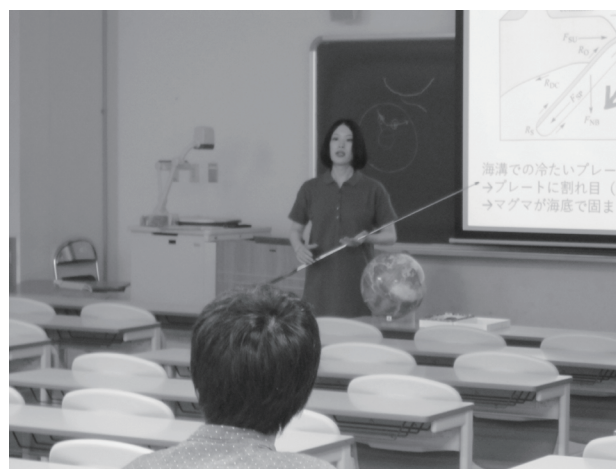
**講義の目標：**聴衆が地球の内部、表層のすがたや相互作用を知ること、自分の生きる世界について新しい見方を得ることを目標とする。

**講義の進め方：**①地球の表層環境（大陸と海、大気、生物）。②地球の内部構造（金属核、マントル、地殻）。③プレートテクトニクス。以上の項目について、質問を随時受けながら講義を進める。②では、地球内部を構成する岩石に実際に触れてもらい、地球内部についてのイメージ構築の助けとする。

**一般的な講義や入門書との違い：**教科書の内容も研究結果次第で覆されることがあることや、未解明の部分にも言及しつつ講義を進め、質問も随時受けることで、登壇者と聴衆が疑問を共有する。

### ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回の講義では、紀元前から現代まで、人々が地球のすがたをどんな手法で、どのように捉えてきたのかを紹介し、地球の表層環境が地球内部の活動によって守られる仕組みについて説明しました。皆さんがこれまでに聞いたことのある内容から最新の話まで、盛りだくさんで多少忙しい講義となってしまいました



## 検討会でのコメント（一部）

【良かった点】

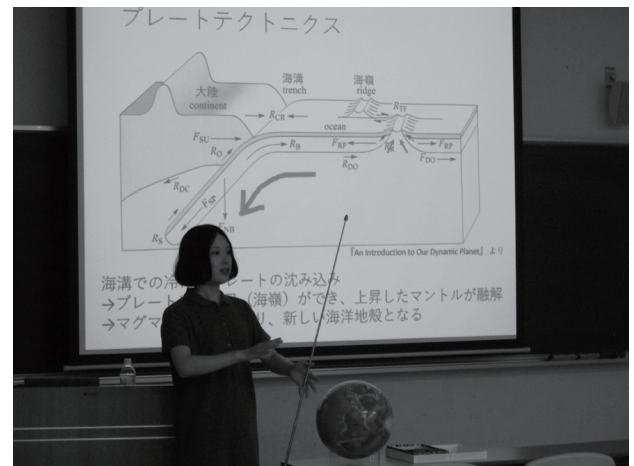
- ・ 安定している授業。面白かった。
- ・ 質問のタイミングは良かった。今回の学生に合っていた。
- ・ 指示棒良いね。
- ・ 授業が終わったあとに、近藤さんが持ってきた石を触っていた受講生がいて良かった。
- ・ スライドもすごく見やすかった。
- ・ 受講生の食いつきが良かったのが印象的。他の講義での振る舞いと少し違ったかも。
- ・ とてもまとまっていた。質問の相互性も良かった。
- ・ 講義全体はバランスがとれていた。

【改善すべき点】

- ・ 学生に対するつかみ、インタラクションがもう少しあったら良かったかも。
- ・ 科学史の話（天動説、地動説）から、自分の分野への流れが、構成としてわかりやすかったのかどうか。普通に昔話として聞いているだけの人も多かったのでは。前半と後半のつながりをはっきりさせると良い。
- ・ 「触れる」体験などが、授業内に盛り込めると良かったかなと思った。
- ・ 単に質問するだけでなく、「この辺疑問に思いませんか？」と疑問を呼び起こす箇所、受講生から課題を引き出す箇所があれば良かったと思う。
- ・ 講師自身が、スライドを見ている時間が少し長い。
- ・ 動きなどの説明は、ヴィジュアルで見せてあげると良い。
- ・ 小話などもあるとつかみとして良い。
- ・ 講義全体の構成と、構成意図を最初に説明した方が良い。目次を出すなど。
- ・ 高校の知識との接続があると良い。その知識を前提に講義内の問いをつくると良い。
- ・ スライドごとのつながりに口頭で配慮してもらえるとよりわかり良い。

【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ニュートリノあたりの話が難しかった。
- ・内核の中のS波は、外核を経由してはいないのか？ 外核を伝わったP波によって内核でS波が生まれると考えた方が良いのか？



# 地球のなりたちを知る

## ——地球はどのように生まれ、進化し、生命を育んできたのか

2017 年 7 月 6 日実施 / 担当：近藤望（地球科学） / 通常回（2 回目）

### 講義紹介

現在、地球は大陸と海、大気をその表層に有し、内部には核、マントル、地殻といった層構造がある。地球内部と表層は互に関わり合いながら、地球を生命の棲める星として維持しているが、このような機構は地球の誕生時からあったわけではない。地球の始まりは、大陸も海も大気もなければ、内部の層構造もなく、全体が超高温のマグマで覆われていたとされる（マグマオーシャン）。

この極限的な状況から、どのようにして現在の地球のすがたへと進化してきたのか、を講義 2 回目の主題とする。太陽系のほかの岩石惑星（水星、金星、地球）との比較も行い、特に、地球のみが有する海と大陸の形成、プレートテクトニクスの始まりに焦点を置いて話を進める。

たか、についてお話ししました。前回よりも話の筋は追いやすかったのではないかと思います。授業全体を通して講義形式となり、もう少し参加形式の時間が取れると良かったと反省しています。

受講者の皆さんとの疑問の共有や、ひとつの地球科学の問題を一緒に考えてみる、といった参加型の授業にも挑戦してみたいと思います。また、グラフの読み方や熱力学などの数式の扱い方、といった自然科学の基礎的な技法を体験してみる授業も参加型として面白いかもしれません。今回の授業の経験を活かし、次の機会により良い授業が出来ればと思います。

### ◆講義の目標・内容について

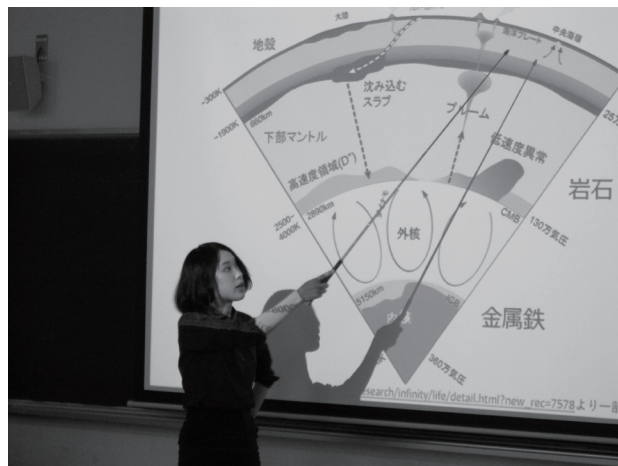
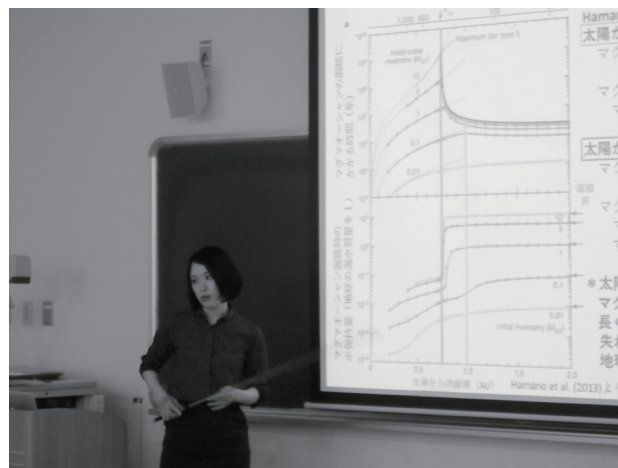
**講義の目標：**聴衆が地球の形成過程と内部、表層の進化を知ること、自分の生きる世界について新しい見方を得ることを目標とする。

**講義の進め方：**①地球の誕生（太陽系星雲内での地球の誕生と、マグマオーシャンの形成）。②マグマオーシャンの固結と大気、海の形成。③プレートテクトニクスの駆動と大陸の形成。以上の項目について、質問を随時受けながら講義を進める。地球の材料物質とされる隕石や、30-35 億年前の海底、大陸の岩石に実際に触れてもらい、地球 46 億年の進化に多少なりとも実感を覚えてもらう。

**一般的な講義や入門書との違い：**教科書の内容も研究成果次第で覆されることがあることや、未解明の部分にも言及しつつ講義を進め、質問も随時受けることで、登壇者と聴衆が疑問を共有する。

### ◆講義を終えて

**コメント・感想：**前回は地球のすがたを人々がどのように探求し、どう理解してきたか、そして現在の地球科学者たちが捉えている地球像と残る謎について紹介しました。今回は、人間が登場するはるか昔に地球がどう誕生して進化したか、初期の地球で生命がどのように誕生し





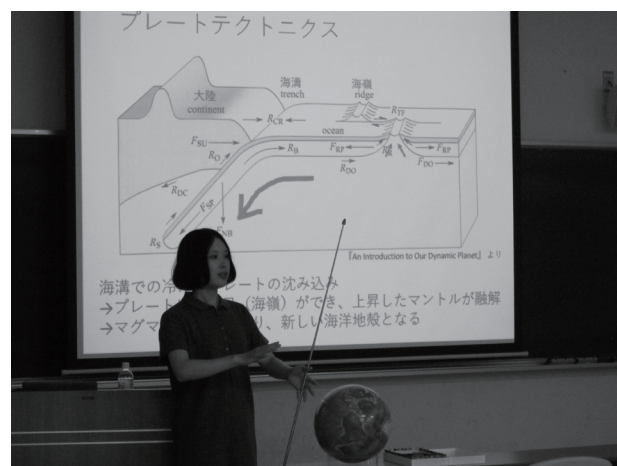
## 検討会でのコメント（一部）

【良かった点】

- ・ とてもよくまとまっていた。
- ・ 新しい情報があったのはすごく良かった。楽しそうな話題に触れたのは、入門系の講義としては良かったのでは。
- ・ 前回指摘した内容が反映されていて良かった。
- ・ 3つのサイクルにまとまるのはなるほど思っ  
た。
- ・ 高度な内容だったけどわかりやすかった。

【改善すべき点】

- ・ 中心課題とわかっていることが混ざっているから、もっと分けて提示した方が良い。
- ・ もうちょっと前に詰めて座ってもらっても良い。
- ・ スライドレジュメだとみんな見ているだけになってしまうから、配布資料の位置づけをどうするかを考えた方が良い。
- ・ スライドのタイトルは、要点や結論よりも問いの方がわかりやすい。
- ・ スライドのほうを向きがち。体を学生に向けるのが大事。
- ・ 地球科学という学問分野が、他の分野と違ってどういう観点、どういう手法をとっているのかを言えると、ミカタの構成として良い。自然科学の代表として、他の分野と比較するような話を盛り込んでいけると、さらに良かった。
- ・ 講義になってしまっているので、もっとアクティブラーニングを盛り込む余地を。
- ・ スライドは PDF に出力してから印刷する方が良い。
- ・ 語尾の声が小さくなっていた。
- ・ グラフの読み方を一緒にやるのはそれはそれでアクティブラーニングになる。
- ・ 理系の人にとって教養教育を行うことを基礎トレーニングとは違う形で提示できるのか。



# 「科学」とは何か——政治学・解析学・地球科学の議論を通じて

2017 年 7 月 13 日実施 / 担当：近藤望（地球科学）・杉谷和哉（政治学）・須田智晴（解析学）  
・村上絢一（歴史学：司会） / 特別回（異分野ディスカッション）

## 講義紹介

科学的根拠、科学的認識、科学的態度……。『科学』は、奇跡や迷信などから区別される知的態度として、私たちが持つ知識の確からしさを保証してくれるように見えます。大学をはじめとする研究機関で日々遂行される営みもまた『科学』として、社会から一定の信頼を得ているようです。ところでそもそも『科学』とは何なのでしょう？ 本講義では、政治学・解析学・地球科学の各分野より一名の講師が、白熱した議論を通じてこの巨大な問題に取り組みます。キーワードは、〇〇学における〈真理〉・〈方法〉・〈展開〉。それぞれの学問は、何を明らかにするのか。そのためにどのような手法を採るのか。どのような来歴を経て現在に至るのか。そして未来に向けてどのような責任を持つべきなのか。対象を異にする学問の「ミカタ」の違いを確認することで、『学際』研究への共通の視座が見出せるのかもしれない。総人のミカタ発足の年、2017 年度前期の掉尾を飾る本講義への、皆さまの積極的なご発言を歓迎します。

## ◆講義を終えて

ディスカッションを振り返って。地球科学(自然科学)・数学(形式科学)・政治学(社会科学)を専攻するメンバーが登壇し、歴史学(人文科学)に携わる村上が司会を務めました。通常なら科学史・科学哲学の専門家が論じるはずの内容を、実際の研究過程と手続きを知る各分野の専門家が論じる。これが今回のディスカッションで意図したものです。事前の打ち合わせ抜きの議論では、『科学者集団とその見解の社会的自立性』『研究費をめぐる諸政治』『科学における演繹と帰納』等々の論題が多岐に亘り、質疑盛況のなか終わりました。

「宗教と科学の違い」について。これは学部生の方からいただいた質問の一つです。登壇者のいずれもが自身の学の『科学性』に葛藤していましたが、そもそも『神』のような視点から事物を『完全に』観察・記述することは不可能です。研究者は、固有の思想や立場、公理に依拠せざるを得ず、その限りで認識の限界を持ちます。研究者の見解は『科学者集団』内部での永続的な検討と相互批判の対象に据えられますが、一体その営為は一個の宗教世界で共有される世界観の形成過程と本質的な違いはあるのか。私もまた、その成案を得ていません。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**①自然科学・社会科学・人文科学それぞれの立場から、実地における研究手法の相違を踏まえ、『科学』の意味を考察する。②学際研究の前提となる諸『科学』に共通する視座の獲得を目指す。③学部生からの発言を促し、全学部的な問題意識の涵養をはかる。

**講義の進め方：**【～15分】杉谷・須田・近藤の各講義まとめ【～45分】『『科学』とは何か』について討議。「あなたの学問は『科学』ですか。どのような点において『科学』と言えますか。『科学』でなければ、どのような学問であると言えますか」と質問。回答にあたっては、〈真理〉〈方法〉〈展開〉への言及を意識する。【～90分】フロアに開いてディスカッション。質問用紙の回収後、質問をプロジェクターで表示しながら進める。

**一般的な講義や入門書との違い：**専門の科学史・科学哲学の視座に対して、個別『科学』の立場より、研究手法と意識の違いを踏まえて『科学』を捉える。



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・事前の打ち合わせや、論点整理をしなかった割には、よく議論が進んだ。
- ・聞いていて面白いディスカッションになっていた。
- ・多くのフロア参加者が前方に座っていた。
- ・司会による論点の引き出し方、回し方がすごく上手だった。

### 【改善すべき点】

- ・フロアとのオープンディスカッションの時間が少なかった。
- ・途中から聞いている感じだと、レジュメを見てもあまり内容がわからない。
- ・特定の登壇者が話す時間が長く、発言時間のバランスが悪い。
- ・質問の内容を板書する書記が必要。
- ・登壇者の発言が並列したまま終わった感があり、議論の結果が出てない。
- ・客観性とは何かとか、科学哲学的な議論を補助線に入れるべきだった。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・三者三様で、完全に「科学的」とは言えないという内容だったが、どうすれば今後「(完全な) 科学」と呼べるようになると思うか。あるいは「(完全な) 科学」にならなくても良いとするのか。
- ・人の意思が入ると科学的に不確かになるという話だったが、人の意思が全く入らない科学はあり得るのか。
- ・数学が「自然」を対象としていないのに「自然科学」に括られがちであることを指摘されていたが、自然科学以外に分類される可能性はあるのか。
- ・数学が「今ある理論の中でこんなことができるかどうか考える」とは具体的にどんな感じなのか。





# 院生が語るホンネの学系・研究室紹介

## ——どこでどんな研究ができるのか

2017 年 10 月 5 日実施 / 担当：講師全員 / 特別回（導入）

### 講義紹介

さて、いよいよ後期が始まります。1 回生の皆さんはこの後期には学系を決めなければいけませんね。また 2、3 回生の中には卒論を書くゼミをどこにしようかと迷っている人も多いのではないのでしょうか。前期には私たち院生メンバーがどうやって今の進路を選んだのかをお話しましたが、今回は院生メンバーの専門では、実際にどんな研究ができるのか、去年の卒論ではどんな内容があったのか、といったことを紹介します。

こうした紹介を通して、少しでも参加してくれた皆さんの関心に沿った進路選択をサポートできたらと思います。フリートークの時間には個別に相談する時間もたっぷりありますし、自分のしたいことはどこで、どんなアプローチで研究できるのか、一緒に考えてみませんか？

そしてもちろん、4 回生の方の参加も大歓迎です。今この研究室で、どんな卒論に取り組んでいるのか、ぜひ教えてください。もしかしたら、いつもとは違う視点からの院生のコメントが、卒論の行き詰まりを克服するヒントになるかもしれません。

前期に参加してくれた方も、参加していなかった方も、ぜひ気軽にお越しください!!

### ◆講義を終えて

後期 1 回目の講義、多くの方にご参加いただけて大変嬉しく思います。ありがとうございました。今回はメンバーの研究室でできる研究内容や先生の指導の雰囲気について、それぞれのメンバーがざくばらんにお話しました。理系のメンバーの都合がつきにくく、文系に偏った内容になってしまったのは少し残念でしたが、それでもいろいろな分野の研究室の雰囲気がわかる内容になったのではないのでしょうか。

そういえば、今まで僕たちの間でもあまりしていなかった話題でもあり、僕たちにとっても、メンバーの新しい一面も見れて興味深い内容でした。フリートークの時間もすごく盛り上がり、おかげさまで充実した回になったと思います。

来週からは各専門の講義がスタートしますが、前期以

上にパワーアップした内容になっていますので、ご期待ください。  
真鍋（社会学）

### 検討会でのコメント（一部）

#### 【良かった点】

- ・フリートークはうまく盛り上がった。
- ・後期になって初めて来た人、他学部の人もいた。

#### 【改善すべき点】

- ・途中休憩がなかったし、専門的になりすぎた面もあり、間延びした印象がある。メリハリをどうつくるか。例えば、途中で後期の日程紹介などの宣伝を入れるなどの工夫が必要。
- ・そもそも卒論とは、論文とは、といった話をする時間をつくると良いかもしれない。
- ・いきなり全学年に対応しようとしすぎていた。学年別のアドバイスをつくれたら良いが、時間がかりすぎるため難しい。いろいろな層にリーチするためには仕方ないが、工夫は必要。

#### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・研究室訪問をしてみようかなと思いました。
- ・面白かったです。
- ・文系寄りだなと感じた。
- ・興味のある分野以外の話も聞けて面白かったし、卒論のための話がきけて良かった。



## 【コラム】学部生からみた「総人のミカタ」の凄さ 飯田昇平（総合人間学部2回生）

京都大学吉田南キャンパスの東一条通り沿いの門を入るとすぐに総人広場が見えます。本を読む人がいたり、友達と話している人がいたり、多くの人がこの場所でそれぞれに時間を過ごしています。そもそもこの総人広場の総人とは京都大学で最も新しい学部である総合人間学部の略称です。私もこの総合人間学部に所属しているのですが、そんな私から見てもこの学部は京都大学の中で異色な存在であると思っています。

もともと、総合人間学部は教養部から変化した学部でこの場所で学べる学問は人文科学から社会科学、自然科学と非常に広範にわたります。しかも、京都大学のほかの学部と違い入学時点では専門も、さらに言えば文理の区分もついておらず1回生の間などに自らの興味のある分野を見つけて自らの専門を手にしていくのです。また、副専攻の制度があるので自らの専門を決めた後にも自らの関心に従い広く学問に取り組むことができます。しかし、この学部ならではの課題もあります。代表的なものとしてあげられるのは、回生が進むにつれて学部生の中で専門が全く異なる領域へと分化していくことによる学部生同士のつながりの希薄さであったり、他学部の同分野とどのような差別化を図ることができるかということであったり、専門を決めることに時間がかかってしまうことであったりします。

私はこのような自由と困難を抱える総合人間学部で1年間学びながら総合人間学部のアイデンティティは何かとこのことを考えてきました。その中で私が感じた総合人間学部のアイデンティティになり得るもののひとつは「自分の中で学んだことを結びあげる力」です。この結びあげ方は人によって様々だと思います。ある人にとっては見方や考え方を総体的に学ぶ中で相対化することかもしれません。ある人にとっては複雑な現実の問題を解決するために複数の分野に自らを置くことかもしれません。ある人にとっては自らの興味のある対象を多面的に研究することかもしれません。ある人にとっては既存の分野を融合させることかもしれません。総合人間学部生はこの学部で学ぶ中でそれぞれの総合人間学を手に入れ、結びあげていくのだと思うのです。

そんな中で総合人間学部の学部生にとってはこの総人のミカタはとても大きな意味を持つと思います。総人のミカタは大きく二つのプログラムからなります。

一つはある特定の分野の院生による学部生への講義です。私が思うこの講義の特徴は二つあります。一つは講義の内容が単にその院生の研究分野を紹介することにとどまらず、その分野の「ものの見方や考え方」を伝えるということが掲げられていることです。この受講生をその分野へと引き込む講義の裏には院生の方の講義への準備や検討会というフィードバックの場での議論などの地道な努力があります。また、この点は総人のミカタにリピーターが多いという結果にもつながっていると思います。二つ目は教員ではなく院生が講義を行うことと質疑やフリートークができる時間が設けられていることによる独自の距離感です。また、院生の学部時代の話や院進への経緯を聞くこともでき、院生というポジションが教員と先輩の中間点として機能し学部生と繋がることで、総人のミカタが人間・環境学研究科と総合人間学部をつなぐ一つの架け橋となっていることは確かです。

もう一つのプログラムは他分野の院生によるディスカッションです。このディスカッションでは例えば教養やフィールドワークといった様々な分野に関連する話題について議論したり、数学と文学など複数の分野を取り上げてその相違について考えたりします。このディスカッションでは講義で感じた「ものの見方や考え方」を自分の中で比較や相対化ができてときには新たな気付きを与えてくれます。議論が白熱した際には学部生から院生に鋭い意見が飛びさらに会場がヒートアップします。このようなディスカッションは大学での学問の味わい方の一つであるように感じます。

総合人間学部が直面しているかもしれない学際というテーマは決して一つのピースで取り組んだり学んだりできるものではないと思っています。だからこそ今まで触れてこなかった分野や興味のある分野のものの見方を知ることができる総人のミカタの講義は非常に有意義な体験です。また、総人のミカタは先に触れたディスカッションで複数の分野のつながりを考える機会にもなる非常に総人らしい場です。そのような意味で、総合人間学部において総人のミカタはますます重要性を増していくでしょう。今後も総人のミカタが迷える総人生の味方であり続けることを願ってやみません。

# 見えない「こころ」をどう捉える？——心理学のイロイロ

2017 年 10 月 12 日実施 / 担当：近藤真帆（心理学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

皆さん、「こころ」ってどこにあると思いますか？  
頭でしょうか。それとも心臓？ ああるいは、人と人とのあいだと答える人もいるかもしれません。けれど、具体的にどこかと、それは一体何なのかと問われたら、答えに困るのではないのでしょうか。

心理学は学問の中でも比較的若い学問ですが、「こころ」の探究は古代ギリシャ時代から現代にいたるまで連綿と続いていきました。一口に心理学と言っても、「こころ」を何らかの数値としてとらえ解析しようとする分野があれば、生身の人間を相手にした体験を掘り下げる分野まで、実にさまざまな立場や方法があります。そして、どの分野にも利点と問題点があり、それを踏まえて学問は日々発展しています。

心理学と名の付く学問には、いったいどんな見方があり、どんな研究があり、どんなナゾがあるのか。そんな心理学についてのちいさな地図が、皆さんの中に描けたら幸いです。

立場があることに驚いたのではないのでしょうか。これは現在の心理学の特徴でもあり、問題でもあるところです。そして、皆さんに心理学の簡単な地図を、という趣旨でお話しさせてもらいましたが、いかんせん、まとめが少しふんわりしすぎて「よう分からん」という印象を与えてしまったようにも思います。

もう少し、講義担当者である近藤の心理学内の立場を明かしたうえで、私はこのような地図を描いています、と紹介してみても良かったですね。そうした反省も踏まえつつ、次回は、心理学（臨床）が応用される現場から、「はっきり目に見えない」あるいは「数字でとらえられない」ものをいかに研究するのか、というお話をしたいと思います。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**心理学が誕生から辿ってきた経緯を概観してもらうこと。心理学の中にある多様な諸分野の焦点や利点・問題点を理解してもらうことで、受講者の中に心理学という一分野の地図を描けるようにすること。

**講義の進め方：**基本的にはスライドを用いた講義形式の予定。要所要所で受講者にも話を振る。

**一般的な講義や入門書との違い：**心理学の簡単な歴史と、現在の各分野が持つ問題点について理解することで、今後、諸分野に細分化された心理学に触れたときに、批判的にその分野をとらえながら学ぶ姿勢を形成する一助となることを期待している。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**講義では、見えない「こころ」をどう捉えるか、という問いから、心理学が誕生してきた背景や、展開してきたさまざまな立場を紹介してもらいました。

「こころ」と一口に言っても、あまりにもさまざまな





## ◆院生質疑と回答

①人間が人間の行動や意識を予測することはどの程度可能か？（質問意図：原理的には可能そうだが実際にはどうかという興味）

⇒回答：単純な反応などを除いて予測するのは難しい。

②心理学において「こころ」はどの程度実体的なものとして捉えられているか？（質問意図：講義前半の哲学的な議論との関連で質問してみた）

⇒回答：分野によって注目する側面が異なるため、「こころ」として考えることはあまりない。

## ◆アシスタントコメント

心理学という、大抵の人が関心を持ちつつも詳しい話を知る機会は決して多くない分野を紹介した講義でした。誰にでも興味を持ってもらえる題材なので比較的とっつきやすく、全体的によくまとまっており、内容も豊富でかなり成功していました。

「こころ」が何なのかという問題はかなり重要で、昨今の人工知能の発達もあり、今問うてみることに意味のあるものです。

今回は心理学史の紹介を通じて、「こころ」というものに対してもいろいろな考え方があるということが学生にも伝わったのではないかと思います。私自身、あまりこのような分野の話聞く機会は少ないので、今回は貴重な経験でした。しかし、検討会でも指摘があったように、学生のイメージや通俗的な「心理学」とのギャップを意識し、また具体的な現象を実演できればもっと面白がってもらえたはずです。

また、スライドや材料の見せ方を工夫することで見通しをよりよくできれば、学生に理解してもらいやすく、学説史の話をする意義もわかりやすくなったことと思います。

こうした見せ方に関する点さえ改善すれば、誰にでもなじむ、非常に良い講義ができるものと思われます。

次回の講義にも期待しております。

須田（解析学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・よく整理された講義であった。
- ・しっかり調べてあり、授業としての質は高い。きちっとした心理学史の授業。

### 【改善すべき点】

- ・近藤さん自身の立ち位置がわかる形で「地図」を描いて見せても良かったのでは。その方が話が整理され、次回とのつながりもわかりやすい。
- ・感情などを連想させる「こころ」と言いつつ、知覚・認識などの話にすぐに流れた。感情などの話もできれば、一般的な理解とのギャップを少なくできるはず。
- ・スライドの目次があれば見通しがよくなり、構造的に見えてより良かった。
- ・スライドの文字が多い。図などをもっと効果的に使えば良かった。
- ・前半哲学的な議論が多かったので、その専門の院生に振っても良かった。その方が違いが見えて良い。また定義されていない用語が多かったので説明が必要。
- ・「地図」を絵で示せると良かった。系譜として人レベルで見せることができればわかりやすい。またどのような切り口で地図を描くかも工夫すれば心理学での違いが見せられる。
- ・心理学のアイデンティティがどこにあるのか、また最近「心」を名前から取ることもあるが（認知心理学と認知科学など）、その違いを示せば面白かった。

# 「定義」の作り方——哲学はどういう営みか

2017 年 10 月 19 日実施 / 担当：谷川嘉浩（哲学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

哲学と聞いたとき、どんなイメージを持つでしょうか。小難しい？「存在とか実体とか言っている」？「お母さんが酔ったときに、『私の哲学はなあ……』って言った」？——とまあ、抱く印象はいろいろあるでしょう。

この講義では、その場にいる人で会話しながら、哲学の定義を作ります。何も準備はいりません。哲学の入門書を読んだことがなくても、既に皆さんは、少しは哲学のことを知っているからです（という煙に巻いた発言は、いかにも「哲学」っぽいですか？）。会話の中で、過去の哲学者が「哲学」に関して残した言葉も参照する予定です。

講義の後半では、自分たちが定義作りを通じてやってきたことを捉え返し、その「営み」がもたらす思想的な意義を明らかにします。

哲学の院生が、一般向けに話す機会も、珍しくはありません。これらとは違い、「総人のミカタ」でしかできないような哲学入門ができないか……そう考えて構成したのが今回の講義です。

個別概念の説明や、哲学史を通覧的な紹介は、既に哲学に興味がある人には意味があることであっても、その道に進まない人からすると、数日で忘れてしまうだけの暗記事項になってしまわないでしょうか（暗記を軽視するわけではないですが）。

そこで、プラトンやハイデガーの使ったような哲学の「論法」を、実際に体験しながら、「哲学」について理解を深めていくという構成を採用しました。講義でグループワークをしたのは初めてでしたが、それなりに好評でホッとしました。とはいえ、適度な参加人数、参加者の積極性、聞き上手である院生仲間の協力など、諸々の幸運の上に成り立つ特殊な成果だったと思います。

パラメタが違って、教育効果をどう維持するのか、そこは、今後の個人的な宿題ですね。それから、講義で集約して出来上がった「哲学」イメージにも驚きました。参加者の大半は、「哲学をあまり知らない」と言っていたにもかかわらず、一線で活躍する哲学者の哲学観と重なるところが多かったからです。皆さんの直観の鋭さに感服しました。それに、「哲学って、こんなイメージなんだ」と知ることができて、私も学ぶところが多く、すごく、本当にすごく楽しかったです。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**哲学の対話性、その思考プロセスを体感し、その過程を反省的に捉え返す。また、誰かと議論することの思想的な意味についても考えてもらう。紹介する研究の例（当日、受講生に選んでもらう予定）：プラトン、バークリなど対話篇の伝統。哲学の語彙上の初出。集団分極化（キャス・サンスティーン）。

**講義の進め方：**【～10分】自己紹介、哲学を学んだ経緯。

【～20分】定義を作ることについて。哲学をみんな少しは知っているよ、という話。【～45分】最初はグループに分けて「哲学」の印象などを話してもらい、それを共有するところから始める。それについて意見交換し、意見が途切れそうなら、引用集を参照する。【～60分】哲学と対話の関係。今までのプロセスを反省的に捉え返す。集団分極化の紹介。

**一般的な講義や入門書との違い：**概念の解説ではないこと、体感ベースであること、体感の後に反省的に捉え返すこと。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**哲学の入門書はたくさん出版されていますし、哲学の入門的な講義はたくさんあります。また、



## ◆院生質疑と回答

①哲学者の主張の論拠とは？（確からしさをどのように保証するのか）？（質問意図：データに基づいて主張を展開する「科学」と比較したときに、「哲学」がどのように根拠を構築するのかを尋ねることで、分野間の差異が際立つと思ったから）

⇒回答：一般的には、「他者の頭をくぐらせる」ことによって議論の妥当性を保証するとのこと。常識を否定するのではなく、議論に参加した人が暫定的にでもOKを出すことがひとつの指針になる。研究の場合は、「テキストで確認できること」「現象をうまく説明できること」の2点がさらに加わる。

## ◆アシスタントコメント

「哲学」は恐らく、多くの人が一度は興味をもったことのある分野ではないでしょうか。けれども、その一方で難解でとっつきにくいという印象もある。

今回の講義では、そんな「触りたいけど触りづらい／触り方が分からない」哲学という分野について、非常に身近な視点から切り込みを入れ、受講者を思索の世界に誘ってくれたと思います。最初から過去の人材の頭を借りるのではなく、自分たちの素朴な印象から出発して議論を進めることで、哲学者の思考の過程を、実感をもって垣間見ることができました。全体として講義は成功していたと思いますし、院生の間でも「哲学が何なのかかえってわからなくなった」という感想が出るなど、良い意味で混乱を生み、互いの分野の理解を組み立て直す貴重な機会となったように感じます。

個人的に最も印象に残ったのは、「他者の頭をくぐらせることで主張を確かめていく」ということが、哲学する者の重要な姿勢であるというコメントです。であるとすれば、自分とは異なる考えをもつ他者を意図的に探して語ろうとするマインドが必要です。また、同時に、哲学者は自身が語ったことに対するリアクションに寛容であることも重要なのでしょう。でなければ、「どうせこの人に意見を述べたって突っ返されてしまう」と思われてしまって、他者の頭をくぐらせてもらえなくなるからです。ゆっくり時間をかけて、これからも考えていきたいと思います。次回も楽しみです。

萩原（発達科学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・茶番もうまくいって楽しかった（笑）。
- ・グループワークへの対応は丁寧、参考になった。
- ・とはいえ、ファシリテーターの能力に依存するのでは？
- ・「他者と話す」という哲学者の研究姿勢というか価値観が大事だということがわかった。
- ・声が良い。わかりやすかった。
- ・グループワークですべて拾っているのは大切にしている感じがして良い。
- ・全体的には良かったと思う。

### 【改善すべき点】

- ・他の分野との関係、哲学の射程についてももう少し押し聞きたかったもう少し論点をはっきりさせるとか、方向性を明確にしておいた方が良いかもしれない。
- ・哲学史を背負っているというのはわかりにくいかも。
- ・黄緑が見づらかった。
- ・弁証法という表現は適切？
- ・哲学の定義が消極的。
- ・対話は学知の前提、でも学問を統合する位置づけを与えているわけでもなさそうだから、哲学がよくわからなくなった。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・講義で言及した対話の機能は、哲学だけでなく学問一般に妥当することではないか。



# ことばを理解するとはどういうことなのか

2017 年 10 月 26 日実施 / 担当：岡久太郎（認知言語学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

「ビール」——このことばの意味が分かるかと聞かれれば、日本人の大学生であれば、ほとんどの人がその意味を答えられると思います。辞書を見れば、「麦芽を原料として……」等といった説明があり、その文章が「ビール」ということばの意味であるとほとんどの人が考えます。しかし、例えば、食卓で父親が空のグラスを手にして、母親に向かって「ビール」と言葉を発した場面を見て、この言葉の意味は何だと聞かれたら、先に挙げた「麦芽を原料として……」といった辞書的な説明ではなく、「父親が母親にビールを注ぐよう求めている」等といった説明をする人が大多数だと思います。このように、日常におけることばの理解とは、単に使用されている単語の意味を知っているか、それらを組み合わせて文の意味が取れるかといったレベルだけではなく、話し手／書き手はどのような意図でそのことばを発しているのかといった理解まで含意されることがほとんどです。本講義では、言語学的な視点からこのようなことばの理解の諸相について考えていきたいと思っています。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**言語学において想定してされてきた理解の 4 つのレベルについて知るとともに、それらのレベルが明確に独立しているのか、それぞれ切り離すことができないものであるのかを考える。

**講義の進め方：**最初は言語学における研究を基に、ことばの理解に関する一般的な考え方を提示し、その後こちらが用意した事例についてフロアの皆さんの考えを聞きながら、講義を進めていきます。講義中であっても、疑問に思う箇所、分かりにくい箇所があれば、積極的に発言してもらえれば、適宜その話を取り入れつつ、講義を進めたいと思っています。

**一般的な講義や入門書との違い：**講義担当者自身、まさに講義のテーマについて考え続けている大学院生ですので、先行研究の単なる紹介ではなく、その問題点や異なる見方を皆さんと考えることで、研究とはどのようなものなのかを一緒に体験してもらえればと思っています。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回は、コントや誤解の実例を取り上げ、我々が「ことばを理解している」と言うときの“理解”のレベルにはどのようなものがあるのかを考えていきました。

言語学というと、言葉遣いの歴史的変化を調べているというイメージや母語以外の言語の語彙や文法について調べているといったイメージが強いかと思いますが、私の専門としている認知言語学では、私達が発している／理解していることばが、そのときに私達の心に描かれている／描かれる内容とどのように関係しているのかを探求しています。もちろん、認知言語学においても、言語の歴史的変化や外国語の語彙・文法についての説明がされていますが、今回はあえて現在私達が使っている日本語の理解において、語彙や文法といった観点だけでは捉えにくい側面に注目することで、皆さんが言語学に対して持っているイメージを少しでも変えることができればと思い、講義を構成しました。

また、講義の中では認知言語学よりも、語用論という枠組みについて多く言及しました。認知言語学は語用論的観点を非常に重視する分野ですが、認知言語学以外のアプローチで語用論の研究を行っている研究も多々ありますし、認知言語学の研究であってもどの程度語用論的な視点を取り入れるのかは研究者によってさまざまです。

今回の講義では、私の立場に基づいた話を中心にしましたが、11 月 16 日のディスカッションではその点についても触れられればと思っています。



## ◆院生質疑と回答

### ①通時的（歴史的）な視点はどうなるのか？（質問意図：

原講義内容では、ある場面の瞬間的な文脈が強調されていたが、言語学全体を見渡したときに、通時的な変化や構造を扱う領域もあるはずで、それを紹介する必要もあると感じたため）

⇒回答：むしろ通時的な変化を論じる分野の方が、言語学全体の中では伝統的でシェアが大きいですが、最近はその変化を論じる際にも、語用論的な視点が重視されるようになっている。

### ②カテゴリー分けは誤解が生じた理由に答えたことになっているのか？（質問意図：参照する文脈の類型化だけでは、「どのように誤解が生じるのか」を明らかにできても、「なぜ誤解が生じたのか」は明らかにできないように感じた。仮に言語学で「なぜ」に答えることができるのであれば、そこでは説明変数に何を持ち出すのか、もしくは「なぜ」とは問わず、「どのように」を精緻化することに限定するのか、といった学問的な「問い」や「目的」の設定方法、そしてそのときの中心的な変数は何かというのが気になったため）

⇒回答：ある単語の両義性だけでなく、文脈の精緻化によって「なぜ」に答えることができると考えている（ただし、今は「なぜ」よりも、「どのように」という問いに答えようとしているとのこと）。

## ◆アシスタントコメント

普段使っている言葉について、その言葉を使う瞬間に、私たちはいったい何をしているのかを改めて考えてみる、そうした講義だったと思います。このメカニズムを考えるために、講義の中では誤解が重要な役割を占めることになりました。上手く行ったときではなくむしろ「失敗」の瞬間に注目するというのは、分野を問わずしばしば利用するアプローチですが、まだ研究になじみの薄い学部生にとっては、そうした観点も新鮮な着眼点だったのではないのでしょうか。

前半では、単語の意味や文法だけでなく文脈に注目しなければならないことを、ラーメンズのコントを具体的に分析することでわかりやすく伝えていたと思います。他方で、後半は、自身がまさに今取り組んでいる研究に近い内容だけに、少し複雑な構成となっていました。知識伝達だけでなく、研究の最前線やその様子を見せることも、大学の講義に不可欠なことだといえるので、そうした「不明瞭さ」が残ってしまったこと自体が、悪いことだとは思いません。実際、フリートークで学部生からも活発に質問をもらい、また検討会でも、異分野の院生と込み入った議論が展開されたのは、そうした「不明瞭

さ」に触発されたからでもあるように思います。

とはいえ、こうした「不明瞭さ」のうちのいくつかは、検討会で挙げられたように、目次を示すことで講義の全体像を示したり、配布資料をもう少し詳しくしたりと、まだ改善できる余地があるようです。こうしたフォローを充実させることで、認知言語学の知見とその面白さを、より広い層の学生に伝えることができるようになるのではないのでしょうか。言語という身近で不思議な対象だけに、2回目の講義やディスカッションも、今から楽しみです。

真鍋（社会学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・面白かったし、話し方もわかりやすかった。
- ・慣れている感じがあった。
- ・準備できていない点もさらっと流せていた。
- ・分野に合っている身近な例（ラーメンズ）などがすごく良かった。
- ・ラーメンズの使い方やタイミングが良かった。
- ・最初の問いかけ、誘導尋問っぽいというメタな回収の仕方が良かった。

### 【改善すべき点】

- ・文献が抜けていた。
- ・目次的なものがほしい（終着点の提示）。
- ・とくに授業後半の構成はもう少し検討の余地あり。例が続くから単調になり、なぜこの例を見るのかわからなくなる。
- ・最初だけ、「えー」というのが多かった。
- ・講義内で、脇道にそれたときのトーンの違いがあった方がよい。
- ・最初の質問はもっと具体的に答えやすいものに。
- ・EM的な会話分析のテキストは、補助のためだったはずなのに、表記が専門的なので、かえってそれに注意が向かい、音声に集中できなかったのではないか。
- ・ラーメンズの従来の切り口でわりとうまくいっているが、「それだけでは全部上手いかわない」という転回のところで、もう少し時間をかけても良かった。インターアクションをここではさむなど。
- ・後半の誤解集は、どういう意味で面白いのかをもっと言語化してほしかった。
- ・キーワードが多いので、レジュメは工夫の余地がある。○○論とかがわからなくなり、振り返りたい人もいたのではないか。

# 史料に広がる世界を探る——歴史学の方法

2017 年 11 月 2 日実施 / 担当：村上絢一（歴史学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

歴史学はさまざまな「過去」の痕跡をもとに、その解釈を試みる学問です。高校までの歴史の授業は、すでに誰かが記述した教科書の筋書きを知ることによって主眼が置かれています。それでは、その教科書の記述はどのような根拠に基づいているのでしょうか。目の前に存在しない「過去」は、どのような手続きを経て認識されるのでしょうか。そして、「過去」を研究することにどのような意味があるのでしょうか。

この講義では、講師が専攻する日本中世史を主な題材に、上記の認識論的・方法論的関心に答えます。前半では、具体的な分析素材に触れることで、日本史に限らず、歴史学に共通する視座の獲得を目指します。後半では、「一遍聖絵」を読み解くことで、中世に生きた人や風景を観察し、「異世界」としての中世社会を考えます。

した。

およそ歴史学と称される学問の最大公約数は、「過去」の痕跡である史料を読み解くことで、全体像としての「過去」の解釈を更新することにあると考えます。本講義では、古文書の写真と活字の翻刻文を読み比べ、さらにその対象を複数組み合わせることで、実際に歴史学の研究者が「過去」の解釈を行う作業を、それに近い形で提示しました。講義の後半では、出席者の皆さまに絵画史料『一遍聖絵』を観察していただき、それぞれ関心の持たれた箇所を赤ペンで囲んでいただきました。いずれの方も、『一遍聖絵』の描く世界に強い関心を寄せられたようで、次回の担当回では、こうした気づきや発見を、さまざまな史料使って多角的に照射してみたいと思います。

『一遍聖絵』について、出席者の皆さまに挙げていただいた気づきや関心は、以下の通りです。このうち数点は次回講義で解説します。

## ◆講義の目標・内容について

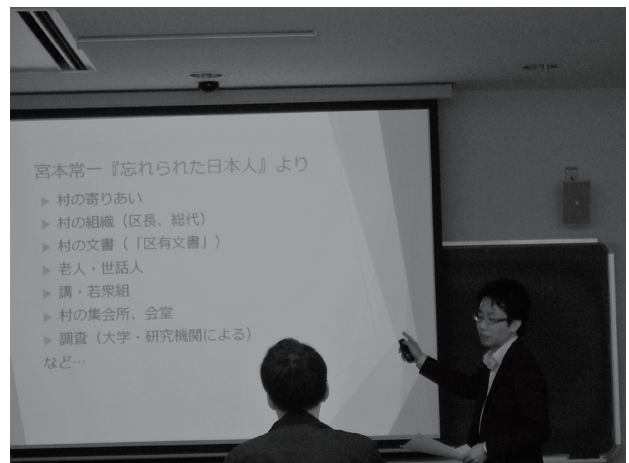
**講義の目標：**歴史学の方法＝史料を踏まえた「過去の解釈」を迫体験すること。

**講義の進め方：**【～5分】講義の注意事項と自己紹介。【～15分】認識論的懐疑と過去を研究する意味。問題提起。【～30分】宮本常一が報告した村の寄合と惣村について。事例紹介。【～35分】組み分けと説明。一遍聖絵を読むことについて。【～45分】グループごとに絵図を観察する。【～55分】グループごとの気づきを発表・紹介。解説は次回へ。【～60分】院生の質問、次回予告ほか。

**一般的な講義や入門書との違い：**史学史と認識論に関する議論を踏まえる。いきなり各論に入らないこと。受講者が主体的に史料（絵画）に接することで疑問を提起し、これを共有する。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**はじめに、民俗学者・宮本常一の名著『忘れられた日本人』の一編から村の寄り合いや講、そしてそこに継承される「文書」の世界を紹介し、その歴史的起点としての中世という時代を考える最初の導線としま





## ◆院生質疑と回答

①**歴史学は科学なのか？**（質問意図：前期の最後にあったような「科学」の観点が歴史学においてはどのように扱われているのかを知りたかったため）

⇒**回答**：歴史学は科学である。歴史学は史料を「解釈」するが、それは常に他の専門家からの吟味にさらされており、何でも良いというわけではない。この意味で、歴史学は科学に類する学問だと言える。

②**政治と歴史学の関係はどのようなものであるか？**（質問意図：今日の歴史認識問題のように、政治と歴史が深い関係にある場合、歴史学的に厳密な議論は可能なのか、政治にそれが利用されないかを知りたかったため）

⇒**回答**：歴史認識問題のような課題を調停することはとても難しい。長い時間が経てば、歴史の問題と政治の問題を切り離して考えられるようになるかもしれないが、歴史学だけでは限界もある。

## ◆アシスタントコメント

歴史学の難しさ、面白さがうまく伝えられた講義だったと思う。参加者が少なかったのは残念だったが、学生たちも楽しんで参加していたようだった。スライドの情報量も全体的に適切で、色合いなども見やすかったと思う。話し方も落ち着いていて、講義も聞きやすかった。歴史学の認識枠組みを分かりやすく提示した上で、実際の歴史学の営みに具体的なイメージを沸かせるような授業の構成になっており、よく練られていると感じた。

一方で、くずし字の読み方など、もう少し話を展開できるような部分もあったのではないかと感じる。適宜、「問い」を自分から発することで授業のリズムをつくっていくことも必要だという指摘がされていた。緩急をつけ、平板になりがちなところへの工夫がもう少しなされれば、更に改善できると思う。

初回から非常に質の高い講義だったので、今回の経験を活かして二回目の講義がどう改善されるのか非常に楽しみです。

杉谷（政治学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・資料（絵巻）に直接書き込みながら作業できたのが良かった。
- ・歴史学のなかの学際研究を紹介していた点良かった。
- ・読書案内がされていて良かった。

### 【改善すべき点】

- ・最初の朗読部分が長すぎた。また、レーザーポインターをうまく使えなかった。
- ・資料準備にかなりのコストがかかった。講義の内容とともに考えていく必要があると感じた。
- ・最初の朗読部分だが、学生に読ませるという方法もありうる。また、細かい点だが、ポインターを相手に渡すという手段もよく使われる。
- ・一部の専門用語（例えば「反証」）については解説も必要。
- ・一部の重要用語には色付けなどをして分かりやすくするなど工夫が必要。
- ・スライドでヨーロッパの話が出てきたが少し話がブレた印象。あくまで日本の話だということを踏まえて話した方が良い。
- ・くずし字を読むという職人的スキルは学問の世界でどう評価されているのか。少し話があっても良かったかもしれない。
- ・スライドデザインの話で、題名をつけた方が良い。
- ・導入を絵画の話にして、それをうまく資料に繋げるような授業設計にした方が良かったのでは。
- ・もう少し笑いがほしい。

# 間主観性でとらえる「こころ」のハナシ

## ——精神科デイケアの現場から

2017 年 11 月 9 日実施 / 担当：近藤真帆（心理学） / 通常回（2 回目）

### 講義紹介

第 1 回では心理学の簡単な歴史と現在の諸分野を概観し、現在、大きく分けて量的研究と質的研究があること、それぞれの利点や問題点を紹介しました。

今回は講義担当者のフィールド(精神科デイケア)における質的研究を紹介しながら、研究の役割と問題について一緒に考えていきたいと思います。

講義では、特に質的研究法で実践を研究する必要性やその難しさ、客観性／科学性の扱いに焦点を当てます。心理学に興味がある方にもない方にも、科学や学問とは何なのか、その役割は何か、といったことを考えるきっかけにしてもらえたら幸いです。

### ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**具体的な質的研究の一事例を掘り下げることで、心理学研究を行う具体的なイメージを掴んでもらうこと。現場の心理学研究が抱える難しさと面白さに触れてもらうこと。学問をすることや、客観性・科学性についての問題を、一緒に考えてもらうこと。

**講義の進め方：**基本的にはスライドを用いた講義形式の予定。要所要所で受講者にも話を振る。

**一般的な講義や入門書との違い：**心理学研究の一事例を掘り下げ、そこから現在の学問の前提についても考えてもらう点が特徴。心理学そのものや、学問をすることの難しさや醍醐味と一緒に味わってもらうことで、受講生が今後、具体的なイメージをもってそれぞれの研究分野を選択する一助となることを期待する。

### ◆講義を終えて

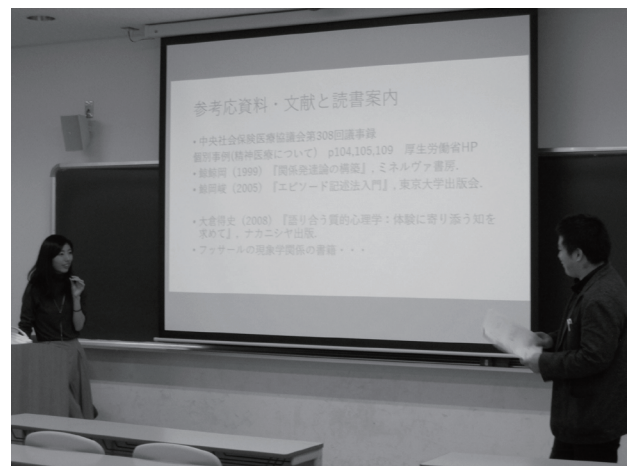
**コメント・感想：**今回の講義では、心理学の質的研究、さらにその中でもかなり独特な、間主観性を導入する研究事例についてお話をしました。精神科デイケアという現場の実相を見ていくとき、客観主義的な手法では何が分かり何が分からないのか、間主観性を導入するとどのようなことが分かるのか、実際のインタビュー記録を考察していく形で見ていきました。

受講生の皆さんに、普段馴染みのない現場の雰囲気や、実際の研究のありかたが少しでも手応えを持って伝わっていたら、幸いです。デイケアのありかた・研究と政策の問題は密接に関わっているため、杉谷さんから政治学の立場で質問をいただきディスカッションができたことは、大変刺激的でした。

受講生の方にも、立場の違いで物の見え方が全く違うこと、そこで議論していくことの難しさや面白さを体感してもらえたように思います。

全 2 回の講義を通して、心理学という分野の歴史や問題、実際の研究のありかた、物の見方のコントラストなどを見てきたつもりですが、

聴いていた皆さんの胸に、何かしら残るものがあつたのなら、嬉しい限りです。私としても、皆さんの前で講義をすることはとても貴重な経験となりました。ありがとうございました。



## ◆院生質疑と回答

①政策形成者は「答え」を求めたがる。どう対応すれば良いか？（質問意図：講義の中で、「行政」というワードが幾度か出現し、講義者の立場と行政の立場に違いがあるように思われたため、この点の対立を顕在化してみると面白いのでは、と感じたから）

⇒回答：質的研究は、量的研究を相対化する意味合いがある。この点で、「答え」を求めたがる風潮に対抗するものである。ある程度の単純化が無ければ政策に適用できないという側面もあり、葛藤がある。

②質的研究は政策のエビデンスとして有効なのだろうか？（質問意図：同上）

⇒回答：量的研究が政策のエビデンスとして重宝されることが多いが、質的研究は、量的研究の枠組みからこぼれおちてしまう人々を掬い出す役割もある。「いろいろある」という結論に陥りがちなのが質的研究の難点であり、乗り越えなければならない課題。

## ◆アシスタントコメント

今回は参加者が少なかったが、講義が十分に整理されて分かりやすかったこともあり、多くの学生が講義内容を理解し、当該分野に関心を持ったのではないかなと思う。

質疑応答もかなり噛み合っており、質問者自身も学ぶところが多かった。院生質疑の際は、あえてあるディシプリンを過剰に内面化した上で質問をしてみた方がより差が際立って興味深いやりとりができると感じた。ただし、誤解を招くような発言をしてしまわないように留意が必要。

学生からは、院生質疑にまつわる質問をいつもよりも多くもらい、学生にとっても質疑が魅力的なやりとりになっていたことを示していたのではないだろうか。

講義のスライドも練られて作られている印象で、みやすく、頭に入りやすかった。担当者の喋り方や口調が今回の講義内容に非常にマッチしており、偏見や先入観を抱かせないような講義になっていたことも良かったと思う。講義後の議論も盛り上がり、それぞれの分野において客観性がどのように扱われているか、研究手法が明らかにできる因果関係の所在などが話し合われた。

分野は違えど、それぞれが似たような問題を抱えて多様なアプローチがとられていることが明らかになるなど、実りが多い議論を展開することができた。

杉谷（政治学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 前回の講義よりもストーリーがしっかりしており、話が入りやすかった。
- ・ 自分の話に突っ込みを入れ、それに答え、また突っ込みを入れる、というように、問いを立てて、それに答えるというかたちが構成としてうまくいっていた。
- ・ 間主観性についての説明も、あまり入り組んでおらず、あれくらいの分量で良かったと感じた。
- ・ 全体として講義内容についてはまとまりがよく、整理されていた。
- ・ その後の議論では、質的研究と量的研究の関係についての議論になり、近藤さんのアプローチが因果関係を明らかにするものではなく、むしろ営為そのものを問い直すという目的に従っているのではないか、という指摘があり、考究の必要性を感じた。

### 【改善すべき点】

- ・ 質的研究の中でも近藤さんの研究は異質なものだという言葉があったことを踏まえれば、質的研究一般がどのようなものであるかについて説明がなされるべきだったのではないかな。
- ・ 一部の専門用語（診療報酬、ケースワーカーなど）といった用語について、説明があった方が良かった。尺的に難しければ、言及する必要は無かったと感じた。



# コミュニケーションを考える——slipstream の立場から

2017 年 11 月 16 日実施 / 担当：近藤真帆（心理学）・岡久太郎（認知言語学）  
・須田智晴（解析学：司会） / 特別回（異分野ディスカッション）

## 講義紹介

コミュニケーションは、人間にとって生活のあらゆる面に関わる重要な現象である。さまざまな視点からその分析が可能であり、関係する学問分野は幅広い。しかし、それゆえにかえって考察の対象としてはどの領域でもあまり主流ではない。今回のディスカッションでは、心理学と言語学の立場からコミュニケーションについて考える。まず、各分野内での位置付けを意識しつつ講義内容を簡単に復習した後、それぞれのコミュニケーション観を述べ、質疑応答につなげる。また、これらの討論を通じて、学問における「主流」とは、そうではない立場から研究することの意味とは何か、といったことについても考える。

は聞けない、総人のミカタのような場でないと知る機会の少ないものだと思います。もちろん毎度毎度そのような話ばかりするわけではないですが、今後とも、こうしたある意味リアルな事情も伝えていければ良いと思います。

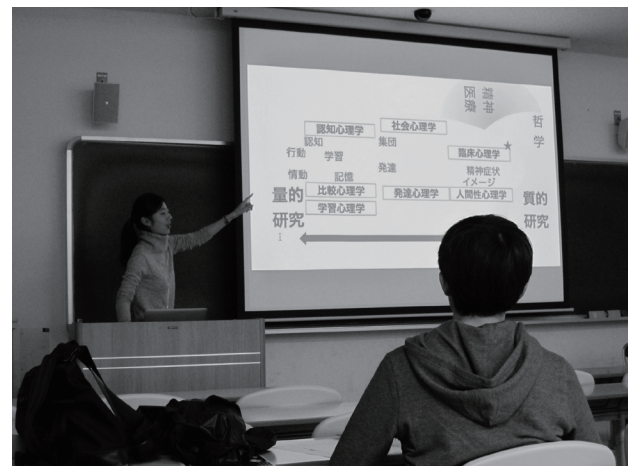
## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**コミュニケーションのさまざまな見方を知る。学問における「主流」とそれ以外との関係について知る。

**講義の進め方：**はじめに講義の復習を行ったのちに発表に入る。その後、休憩を挟んで質疑応答を行う。

## ◆講義を終えて

今回のディスカッションは表向きのテーマをコミュニケーションに設定しましたが、終わってみるとやはり印象に残ったのはその業界での立場をめぐるやり取りだったように思います。研究とは人間が行うものですから、やはりそこには人間臭いあれこれがあります。研究の方法から対象まで、意見をたがえる可能性のある要素は多々あり、研究者によって見解が違います。そして、何を選択するかは必ずしも無私の態度で決められるものではなく、結構感情的な、政治的なものなのだと思います。また、量的研究と質的研究の関係をめぐる、さまざまな分野の院生が自分のところではどうなのかを話した一幕がありました。やはり何をどう扱うのかによって事情は異なり、研究といってもひとくくりにはできないということを実感できたのではないかと思います。このような「舞台裏」に属する事柄はなかなか公式の場で



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 登壇者にとっては予定通りの進行だった。
- ・ フロアからの質問に院生全員が少しずつ答えた。
- ・ 一問一答に終始せず、再反論の時間があった。

### 【改善すべき点】

- ・ 登壇者として発言の時間を多くとりすぎた。
- ・ 打ち合わせをしている分、専門用語が前提なく使われており難しかった。
- ・ 用語を多用するなら用語集を用意しても良い。
- ・ フロアに開く時間をもっと確保すること。



# 学際教育について／物理学の方法、ブランコのこぎ方を例として／ そしてあなたは総合人間学部でなにをするか

2017 年 11 月 30 日実施 ／ 担当：瑞慶覧長空（物性物理学） ／ 通常回（1 回目）

## 講義紹介

「学際」という何かに惹かれて総合人間学部を選択した方は多いと思う。では「学際」とは何なのか。どのような経緯で始まり、どのように発展していったのか。日本、特に総合人間学部で現在のような教育体制がとられた背景を知ることが、あなたの今後の学びにとって有益だろう。学際教育の調査研究の経験があるので、講義前半でその概要を説明する。

物理学はどこに行ったのかと思われたらだろうか。物理学の話は講義後半で行う。物理学に興味がある方にとってはもちろん、物理学に興味がない、専攻する気がない方にとっても物理学（に限らず他の専門）の考え方をすることは有益だろう。自分の専門を相対化できるし、ひょっとしたら新たな考え方に繋がるかもしれない。物体の運動をシンプルに説明しようとしたとき、「物体は何かを最小にするように運動する」と説明できないだろうか？ と考えた人がいた。実際説明できたのですごい。その考え方について解説することで、物理学の方法を説明する。これは「解析力学」と呼ばれる分野である。

教育」の歴史について話すことになった。講義中でも受講生から反応をもらえた点は良かったと思う。ただしその質問に満足に答えられなかったようにも感じる。自分の知識に自信がない場合は他の院生に話を振ってみても良いと思った。

改めて考えを整理したい。総合人間学部（以下、総人と略す）は通常の学部と異なり、特定のディシプリンを掲げているわけではない。つまり、総人で学べる多くの学問分野の名を持った学部が存在している。

一方、総人に入学する学生の多くは、「気になる分野はあるが、他の分野も学びたい」と考えていると思う。その主要な関心は、どこか他の学部でも満たせるのに、それでも総人に入学したのは、結局、何か特別な教育がここにあると期待したからだろう（少なくとも過去の自分を思い返すと、そうだった。しかし、学際教育について講義するまで、そのことを明示的に意識することはなかった。そんな教育はどこにもなかったからだろう）。

今回の受講者の反応が良かったのは、抱いていた期待と、その結果として抱いた失望に、「学際教育」というテーマが重なったからではないか。しかし結局は、「特別な教育」などない。少なくとも、学部・研究科で「研究を他者に語る」という教育課題が提出された経緯を見る限りでは、未だ総人ならではの教育は確立されてはいないと思う。

総人の企画、学生同士の私的な集まりなどで、折に触れて「総人がどうなると良いと思うか」という話題が出る。その度に、「私はこう思う」「私には、こんなメリットがあった」という特殊な意見が提出され、大抵は総人でなくても構わないような経験だった。それらは結果論（生存者バイアス）にすぎない。「誰かが総合人間学部から得た恩恵」は、「総合人間学部が一般に与えられる恩恵」ではない。

そこで重要なのは、特別な教育が総人にないという事実を健全に受け止め、その上で、総人で利用可能な資源を理解し、個々の学生が「ここで何をするか」を自問して、自衛することである。その結果生じたあなたの総人は、自分ではない誰かがたまたま享受した総人とは一致しない。講義では、自衛へ向かってもらうために、精神的なショックを提供することを狙った。まずは受講者から、総合人間学部を最大限活用してほしい。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**総合人間学部で特定の専門を持つことについて考えてもらう。物理学に関心を持ってもらう。

**講義の進め方：**前後半に分ける。特に前半では、総合人間学部で特定の専門を持つことの、意義・利点・欠点などについて参加者と議論したい。ここで集まった意見は、次回の講義で改めて紹介する。

**一般的な講義や入門書との違い：**講義は一時間しかないもので、物理学の内容を伝えるのではなく、「物理学の雰囲気」と、それを理解するために必要な学習について伝えることに集中する。ブルーバックスと教科書の中間を目指すということになるだろう。また、議論を取り込む点も、一般的な講義と異なるだろう。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**講義では、主に総合人間学部や「学際



## ◆院生質疑と回答

### ①「総合人間は、それぞれの胸の中にある」で良いの？

（質問意図：総人の問題を個人の問題に帰着させることの是非を聞いてみたかったから。あるいは、総人の問題を後世に託して、自分たちは考えることを棚上げしておくというようにもとれたので、その点を聞いてみたかった）

⇒回答：胸の中で抱くだけではダメだが、しかし、モヤモヤさえ抱かない人もいるので、せめて自分なりの総人を宿してほしい。

### ②総人に対する講師（瑞慶覧）の立場は？（質問意図：総人の歴史と現状の問題点は明確になったが、その問題点についての講師の見解・立場が明示されていなかったなので、発言を求めた）

⇒回答：自分なりに、物理学という一つのディシプリンを頑張ってきた。しかし、実際どうした方が良かったか、総人全体がこれからどうなれば良いのかについての明確な答えはない。だからこそ、議論の題材を提供して、聴衆の意見を聞きたかった。

## ◆アシスタントコメント

全体的に「学際教育」や「総人設立の経緯と問題点の共有」というトピックが主で、物理の話はほんのさわりしか聞くことができなかった。しかし、受講生の食いつきの良さは恐らくこれまでの「総人のミカタ」の中で最も顕著だった。1回生の受講者は、総人で過ごした半年でなんとなくモヤモヤを抱いたのだろう。今回の話題はまさにそこを突いたのだと思う。

講義終了後、受講生の口から、「ますます迷子になった」というコメントがこぼれた。とはいえ、総人の現状を冷静に認識し、次の一步を決める下地として、今回の講義は非常に有意義であったと考える。総人に属する人間が、まともに「総人とは何か」を問う機会は、かの事件以後ほとんどなくなってしまった。

実際に、特定のディシプリンではなく、「総人」そのものについて学ぶ正課内の取組みは、ほとんどないに等しい。学際教育や学部について学び、考え、対話する機会が、正課のカリキュラムに適切に組み込まれることを切に願う。総人のミカタとして、そのための働きかけをしていく必要があるのかもしれない。

萩原（発達科学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 主題のよさもあって、受講生が熱心に聞いていた。ただし、学習意欲の高い学生が多いので、この場以外で同じことが成り立つと想定しない方が良い。
- ・ 学生との議論が活発だった。入学して前期を終え、後期も半ばすぎた時期にやったから良かったのかもしれない。
- ・ 講師特有の気だるそうな感じのおかげで、張り詰めすぎずかえて良かった。

### 【改善すべき点】

- ・ スライドを読み上げるだけだと興味がなくなる。
- ・ 言い換えたり、端折ったり、詳しく解説したりと、スライドの利用法に注意。
- ・ 物理学がおまけ的だったので、学際教育に1回の講義全部充てて良かった。
- ・ 歴史を語るとき、淡々と経年を語るのではなく、転換点や差異を強調した方が良い。
- ・ 個別の要素を順次解説するだけでなく、それらの関係を説明しないとわかりづらい。
- ・ （過去に講師が参加した調査研究の）論文の単なるまとめになっている。
- ・ 話題が脇に逸れた後、元に戻るとき、要点を整理するようなコメントがあった方が良い。
- ・ せっかくさまざまな分野の院生がいるので、補足が必要であれば話を振った方が良い。



# どのようにして $\lambda$ -(BETS) $_2$ FeCl $_4$ は低温で反強磁性絶縁体転移するのか。 そして、その何が楽しいのか？ 他にどんな楽しいことがあるのか？

2017 年 12 月 7 日実施 / 担当：瑞慶覧長空（物性物理学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

磁性有機導体  $\lambda$ -(BETS) $_2$ Fe $_x$ Ga $_{1-x}$ Cl $_4$  は  $x=1$  の際低温で反強磁性転移し、その機構については未解明である。フェルミ面がネスティングしていることによる伝導電子の SDW 転移によって反強磁性転移が生じているのではないかと考え、理論的に研究を行っている。

こう聴くといまいち何が面白いのかわからないと思います。私もそうでした。これは修士二年生である現在の私の研究テーマです。今回の講義が終わった頃には、上述した研究が面白いと感じられるはずです。

研究の内容に加えて、どのような経緯を辿って研究が進んでいくのかについて、具体的なエピソードとともに紹介します。物理学に興味がない方でも楽しめる回になると思います。

続いて、物理学においてまだ理解されていない事例を紹介します。物理学を用いると、こんなわけわからんことまで考えることができるのか。あるいはこんな単純なことがまだわかっていないのか、という実感を持ち、あなたの専攻・研究テーマ選択の際の参考になれば幸いです。

最後に、前回講義の際に集めた、「総合人間学部でなにをするのか」という問いについての意見を紹介します。それらを踏まえ、再度議論をしてみたいと思います。当然ですが、講義中の任意の時間から議論を始めてもらっても構いません。むしろ歓迎します。

ちを知ることができる。そのことによって受講者の進路選択に有益な知見を提供できることが期待される。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回も前回同様、シラバスに記載した内容とは全く異なる講義内容となってしまった。前回話す予定だったブランコの漕ぎ方について、実際にモデルを作り、計算した。事前に組んでいたプログラムで実演したりもした。

自分の分野の基礎的な知識について、初学者向けに再構成することで多くを学べた。理解の曖昧さや、今まで素通りしていた面白さに気づけた。同時に、初学者に伝えるのは難しくもあった。自分が感じる楽しさを、講義を受けている側も感じると錯覚してしまうからだ。

今回だと、板書で数式を解説したときがそうだった。自分で計算し、理解していくのは楽しかった。しかし、ただ説明される側は楽しいだろうか。自分が考えているときに感じる楽しさは、自分で考えているから感じられるのであって、他人にただ説明されるのとはわけが違う。

反省会後に行った食事のとき、「その思いやりが授業をダメにする」という意見が出た。自分が感じた楽しさを伝え、事象を理解してもらうために、「これもあれも伝えよう」「ここまで話せばわかりやすいだろう」といろいろと考えて内容を増やしていったが、それがかえって初学者を混乱させる要因にもなっていた。講師は、どこまでも受講者の立場に立たねばならない。「受講者の立場に立っている」と考えているとき、それを疑う必要がある。

ただし、やっぱり計算の部分にも楽しさは見いだせるし、そこに楽しさを見出す手助けをするというのも講義の重要な役割だと思う。面白い部分・重要な部分を喋る時間と、その場で周りとは相談したりしつつ自分で手を動かし演習をする時間を交互に取るような講義が良いかもしれない。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**物理学に興味を持ってもらう。研究の進行の一例を知る。

**講義の進め方：**前半は具体的なエピソードを踏まえながら研究内容の紹介を行う。後半は現在の研究テーマ（局在スピンのある有機導体における反強磁性転移）について議論を行いたい。

**一般的な講義や入門書との違い：**出来上がった研究・学問の紹介ではなく、一つの研究テーマが理解されていく過程を共有できる。特に、研究初心者の修士学生の気持

## ◆院生質疑と回答

①物理学において数式（理論）と実験はどのような関係にあるか？（質問意図：物理学という学問について、理論的な研究と実験というアプローチがどのようなかたちで併存しているのかを明らかにしたかったため）

⇒回答：物理学は理論物理学という分野もあるが、基本的には実験を重視する。たとえ理論や数式の上でどれだけ洗練されていても、実験を通じての証明ができなければそれは棄却される。

## ◆アシスタントコメント

物理学は全くの専門外だったので、話自体は新鮮で面白かった。ただ、数式をひたすら解いていくパートは明らかに時間の掛け過ぎで、学生も退屈しているようだったので工夫の余地がある。

物理学という学問の思考の型、何を明らかにするのか、ということがもう少し強調されても良かったように思う。ブランコの喩えは分かり易くて良かったと思う反面、いったん振り子の動態の話を入れるなど、講義の内容が若干込み入っていたので、十分な整理が必要だと感じた。

スライドのデザインや導入はかなり洗練されていたので、自分も見習いたい。

分かり易い話をするために、分かりにくい前提を説明しないといけないという苦しさはよくわかるので、物理学に限定されない課題だと言える。

杉谷（政治学）

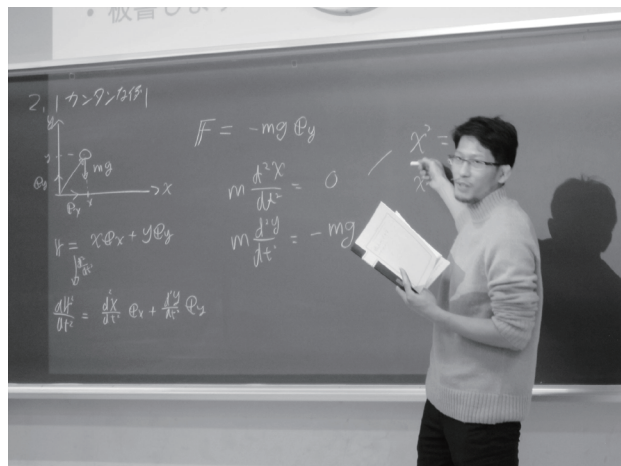
## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・スライドは見やすくなっていた（前回の反省を踏まえて工夫がされていた）。
- ・冒頭での問いかけがうまく講義導入の役割を果たしていた。
- ・プロフィールなどを入れることで親近感がわき、話に入り込みやすくなった。

### 【改善すべき点】

- ・専門用語が多く、説明を要する部分が多かった。
- ・何のために目下の作業をしているのかを共有すべきだった（例えば板書の計算）。
- ・計算にかけた時間が明らかに多かった。
- ・高校レベルの知識と大学レベルの知識の区分を明確にしておいた方が良い。指導要領は Web でも閲覧できる。
- ・ブランコの話は、研究の「喩え」としては魅力的だが、実際の物理学者がやっている研究とどの程度近似しているのかは一考の余地あり。
- ・冒頭での問いかけが、後半とリンクしておらず、もったいない。
- ・物理学の見方を伝えるという意味では、モデル化の際の思考プロセスを言語化した方が良かった。そうすると、他分野とのモデル化の関心や着眼点の違いも見えるかもしれない。





# 列島の中世を旅する——歴史の中の人と生存

2017 年 12 月 14 日実施 / 担当：村上絢一（歴史学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

私たちが生きる現代社会では、国民国家のもと法や裁判・警察・医療・教育などの諸制度が整えられ、理念としては一人ひとりの人権が保障され、日々の経済生活が営まれています。しかし、今からおよそ 900 年前から 400 年前の中世と呼ばれる時代には、この同じ日本列島で、現代とは異なる世界が展開していました。そこに強力な国家は存在せず、人々は峻厳な身分制に整序されていました。そしてそこは、戦乱や災害により生きることの非常に困難な世界であったと考えられます。

前半では、前回の講義で皆さまに『一遍聖絵』をよみ、あげていただいた気づきを整理し、他の史料と突き合わせて解釈を試みます。後半ではこれまでの内容を総括し、現代とは異なる時代に生きた人間をどのようにとらえるか、皆さまとともに考えます。

用して解説を加えました。つぎに、日本中世史における〈学際〉研究の好例として、水野章二氏（自然利用）・酒井紀美氏（夢）・矢田俊文氏（地震）らの研究を紹介しました。後半では、前回講義で解説を試みた『一遍聖絵』の情景より、堀川の材木引きと四条京極釈迦堂を取り上げました。前者については、京都府立京都学・歴彩館による「京の記憶アーカイブ」で公開される大正年間に撮影された保津川の材木筏の写真を紹介し、室町幕府の発給文書から山林資源（材木）の移動と京都の求心性について解説しました。後者については、現在「染殿地蔵」として残る旧跡の写真とともに、『看聞日記』に記録される室町時代の四条道場と七条道場との紛争を取り上げました。講義のまとめとして、「歴史家は何を議論しているのか」と題し、中世身分制をめぐる古典学説を紹介しました。これは前回講義で紹介した「歴史家の研究手法」の延長線上に据えられる問題です。黒田俊雄（1926-1993）・大山喬平（1933-）・網野善彦（1928-2004）らによる非人の社会的位置づけが、歴史家それぞれの歴史観や社会観と通底していることを強調し、歴史学の営為の一端を示しました。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**複数の史料を読解し解釈を導く方法を学ぶこと。過去の歴史世界を「異世界」ととらえ、そこに生きた人間への想像力を培うこと。

**講義の進め方：**講義の注意事項と自己紹介⇒前回の復習と受講者の疑問を整理・紹介⇒複数の史料を紹介し質疑応答⇒中世の時代と「人と生存」について受講者の意見を徴しながら講義。

**一般的な講義や入門書との違い：**受講者は自身の疑問に導かれながら史料に触れ、歴史学の方法を追体験すること。一般的かつ普遍的な問題として「人と生存」を提起し、異分野からの積極的な発言と議論を歓迎すること。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**本講義は、現代とは性格を異にする日本の中世社会について理解を深め、近代国家と対置される前近代「国家」に関する歴史像（歴史的イメージ）を獲得し、その下に生きた人間のあり方を考えるための一助としたものです。

最初に「中世とはどのような時代か」と題して、中世社会の様相を顕著に示す、同時代の宗教観念・飢饉への対応・身分差別の実態について、漢文表記の原史料を引



## ◆院生質疑と回答

①中世社会の状態は分かったが、歴史的な変化はどのように理解するのか？（質問意図：その時代の特徴は講義内で触れられたが、同時に歴史的な変化をどう理解しているのが気になったため。マルクス主義的なモデルが一番はっきりしているが、他にどんな変化のモデルを歴史学が想定しているのか）

⇒回答：マルクス的なモデルのほか、ある歴史的な出来事を変化の起点として考えることがある。

②異世界としての中世と、現代とで共通点はあるか？（質問意図：近代／現代を区別する際に、むしろ現代は中世的な状態に近づいているという議論を目にすることもあり、若干気になったから。また、現代と全く違う社会を示すという講義への逆張りの面でも、意味のあるように思ったから）

⇒回答：いろんな観点があるので難しいが、今日の内容に引きつけられれば、警察が介入できない空間としての大学が、中世的なアジールに似ているように思う。

## ◆アシスタントコメント

今回は前回みた一遍上人の絵巻物を、文献資料と結びつけて中世世界を立体的に描き出してみる、というコンセプトの講義だったように思いますが、そのほかに、前々回の瑞慶覧さんの「学際史」「総人史」に関する話にもつながる歴史学における学際研究の紹介もあり、盛りだくさんの内容だったように思います。その分、情報量も多く、少し早口になっていたのは改善点ですが、前回出席した学生が中心だったので、今回の講義自体は成功だったといえるのではないのでしょうか。僕の専門としている社会学は基本的に近代以降の時代を扱うので、対象としている時代は違いますが、資料に基づいてある時代の社会観を描きだす、そして異なる社会の様子や世界観に触れることで現代社会を相対化するという点には、とても近い目的意識や視座を感じました。院生の検討会では、歴史学に固有の対象はあるのか、という質問をしましたが、それは歴史的な記述自体は哲学や社会学、美術史などでも行われていることであって、その辺りのことに関する歴史学の認識はどうなっているのかを知りたかったからです。回答としては、歴史学はやはり文献中心で、特に政治史は固有の対象とあって良いといえるというものでした。逆に、精神的なものはかなり自分たちのしていることとは違う、それは学者の世界観としてあって良いけど、研究として提示するものではない、という旨のコメントを聞いたのは興味深かったです。こ

の点は、まだ確定ではありませんが、最終回のディスカッションにもつながるテーマのように思います。こちらも楽しみにしています。 真鍋（社会学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・学際性の話を入れたのは、歴史学の応用可能性を示せたので良い。
- ・細かなところで、本筋感を出さずにアーカイブを紹介したり、学際の話を入れたりで、良かった。
- ・前期の講義の話を拾ったり佐野さんのコメントをからめたりしたのが良かった。文学部のFDは各回を結ぶまとめの回がある。一方で、総人のミカタにはそれがはない。このような回を設けるかは別として、意識はすべき（他の講義に言及するなど）。
- ・すぐに前回の絵の解説に入るのではなく、中世の世界観を時間をかけてしたのは良かった。

### 【改善すべき点】

- ・変換アダプターをわすれた。
- ・内容的に詰め込みすぎだったこともあり、やや早口になってしまっていた。
- ・目次があっても良かった。3部構成だといつでもはっきりわかるように。
- ・非人をめぐる学説の比較は、それぞれを紹介するページとは別に、注目する差異に焦点をあてたまとめのページを作るとよりわかりやすい。口頭で学生に話を振ったときの整理が一番わかりやすかった。
- ・せっかく京都の話をしたので、もう少し地理の話を丁寧にして挙げた方が良い。とくに、1回生で地方出身者なら詳しくないわけで。



# 話し手にとってのことば、聞き手にとってのことば

2017 年 12 月 21 日実施 / 担当：岡久太郎（認知言語学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

ほとんどの人は日常会話において、自分が誤解した、あるいは相手に誤解された経験があると思います。プログラミング言語のように人工的な定義がされていない自然言語（日常で用いている言語）において、誤解が生じるのは必然であり、むしろ誤解のないコミュニケーションを想定する方が難しいとさえ言えます。

言語学において、誤解は“何を誤解したか”という観点からの研究が伝統的に行われてきましたが、本講義では“そもそも理解／誤解とは何であるのか”という問を立て、コミュニケーションにおける誤解について考えていきたいと思います。また、講義後半では“Angela killed the man with the gun.”や「四角いリュックのポケット」のような文法的に複数の解釈ができる表現の伝達に関する研究を紹介し、話し手の認識と聞き手の認識の差異がどのように生じるのかを考えていきます。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**ことばの理解について、話し手と聞き手という視点から考える。また、円滑なコミュニケーションのために、どんな点を考慮すべきかについても考えを深める。

**講義の進め方：**誤解の先行研究を紹介し、言語学で「理解」がどう把握されてきたのかを確認し、「誤解とは何か、なぜ起きるのか」を議論する。適宜、受講生の疑問などは拾うようにしたい。

**一般的な講義や入門書との違い：**先行研究を単に紹介するのではなく、講義テーマについて考えている一人として、受講生と共に考えることで、研究とはどのようなものなのかを一緒に体験してもらいたい。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回は、全体を通して、私がどんな研究をしているのかということを具体的に話して、院生の研究を肌で感じてもらえればと考え、講義を組み立てました。まず、話し手と聞き手の知識の違いを取り上げ、「理解／誤解とは何か」を考えることから講義を始めました。

この問いは、言語学的というよりも、むしろ哲学的な問いであり、講義の中でも断ったように、簡単に明確な答えを出せる代物ではありません。ですが、私の研究対象であるコミュニケーションについて考える上で、避けては通れない問題だと考えています。そのため、「理解とは○○だ」と言うことはできないけれど、普段どんなことに頭を抱えながらコミュニケーションの研究をしているのかという点を感じてもらえればなと思い、あえてややこしいこの話題を今回の入り口として選びました。

後半では、具体的に私がしている研究について話しました。紹介したのは認知科学的な実験ですが、その実験デザインの背後には前半に話した哲学的な議論があることを感じてもらうことをねらいました。この点は、言語学だけでなく、全ての分野に共通することではないかなと思っています。

院生質疑の中で、「誤解研究の（岡久の中での）ゴールは何か」といった質問がありました。10 月の講義では自己紹介を兼ねて少しお話したのですが、私はもともと高校の国語の教師になりたいと思い、教育学部で勉強をしていました。

そんな私が言語学を専門にしようと思ったきっかけは、国語学の授業ではなく、むしろ文学の授業でした。私の受講した文学の授業では、1 つのテキストに対するさまざまな解釈の仕方を考え、議論する形式のものが多く、そこで自分では考えつかなかった解釈に触れることができました。

それは楽しい経験であると同時に、自分が国語の教師になったときに、人によってこれだけ多様に出てくる解釈の 1 つ 1 つを正しく掘り取り、教室にいる全員がそれぞれの解釈を正しく理解できるよう指導できるのかという問題を私に考えさせました。もちろん、テキストに書かれている内容から、（あくまで“一般的には”）許されない解釈も存在しますが、国語の教員である以上、間違っていない解釈が生徒から提出された場合、なぜその解釈ができるのかということを他の生徒にも説明する必要があると、文学の授業を通じて思うようになりました。

私が、誤解を研究テーマとしたのは、この思いに根ざしています。同じ言葉の解釈が人によって異なるとき、なぜ各々が各々の理解をしたのかを説明できれば、逆に複数人を同じ解釈に導く手立てにもなりうると考えています。



## ◆ 院生質疑と回答

①なぜ「自信度」を扱うのか？（誤解を疑う動機の研究にしかっていないのでは）（質問意図：個別の内容について突っ込んだ質問がしたいと考えた。自信度に注目するのは、「ん？ 誤解かな？」と疑うための動機に関わる点で、確かに重要ではあるが、「そうだ、これは誤解だ！」と考えるための積極的な根拠を取り扱っているわけではない。その点を明らかにしたかった）

⇒回答：先行研究では単に「自信」が素朴に研究されていて、そのグラデーション、曖昧さを取り扱っているようなものがなかったので、まずそれに取り掛かった。

②誤解の研究はどこに着地すると嬉しいか？（規則の研究、社会秩序の記述、個別の誤解を分析する道具作り）（質問意図：岡久さんのプロジェクトの全体像を明らかにしたかった。個別の研究が、最終的にどういうところに辿り着くと嬉しいのか（社会的にどう役立つとかそういう話だけではなく）が見えると、結果的に、講義全体を振り返るような話が聞けるのではないかと思った）

⇒回答：学部時代に国語教師を目指していたとき、テキストから多様な解釈を引き出しうる箇所に出会った経験が今の研究へ向かう動機につながっている。また、誤解の生じやすさに関わる規則（どんなパラメタが効いているのか、どんな条件があるときか）を明らかにする関心もある。そうした規則が、他の人にも実践上の「手がかり」として役立てば良い、とのことだった。

## ◆ アシスタントコメント

講義検討会の実施がこなれてきたからか、教授法面でも、内容面でも突っ込んだ質問が出ていた。ちなみに、検討会参加者は、講師を含め4人だった。院生側の集まりが悪い日に、代表の真鍋さんに仕事が偏りがちなので、仕事を分散しないといけないと思った。自己反省として書いておく。

少人数ながら、年明けのディスカッションや、シンポジウムについても有意義な話はできたと思う。アシスタントは、院生質問を考えるつもりで講義を聞くので、受講姿勢が変わったのが自分でもわかった。「どんな質問なら、講義内容の理解がより深まるだろうか」「違う観点から講義を捉えられることをどう見せようか」「他分野との対比をどうすれば印象的に示せるか」という観点から聞いていた。本来は、普段の研究でも、そういう視点で他の研究者と関わった方が良いのだろう。

院生質問②では、「多様な解釈が生じるのだとすれば、何が多様性の条件なのか」などの言葉が出た。岡久さんの答えを聞いていて、誤解を生じさせない方が良い立場の人（マネジメント・監督に携わる人、医者・整備士）、誤解の原理を誰かに伝える必要がある人（国語教師、作業療法士）など、誤解の研究は、コミュニケーションに関係する仕事への意義が大きいと思った。今後の研究に期待したい。

谷川（哲学）

### 検討会でのコメント（一部）

#### 【良かった点】

- ・ 誤解という観点から、文学やお笑いなどはどう考えられるかなど連想が広がった（ナンセンスなお笑いは、理解・誤解という観点では扱えなさそう。老いたボケとお笑いのボケとの違いは、演技や意図が関係しそう etc.）。
- ・ スライドに目次があり、前回よりわかりやすかった。
- ・ 受講生とのインタラクションが効果的だった。
- ・ 国語の先生の解釈をめぐる問題（院生質疑）は面白い。国語の授業は、多くにとって共通体験なので「使える」エピソード。

#### 【改善すべき点】

- ・ 込み入った内容を説明するときほど、受講生の反応を見るべきだが、講義慣れしていないので難しい。1回目の講義は事例ベースだったが、今回は理論中心にしたので前回より不安を感じた。
- ・ 院生質疑での答えは、根本的で個人的な回答でなく、講義に沿って答えることもできた。どちらが良いか自覚的に選べると良かった。
- ・ 冒頭の会話例は口頭ではわかりにくい。該当するドラマや映画を利用する、スクリプトを用意して演じてもらう、PPTのアニメーションを使うなどいろいろな手段はある。
- ・ 「知識状態」は一般的な用語か（一般的ではない）。
- ・ 自信度の端的な定義がほしかった。
- ・ しゃべり方が同じトーンなので、落ち着いているのは良い反面、メリハリがないのは惜しかった。トーンを変えたり、繰り返しをすると重要なポイントが分かるから良い。
- ・ 会話参加者の前提知識は、会話文例の前に提示した方が良い。

# 言葉で私たちは何をしているのか

2018 年 1 月 11 日実施 / 担当：谷川嘉浩（哲学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

哲学は言葉を使います。たとえ、言葉以外のものごとを論じる場合でも。講義前半では、前回の講義を違った仕方掘り下げ、補足します（前回の講義を受講している必要はありません）。前回の講義がどのように／なぜ「対話」だったかを振り返るだけでなく、「哲学が常識を重視する」など、恐らく皆さんの印象と違うであろう哲学の特徴について、紹介します。

後半では、対話／コミュニケーションについて、言語哲学の有名な思考実験を通じて考えます。依拠するのは、クワインという哲学者の「フィールド言語学者」の議論です。フィールド言語学者とは、未知の言語の辞書を作ろうとする言語学者のことです。当日は、この議論について、入門書レベルの紹介から、発展的な研究まで見ていく予定です。ここで得たコミュニケーションに関する知見は、（哲学だけでなく）コミュニケーションに関係するさまざまな学問分野に、持ち帰るべき示唆を与えてくれるでしょう。なお、時間があれば、私個人や研究についてお話するつもりです。進路選択や分野選択の参考になればと思います。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**哲学に関するイメージを拓ける。あることを理解しようとするときに暗黙裡に働いている原理を理解する。

**講義の進め方：**PPT を使用。思考実験のときには、適宜質問を投げかける。

**一般的な講義や入門書との違い：**時間をかけて思考実験の解説をする。クワイン＝デイヴィッドソンの「好意の原理」のその後の発展についても紹介する。また、哲学との個人的な出会いについても話す。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**哲学は、「生物学の哲学」「歴史哲学」「文学理論」など、色んな分野に顔を出します。固有の対象がないからです。とはいえ、哲学なる学問はどのようなことをしているのか、何をどう証拠とみとめ、どのよう

に評価されているのか、どのように物事を捉え、書かれ、専門家が専門家として育てられているのか……といったことについて、哲学は、あまり反省的だったとは言えないと思います。

私としては、「哲学という営み」に関するメタ的な分析を遂行したい、というのが、今回の講義の目論見でした。いわば、メタフィロソフィーです。哲学——実際は哲学に限らず、あらゆる社会的な営みが——は、言語と切っても切れない関係にあります。私たちは言語を通じて考え、それを表現し、言語を通じて批判されます。そこで、講義では、「言語」、あるいは、「コミュニケーション／対話」に注目し、そこで（意識されないままに）どのようなことが行なわれているのかを論じたのです。当日は体調不良だったため、その辺りを平易にお伝えできなかったのが残念ですが、そのような意図で構成された議論でした。

当日、「好意の原理」について質問がありました。あまりうまく答えられなかったので、改めて答えてみます。講義で挙げたような極限的な翻訳の場合については、納得しているけれど、同一言語を使用する日常の会話で、そうした原理が本当に働いているのだろうか、と。ある言葉、ある文章、（ある身振り）によってどのようなことを伝えようとしているかを考えると、個々人によって、相手によって、状況や場面によって、時期によって、微妙にニュアンスが違うのではないのでしょうか。一番わかりやすいのは、アイロニーや、お笑いでしょうか。あるいは、「好き」という言葉一つとっても、どんな文脈で、いつどこで誰にどんな風に言うのかで、微妙にニュアンスが変わってこないのでしょうか。授業当日は、ある種の閉鎖的な集団で用いられている独自の言葉（ジャーゴン）の例も出しました。オタクの言葉、ネットスラングなどでは、一見「常識」的に解釈しうる言葉でも、微妙に込められている意味合いが変わっているはずです。そういう風に、言葉に託すニュアンスは、言語レベルでも、文化集団レベルでも、個々人のレベルでも、いろいろ異なっている……というのが実情ではないのでしょうか。そうすると、「好意の原理」は、どのような言語解釈の場合でも、必要になってくると言えないのでしょうか。……長くなりましたが、こんな感じで捉えてもらおうと良いと思います。

## ◆院生質疑と回答

①哲学において新規性とはどのようなものか？（質問意図：「常識」との関係性の議論が講義中にあったことに加え、哲学は、他分野と比べてこの点はわかりづらいように感じたので）

⇒回答：テキスト解釈がベースの哲学の場合は、基本的に新しい解釈の提案という形で新規性が評価されることが多い。

②哲学において議論の前提はどの程度明らかにできるのか？（質問意図：数学においては仮定をすべて明確にすることが求められるが、哲学では暗黙の前提を置くことが避けづらいように思えたので）

⇒回答：議論の前提をすべて明らかにすることは難しい。ただし、ここでいう「すべて」は極端なまでに広い（デカルトの方法的懐疑でいうと、彼は懐疑に際して自身の言語運用について意識的ではないだとか）。哲学の方法論に、哲学者自身がどの程度自覚的であるかは疑問である。

## ◆アシスタントコメント

今回はいつもよりもかなり参加者が多く、活気のある講義でした。講師の体調の問題があったとはいえ、題材も多くの人々の興味を引くものであり、反省会で言われていたほどは失敗していなかったように思います。

今更ながら思いついたので個人的な感想を。フィールド言語学者の問題でのアプローチはなんだか見覚えがあるなあと思っていたのですが、これは要するに統計的な推定問題で、そこで用いられている推論の方法も、実はいかにも統計学らしいもののような気がします。

Gavagai という発話の意味を考える過程はベイズ推定ですし、好意の原理も要するに最尤推定法だというふうに解釈がつくように思います。もっとも、今の機械翻訳の主流は統計的な方法なので、このことが特筆するに値するようなことなのかは分かりませんが……。

須田（解析学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・内容は興味深く、会話を成り立たせる基盤の話をもう少し聞きたかった。
- ・重要な点が色変えされてかつ目次とリンクしており見やすかった。
- ・途中で白板に絵を描いたり、聴衆の間に入り質問をしたり、動きがあるのが良かった。
- ・質問の仕方やまとめ方がリラックスした感じで、聴衆としてプレッシャーがなく良かった。
- ・岡久さんの講義との接続は成功していた。
- ・個人的な話があるのは良いと思った。

### 【改善すべき点】

- ・体調が悪く、講師自身が話している途中に何を話しているかわからなくなることがあった。
- ・各セクションの接続を口頭でするつもりが、パフォーマンスが落ちてうまくいかなかった。
- ・スライドの黄色や緑は見えにくい。
- ・一番下のスライドの文字が出てすぐに次のページにいくのは難あり。
- ・スライドの情報量をもう少し減らしても良い。
- ・質問するときに、間髪入れずにしてしまうところが気になった。少し考える間をあげないと、学生的には回答しにくい。
- ・それまでは、問いかけて考えさせて答える形式だったが、終盤は駆け足で一方的になってしまった。
- ・全体的な感想としては、結構淡々と進んでいったなという感じ。途中たしかに質問もしていたが、わりとあっさりしていた。





# 「教養」として問うべきもの

2018 年 1 月 18 日実施 / 担当：谷川嘉浩（哲学）・瑞慶覧長空（物性物理学）・村上絢一（歴史学）  
・真鍋公希（社会学：司会） / 特別回（異分野ディスカッション）

## 講義紹介

アメリカでトランプ政権が発足してから、ポスト・トゥルースという言葉が耳にしたことがある方は多いのではないだろうか。ポスト・トゥルースとは、客観的な事実よりも、個人にとって都合が良かったり、感情に訴えたりする情報が影響力を持つ状況を意味している。今回のディスカッションでは、「教養」という観点から、この大きな問題に取り組みたい。登壇するのは、後期の授業を担当した谷川（哲学）、瑞慶覧（物性物理学）、村上（歴史学）の 3 名である。「教養として問うべきもの」という今回の論点は、疑似科学とどう対峙するのかといいかえることもでき、その点で、前期のディスカッション「科学とは何か」とも表裏一体である。また、これは、専門家（研究者）と非専門家のコミュニケーションの問題でもあるので、後期のディスカッション「コミュニケーションを考える」にも通じる内容を持つ。要するに、「教養」をめぐる今回のテーマは、これまでの講義の総決算ともいえる内容なのだ。昨年 4 月にスタートした総人のミカタの、一年の締めくくりとなる議論が展開されるだろう。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**科学コミュニケーション、ある情報を付与するということはいままでされてきたが、問題に対する解決策を一对一对応で教えるということは難しい。疑似科学に対抗するためには、ある正しい知識を教えるのではなく、それが導き出されることの必然性を理解する土壌を作ることが重要。教養、分野外の人に伝えるべきその分野の核心とは何か、それを通して、個別の情報ではなく、その分野のスタイルを教えられることが教養ではないか。

**講義の進め方：**統一した PPT を用意する。40 分パネルディスカッション、休憩をはさんで 40 分フロアからの質疑。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想（真鍋）：**今年度の総人のミカタの最終

回を飾る今回は、「教養」をテーマにしてディスカッションを行いました。開始早々、フロアからも「総人らしいテーマですね」という声が挙げられましたが、登壇者の面々もかなり思い入れのあるテーマだったゆえに、全体的に熱の入った議論になったように思います。その反面、講師それぞれの疑似科学紹介やパネルディスカッションに多くの時間を割いてしまい、フロアからの質問を多く取り上げることができなかったのは司会として反省しています。拾い上げられなかった質問に対する講師からの回答は、以下に掲載しているので、ぜひ一読してください。さて、事例紹介や議論を通してそれぞれの講師や分野のスタンスの違いもいくばくかは明らかになったように思います。また、休憩時間にもいくつかの場所で議論が展開されるなど活発な意見交換もでき、充実した時間となったといえるでしょう。

**質問への回答（村上）：**今回の企画は、「大学教育の場」に限り、各専攻分野に即して「教養」のあり方を検討したものである。その対象は大学人であって一般市民ではない。登壇者は自身の専攻分野で修得されるべき〈基本的なものの考え方〉（我々のいうミカタ）を表明したに過ぎない。議論の前提と射程が十分に伝わっていなかったためか、あるいはこの点で誤解を生んだのではないかと思う。「教養＝科学という見方はつまらないというか狭いと思う」とのアンケートのコメントはその例である。それぞれの分野で科学と非科学とを峻別する能力、そして当該分野の「科学性」をとらえ返す内在的な反省こそが、大学教育において目指されるべき教養（教育）であると私は考える。知識と認識を支える地道な体験の世界は、私が担当した回で宮本常一の仕事を紹介したように、それぞれの分野に存在するものと思う。私が批判の対象とした梅原猛の「エッセイ」について、どの程度なら許されるか、とのコメントが寄せられた。「表現の自由」の上、どのような文章も許されると思うが、こうした文章が持つ論理の飛躍や事実誤認を批判し、「エッセイ」と「論文」・「学術書」とを同列に認識しない能力こそが教養であると答えたい。また梅原や上山春平らの本質還元的思考（全歴史を貫徹する「システム」の想定など）を批判したが、これは歴史学の認識を支える抽象化・論理化の作業とは全く別物の操作であることを申し添えておく。限られた過去の痕跡から推論を展開する理性の能力に敬意をはらうこと。開かれた議論により知識

を構築し続ける作業を知ること。そしてある時代とその文化を認識することの難しさを知ること。私は歴史学における「教養」・〈基本的なものの考え方〉をこのように考えている。最後まで付き合ってください出席者の皆さまに御礼を申したい。

**質問への回答（谷川）：**講義中で言及された梅原猛さんに関連して、「エッセイ」ということについて質問がありました。ストレートに答えるというより、谷川なりに、書くことについて、周辺の情報を提供することで、回答に代えたいと思います。エッセイという言葉には、「試みる」というニュアンスがあります。つまり、ものを書くとき、書こうとする当の内容の触りや漠然としたイメージはあっても、全体の明確な構想がないまま書き始めて、書きながら試行錯誤する余地が、エッセイという書き方にはある。要するに、エッセイ的に書こうするとき、他ならぬ自分が書いているのに、書くことによって、自分が思いもよらないところに連れて行かれる——エッセイには、そういう可能性があるということです。ちなみに、そうしたエッセイの可能性を好意的に評価した哲学者に、鷲田清一さんがいます。さらに、有名なフランスの哲学者、モンテーニュの主著が、『エセー（随想）』だという知識を思い出しても良いでしょう。『エセー』が重要な議論を提出しているとみなされ、学問的探究の源泉になっているように、エッセイだったら明確なことは言えない、ということはないと思います。すごく意義のある文章も書けるし、みんなの耳目を集め、検討したくなるような魅力ある文章も生み出せる。根拠をもって、何らかの主張を提示することも、当然できるでしょう。しかしながら、「学問っぽくなさ」という点では、通常のエッセイも、哲学的エッセイも似ています。専門家集団に認められた「論文の形式」に則っていないからです（それがどんなものか気になったら、『論文の教室』などのアカデミック・ライティングの本を読んでみてください）。では、文章は全て論文的でなければいけないのかというと、そんなことはないでしょう。それに、論文的な書き方をするというアカデミズムの習慣も、ごく最近形成された習慣なので、「そうでなければならない、とも言えない」ものでしかありません。とはいえ、論文的な形を守ることには、方法的な利点もあるはずです。論文の形式は一つではありませんが、とにかく、その形式に則って書くことで、漠然と書くよりも、説得的で明瞭に書くことができ、論理的な印象を与えることができたり、自分自身の考えを構造的に整理できるという利点があります。逆に言えば、論文的な書き方の習慣が強力になりすぎて、この形式にそぐわないものが学問の俎上に載りにくくなったということでもあります。例えば、

対話篇を論文だと叫んでも、多分、受け容れられないでしょう。これは、良いことなのでしょうか？ 悪いことなのでしょうか？ ……と、話が逸れました。さて、ここで紹介したエッセイの書き方、そして、梅原さんの書き方を好意的に読めば、そのどちらからも、何か大切なことを考え、語ろうとしているとの印象を受けるでしょう。エッセイを書くことは、線を引いていく軽快な筆の動きが、探究している「謎」に創造的な手がかりを与えてくれると期待することなのかもしれません。そして、鷲田もモンテーニュも梅原も、その軽快さに賭けたのでしょう。ただ、今回紹介された梅原さんの文章では、科学を批判しながら自説に都合の良い科学的成果を（特に説明もなく）取り込んだり、あるいは、最初に使った「霊」という言葉の意味合いが変わってしまうことに気づかないまま、「遺伝子」を「霊」や「生命」と言い換えてみたり……。要するに、自分の紡いできた言葉すら、裏切るような文章なのです。これは、学問的な厳密さ——既存の証拠との整合性——とはまた別の次元の話です。その意味で、提示された文章が、自身の発する言葉に、どれだけ誠実なのかに注意しながら読むことは、学問的な基準とは違う仕方、文章と付き合うための一つの手がかりになるとと思います。



# 人環の先輩の話を聞いてみよう!! ——進路選択について

2018 年 4 月 12 日実施 / 担当：講師全員 / 特別回（導入）

## 講義紹介

皆さんはどうして総人を選んだのですか？これから総人でどんなことをしようと思っていますか？

初回は私たち、総人のミカタの講師メンバーが、1 回生だった頃を振り返りつつ、どうして今の専門分野で研究をしているのかをお話します！それぞれに紆余曲折がありながらも、一貫した思いで歩んできた道のりを、反省や皆さんへのアドバイスも含めて紹介していきます。

後半では参加者の皆さんとも、総人でしたいこと、大学の講義の感想、これからの勉強方法や大学生活のことなどについて、気軽にお話する時間もつくります。昨年度の初回も好評だったこの企画、今年は違ったメンバーの話も参加し、さらにパワーアップしたものになる予定です。

もちろん、お茶やお菓子も準備していますので、ぜひお越しください！お待ちしております。

## ◆講義を終えて

今回は、昨年度の最初の回と同様に、院生が今の進路を選ぶまでの経緯についてお話しました。総人出身の院生もいれば、他大学から来た院生もあり、多種多様な学部生時代の様子を話してもらいました。参加していただいた 1 回生の参考になれば嬉しいです。参加した院生が多かったこともあり、少し間延びしたときがあったのは反省材料ですが、全体を通して、とてもアットホームな回となり、参加してくれた学部生の皆さんといろいろなお話もできて上々の滑り出しだったように思います。

また、1 回生だけでなく、上回生の方にも参加していただき、ミカタの活動も、少しずつ定着してきた印象が出てきたのも、運営としては嬉しく思います。来週は院生の研究内容を紹介しますが、今週来れなかった院生には、今日の内容も併せて話してもらう予定です。ぜひお気軽にお越しください。

真鍋（社会学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・雰囲気よく開催できて良かった。学部生に自己紹介してもらったのが成功した。
- ・昨年度から継続して参加してくれる学生も一定数いた。

### 【改善すべき点】

- ・院生は話が長かった。間延び、中だるみした感がある。司会を立てるだけでも違うかもしれない。
- ・フリートーク中、一見話しているようにみえるグループの中で、若干あふれている人に目を向けてられるような配慮ができればベスト。
- ・今後の講義について、スライドを用意するなどしても良かったのではないかな。
- ・学部 1 回生同士が話せた方が交流できるような設計をした方が望ましい。開始 15 分前から、積極的に交流できる場にするとうい。
- ・フリートークのときに、ひとりの子とずっと話してしまったのが引っ掛かっている。色んな人と話せたら良かった。
- ・昨年と違って総人合宿がまだなこともあり、総人のミカタがどういう場なのかという概要の説明があつてしかるべきだった。講義しない院生もその場にいるとか、60 分講義、30 分フリートークがあるとか、そうした基本的な説明をするべき。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・もっと堅いプレゼンみたいなものだと思っていたが、アットホームな雰囲気であやすかった。今日は別件があり最後までいられませんでした。次回からはフルで参加します。
- ・皆さん、堂々と話しておられて、分かりやすく話しておられて、端的にすごいなと思いました。さすがだなと思いました。
- ・院生の方と交流する機会がこれまでほとんどなかったの、話をうかがえてとても参考になりました。
- ・フリートークの時間に先輩方いろいろ話せて楽しかった。



# 人環の先輩の話を聞いてみよう!! ——研究内容について

2018 年 4 月 19 日実施 / 担当：講師全員 / 特別回（導入）

## 講義紹介

総人のミカタでは、それぞれの院生が、自分の専門分野の「ものの見方」がわかるような講義を計画しています。しかし、各院生が実際にどんな研究課題に取り組んでいるのかは、あまり詳しく紹介する機会がありませんでした。そこで、今回はメンバーそれぞれが、いったいどんな研究をしているのか、そのテーマを選んだ理由は何か、実際の研究はどんな様子で進んでいくのか、といったことを紹介する時間をつくることにしました。

メンバーはみな個性的で面白い研究をしているので、内容自体もとても興味深いものだと思います。それに加えて、どんな様子で研究をしているのかという話からは、なかなか想像できない院生の生態が知れる機会になることでしょう。

今回は少しスタイルを変えて、フリートークの状態から、研究内容の紹介を進めて行く予定です。途中抜け・途中参加でも大丈夫ですので、気軽に遊びに来てください。

## ◆講義を終えて

今回は、院生メンバーの研究テーマについて、お話する時間を設けました。1 回生はまだ入学したてで、研究のイメージもまだしっかりとはないかと思いますが、それぞれの院生が、興味の向くままに（大変なことも多いけど）、自由に楽しく研究している普段の様子が、なんとなく伝わったなら嬉しいです。また、2 回生以上の参加者の皆さんには、研究テーマの選び方などについても、参考になることがあったのではないのでしょうか。

今回も和気あいあいとした雰囲気で、メンバーの話もテンポよく進めることができました。いよいよ来週からは模擬講義が始まりますが、メリハリをつけて、講義の前後には今回のような話しやすい雰囲気づくりにも努めていきたいと思います。

真鍋（社会学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- 全体的に滑らかに行った。こういう回は、最初からフリートークという形式もありだと思う。
- 研究の説明もテキパキしていた。前回の反省が活かしていた。
- 今回来てくれた学生は、来週以降も来てくれそうな感じになっているのは良かった。
- 紹介の合間に質問タイムを入れたのは良かった。講義のときも、フロアに質問を開く頻度が多い方が良い。

### 【改善すべき点】

- 全員スライドで統一しても良かったかもしれない。
- ビラを用意するというのは結局忘れてしまった。講義の予定が載っているのので、最初の数回は配布資料といっしょに置いておくのが望ましい。
- 結局、一人としかしゃべれなかった。ふらついていいる院生が一人いた方が、フリートークの人の流動性がつくれるので、そうした工夫が必要。
- 学部生目線で行くと、雰囲気は思ったより緩くて参加しやすいが、講義をしているので最初はやはりハードルが高い。



# 禁忌と両義性の文化人類学

2018 年 4 月 26 日実施 / 担当：福田真郷（文化人類学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

些細なものから重大なものまで、世界には数多くの「禁忌（タブー）」があります。あなたの身の回りには、どんな禁忌（タブー）がありますか？

これまで文化人類学では、禁忌は格好の研究対象となってきました。「未開」の社会のみならず、「文明」的な社会にあっても数多くの禁忌は存在し、新しく生まれ続けています。ことに食や性の禁忌は、今なお大きな関心をもって迎えられています。なぜ、どのようにして禁忌は生まれるのか、また、禁忌をやぶるとどうなるのか、などと考えることは、その文化を知る格好の材料となります。「綺麗は汚い、汚いは綺麗」。この『マクベス』の一節には、「両義性」が見て取れます。この両義性が禁忌の謎を解くカギとなります。

今回の講義では、「禁忌」と「両義性」をキーワードに、いくつかの事例を紹介して、古典的な人類学的なものの見方の一端をご紹介します。皆さんと一緒に、タブーの背景には何があるのかを考えてみたいと思います。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**タブーや穢れ、両義性などの概念を紹介、象徴人類学的方法論を理解してもらう。フィールドワーク的な思考よりも、解釈の方法論の話が中心。

**講義の進め方：**【～15分】学生にまず文化人類学についてのイメージを問いかける。禁忌について考えることがなぜ人類学なのか、文化とはなにかという定義を提示したい。板書かPPT。【～30分】以下PPT使用。学生にタブーをあげてもらいたい。メアリー・ダグラス『汚穢と禁忌』旧約聖書の例、食のタブーについての紹介。なぜカニは食べてはいけないのかなどを適宜学生にも質問。【～45分】両義性の説明。例として異人論を紹介。岡正雄、山口昌男、メアリー・ダグラス、小松和彦。時間があればカニバリズムの話をしたい。【～60分】グループワークをしたい。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**「禁忌と両義性の人類学」というテー

マにしたが、なぜそのテーマにしたのかという説明が抜けており、目的や帰結点の見えにくい講義であったかもしれない。この点について説明をしておく、私は学部卒論で友引禁忌（友引の日に葬儀をしない習慣）について書き、今は沖縄の米軍基地との境界にある黙認耕作地について興味を持っている。そうした禁忌や境界への関心もあってこのテーマでの発表に至った。主に象徴人類学を中心にまとめたが、内容面ではやや盛り込みすぎの感があり、どこが重要なところかを精査できていなかったように思う。次回以降はアウトラインを明確にし、メリハリのある講義を目指したい。また、ゼミ発表と同様の感覚で用語をそのまま説明なく使ってしまったたり、用語選びに慎重さを欠いている部分があったりすることに気づかされた。作成時に注意をするほか、用語・人名一覧やレジュメをプリントして配布するなどの工夫をしたい。技術面に関しては、人前で話すことに慣れておらず心配であったが、いざやってみると自分が思ったよりも声は出た。早口である、スライドを送るのが早すぎるという点など、いただいたご指摘は反省し、次に生かしたい。

**2 回目に向けて・その他：**講義中のフロアへの質問をあらかじめ決めておき、スムーズに問いかけられるようにする。話す速さ、スライド送りの工夫、レジュメを作る。

## ◆院生質疑と回答

①その社会で通用している禁忌の説明や理解、共同体に自覚されている説明や理解ではなく、彼らが意識しているよりも説得的かつ首尾一貫した形で、タブー／非タブーを分けようとする発想を研究する姿勢が見えた。そうした研究関心はどこから来ているのか？（質問意図：ディシプリンの固有性を打ち出そうとする本質主義的な発想をとることは難しいと、感じていた。だから、分野の固有性というよりは、分野ごとにある雰囲気の違いを直感的にわかちてもらうには、その分野が傾向として持っている関心の方向性のようなものが共有できると良いと思った。また、何かを記述するというとき、文化人類学者は外からやってくる観光者のような存在となっている。そうしたあり方を福田さん自身がどう考えているのか知ることができるかもしれないと思ったから）

⇒回答：説明の途中で「オリエンタリズム」（サイド）

を持ち出していたように、福田さんは、質問を権威ある研究者／西洋人／男性が分け入っていき、外からの視点で無遠慮に記述してしまうという、文化人類学だけでなくフィールドワークを要する学問全般に該当する「調査者の暴力性」という観点から問いに答えてくれた。そうした動きに関する批判についても当然言及があった。

②タブーなどのように極端な事例に注目するのはなぜなのか？（質問意図：浅田彰とポール・ヴィリリオが提唱した「事故の博物館」という考え方がある。事故というアノーマルな事態は、アノーマルでありながらテクノロジーにとって避けることができない。そこで、事故をテクノロジーについての未知の側面に関する情報を私たちに開示してくれるものとして読み解くことができるのではないか、というのが彼らの発想だった。こうした発想と、タブーへの文化人類学者への注目は似ているところがあるように思えた。どこが似ていて、どこが違うのが気になった）

⇒回答：奇異で目立っているからという理由に加え、そうした（共同体にとっての）アノーマルな事態は、当該共同体に関する未知の側面を開示しているという視点は共有しているとの回答があった。

## ◆アシスタントコメント

2018年度、総人のミカタが始まって初回の講義だった。1、2回目は、学部生との交流に時間を割いたのだが、そのときと比べても人数が倍ぐらい多かったので、「文化人類学」（あるいはミカタの講義全般？）への関心の高さが伺える。

講義は個人的にも勉強になったし、講義検討会での福田さんとのやりとりもとても刺激的だった。「難しい」けれど「理解できた」という感想の学部生が多かった印象がある。単位の出ない講義に来ているのだから、意欲があり、知識水準も高いという例外的な状況であることは踏まえた方が良いでしょうと思う。踏まえた方が良いでしょう、何か自分の知らない魅力的な世界がそこにあって、何か楽しそうに熱量をもって研究しているらしい姿勢は、最も大切な学問への触媒だという意を強くした。この講義にはそれがあった。

検討会の最後に、「入門書や概説書を読めば済ませられるような内容を反復するのでは、総人のミカタで院生が講義しているという利点が活きない」という趣旨の意見が出た。これは、今回の講義には当たらないだろうが、気をつけた方が良いでしょうと思った。

谷川（哲学・観光学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 内容が盛りだくさんで、勉強になって面白かった。
- ・ みんなに伝わっているようで良かった。
- ・ 少し早口ではあったが、熱量は伝わってきた講義だった。聞き取りやすかった。
- ・ どの院生の講義よりも情報量が多くて、一般の教員の講義スタイルに近かった。
- ・ 情報量が多い方が好きという京大生も多いと思うので、それが一概に悪いとは思わない。
- ・ 分かりやすい講義であった。
- ・ 熱心に聞いてくれた人がいた。

### 【改善すべき点】

- ・ 早口で、学部生はついていくのがしんどかったかもしれない。
- ・ 「功利主義的」など、使われる言葉の定義が曖昧だったのではないかな。
- ・ 用語の説明を丁寧にすべきか／説明しなくても良いか、という区別に関して、講師と受講生との間にギャップがあったのではないかな。
- ・ 引用集や用語集などの、確認できる資料を用意しておくといい。
- ・ スライドの内容をしゃべり終わってすぐ次に移るのはよくない、少し間を置くべきだった。
- ・ スライドの中で大事な情報と大事ではない情報の差異を表す必要がある。
- ・ （講義内で提示された）理論同士の関係を明確に説明すべきである。
- ・ なぜタブーなのか、人類学におけるタブーの位置づけ問題を説明する必要があるのではないかな。
- ・ レヴィ＝ストロースの理論を紹介するのか、近親相姦の具体例としてのレヴィ＝ストロースが説明されたのかがわかりづらかった。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ ちょっと早かった。用語が難しかった。
- ・ 「境界」と「マイノリティ」の違いが気になった。
- ・ 「コミュニティ」の考え方が難しかった。
- ・ タブーと秩序が密接につながっているのが自分の中でイメージできて、面白さを実感できた。
- ・ タブーについて「宗教的に禁止されているから」など一面だけで捉えるのではなく、もっと深く多面的な面から捉えている点が面白かった。



# 海洋生物の自然史——生物の多様性とさまざまな共生系 1

2018 年 5 月 10 日実施 / 担当：山守瑠奈（海洋生物自然史学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

海洋にはさまざまな門の動物が生息しています。生涯岩に固着して濾過食などで餌をとる動物、自らの力では殆ど泳がずに海流に身を任せて漂う動物、地形を改変して自ら巣穴を作る動物、そして、それらの動物やその巣穴を住处として巧みに利用する動物。この講義では、海に生息するさまざまな動物門を数々の驚きの生態や形態とともに紹介します。そして、それらの生物が時として互いを利用し、また時として互いに手を取り合って生きて行く様を見ていきます。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**海洋生物の面白い生態や形態を知り、生物研究の面白さを伝える。

**講義の進め方：**【～ 15 分】PPT。地球上の生物多様性と、海洋生物の体のつくりの多様性。【～ 30 分】PPT。さまざまな動物門の紹介。【～ 45 分】PPT。海洋生物のさまざまな生息環境、そこで展開される共生システム。【～ 60 分】PPT。多様な共生系。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**オリエンテーションのときは学生さんたちが皆文系だったので、興味を持っていたかどうかが不安でした。ですが、皆とてもしっかりとお話を聞いてくれて、投げかけた質問にも答えていただけたのでとても嬉しかったです。いただいた感想はとても励みになりました。ご助言も、今後の講義やプレゼンで活かしていきたいと思います。

生物たちは絶えず人の生活に関わっていて、人の活動のひとつひとつが生物に影響を与えていきます。私がご紹介できるのはほんの少しですが、講義を通して少しでも生物に興味を持ってもらえたらとても嬉しいです。

次回の講義では、人と生物の関わりにも焦点を当てていきたいと思います。今回いただいたフィードバックも反映させていきますので、また聞いていただければ幸いです。よろしくお願いします。

**2 回目に向けて・その他：**羅列的になりがちな部分（ストーリーと起伏をつけてお話をする）。

## ◆院生質疑と回答

①**自然史研究の目的にはどんなものがあるか？（類型化以外に）**（質問意図：今回の講義では、生物がどのような分類体系になっているかという点や、共生にはどのようなパターンがあるかという点についての説明が多かった。このように「分類すること」自体が研究目的となるのか、他にも目的があるのかを問うことで、自然史研究の「ものの見方」が浮き彫りになると考えた）

⇒**回答：**系統樹を作ることや、種の分化・多様化がどのようにして生じたかを明らかにするといった目的（自然誌よりも「自然史」的な見方）もあるとのことだった。

②**種の特性を把握することが重視されると思うが、個体差はどのように扱われるか？**（質問意図：発達研究では、その発達の時期や年齢に特有の一般的な特徴を捉える一方で、個人の発達史や個人特性に着目する研究のスタイルもある。生物学においても、このように「個」に着目する方法があるのか気になった。また、個体差に着目することで、逆にその種に普遍的な特性が把握できるなどの利点もあるのではないかと考えた）

⇒**回答：**個体差に着目することはほとんどなく、その種に普遍的な特性を把握すること（個体差を無視できるくらいサンプルを稼ぐ方法をとるらしい）が専らの研究スタイルになるとのことだった。

## ◆アシスタントコメント

講師自身の「生き物」に対する情熱がありありと伝わる講義で、多くの受講者が惹き込まれていたのが印象的だった。講義後のフリートークでも、質問やディスカッションが絶えなかった。また、講義スタイルもかなり確立されていて、院生メンバーにとっても得るものは多かったようだ。

講義の導入部分で、山守さんは自身の研究を引き合いに出しながら、自然史研究の基本的なプロセスについて概説していた。これは簡単なようで、意外と難しいと思う。なぜなら、自身の個別の研究を、自然史研究というひとつの大きなディシプリンのなかに位置づけなおす作業が必要になるからだ。このような作業を通して、自身の研究をメタな視点から眺め相対化することが可能になると思われるが、当の本人はそのようなことは意識して

いなかったという。センスや才能のなせる技かもしれないが、この作業を当人が意識化することこそ、「総人のミカタ」で講義することのひとつの意義だと感じた。

今回の講義も非常に待ち遠しいが、その前に、来月は福田さん（人類学）、山守さん（海洋生物自然史学）のディスカッションの会が予定されている。「フィールド」を巡って自身の研究を2人がどのように語るのか、今から楽しみでならない。 萩原（発達科学）



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- みんな文系でアウェーかと思っていたが、話に笑ってもらえ、反応が多くて良かった。
- 話にユーモアを加えていて聞きやすかった。
- 生物の分類の話は体系化が難しいが、生物を履修していなくても全体像が見えてきて良かった。
- 情報量が適切で、内容がすんなり入ってくる面白い授業だった。
- 研究の楽しさや、山守さんの熱意が伝わってきた。
- フィールドや室内での研究の方法論の話が、「総人のミカタ」の趣旨にも合致していて良かった。
- スライドの写真が多く、1枚1枚のスライドを長く見せていたので見やすかった。
- 導入部分での個人の体験談は受講生を引き込みやすく、また、講師も自分の研究を自然史研究の中に位置付けられるという意味で良かった。
- 受講生を指名して当てていくテンポが良かった。

### 【改善すべき点】

- 「共生関係」についてのスライド中、矢印関係の意味が不明瞭だった。
- スライドの写真の情報として、撮影場所や時期、スケールの情報がほしい。
- 自分の研究が生物学の中でどこに位置付けられるかや研究目的を示せたらさらに良かった。
- 「共生関係」の具体例列挙は、全体的に少し長かった。情報をいくつかピックアップしても良かったのではないか。あるいは、生物の写真と共生名でグループワークをする(90分授業なら可能)か、それぞれの共生分類間の関係を示してストーリーを作るという改善策もある。
- 「分類基準」については、具体的な生物の例示だけだったので、その分類基準を詳しく話しても良かった。
- 自然史の「史」っぽさがあまり感じられなかった。「自然誌」との対比で説明しても良かった。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- プレゼンがカラフルで大変面白かったです。
- 自然史は今の世界や自然を観察しながら、自分の（ヒトの）ルーツを探っているようで面白かったです。次も是非参加したいです。
- スライドがとても見やすく良かったです。

# セックス・アンド・ザ・アンソロポロジー

2018 年 5 月 17 日実施 / 担当：福田真郷（文化人類学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

今回は禁忌（タブー）についてお話ししましたが、性に関する禁忌のない社会はないでしょう。性についての話をすることも、多くの場面では禁忌となるかもしれません。しかし、性は人類にとって重要な側面であり、性について扱う人類学は古くから存在しました。

人類学と言うと、「未開」な文化やかかった習慣を研究するイメージがあるかもしれません。ですが、世界中の面白おかしい性にまつわる習慣を集めるだけでは人類学とは呼べない、あらかじめおことわりしておきます。一口に性と言っても、切り口はとて多くあります。テーマもフィールドも、女性器切除などの「伝統」と現代的価値観の対立、自然科学、近親相姦、風俗店、婚姻、セクシャルマイノリティ、といった具合に、幅が広いのです。

今回の講義では、「ジェンダー」「エロス」を中心に据えて、文化人類学は性にどのように向き合ってきたのかを提示し、それを踏まえたうえで後半では皆さんにも議論してもらいたいと思います。

ミニズムっぽい話。女性器切除の問題など。グループワークか討論をさせたい。今のところは相撲協会の土俵の話などの女人禁制に関する議論を検討している。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**まず女性誌の性の記事と風俗レポの紹介について補足。そこに描かれた「恋多きアラサー女性」と「風俗通いのモテない中年男性」の性愛。ここに描かれた、対極のようにみえるこれらが双方ともに「エロス」を求めている。あらゆる「イヤラシ」の世界にも「反エロス」だけではなく、「エロス」は存在し、人々がそれを求めているということの例示でした。わかりにくかったかと思います、すみません。

今回はデリケートなテーマであったが、こうした場で声に出すこともはばかれるような内容をあえて提示した狙いは、ひとつには（前回の講義の）「禁忌」を破るということのデモンストレーションをすることにあった。事実、インパクトはあった。ただ、今回も構成が羅列的で素材をうまく活かせなかったように思うし、テーマがテーマであるだけに、やや配慮に欠ける部分があったことも反省している。

難しいことをわかりやすく話すことは、講義をする上では最も重要なことのひとつだろう。今回の講義は、基本的な用語の説明などが乏しく、その点でも不親切だった。前回より改善した部分もあったと思うが、今後は話すペース、緩急、といった技術面も含め、いただいたご指摘を真摯に受け止め、改善したい。ありがとうございました。

**1 回目以降の改善点と手応え・その他：**話し方、スライドの繰り方については若干の改善を見たと思っている。発表内容自体はまとまりがなかった。前回も同様。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**人類学的立場からみた性について（近親相姦タブー、変態性欲、ジェンダーと文化の対立）の議論を理解してもらうことを目標とする。現実的な問題と向き合う上での文化人類学の必要性をわかってもらいたい。

**講義の進め方：【～15 分】**以下 PPT。セックスを扱う（文化）人類学それぞれの紹介。性の人類学（異文化／自文化）、ジェンダーの人類学（男性／女性）、エロスの人類学（エロス／反エロス）、セクシャリティの人類学（セクシャルマイノリティ／異性愛）。明確に分けることは難しいが、ざっくり問題系を紹介。①～③は順番を変えるかもしれない。【～30 分】①インセストタブーと人類学、その他の分野からの視点も含めて古典的な性についての人類学の研究。婚姻、リネージなどマリノフスキー～レヴィ＝ストロースくらいの古典的な性の話。【～45 分】②それに対して今日的な人類学、エロスの人類学について研究の一端を紹介。場の空気にもよるが、適宜画像を使用したい。【～60 分】③ジェンダーの人類学。フェ



## ◆院生質疑と回答

①文化人類学の研究は、どの程度研究者の価値判断から離れることができるのか？（質問意図：研究対象やその手法を鑑みるに、研究者の価値判断から逃れることは難しいように思えたので）

⇒回答：文化人類学はむしろ研究者の価値判断を相対化することに力点がある。

②差異に着目した研究が多いように思えたが、逆に共通点に着目することはどの程度あるのか？（質問意図：あまり芸のある質問ではないが、講義内容を見ていて疑問に思ったので）

⇒回答：差異に注目することもこのような（研究者の価値判断を相対化するという）観点からは当然である。同一性に注目することがあれば、それは違いがあつて当然と思われているような、非常に異なる文化間での比較などだろう。

## ◆アシスタントコメント

さて、反省会でも繰り返し指摘されていたことですが、非常にきわどい素材をうまく料理して、文化人類学の研究の具体例として提示していた点は非常に良かったと思います。個人的には、途中の具体例において、一般的には低俗と思われるようなものから、そのロジックを抽出するという試みが印象的でした。また院生質疑での、自分のことをよりよく知るために他人のことをよく知ることが文化人類学の目的の一つである、といった回答は誰にでもわかりやすくその意義を伝えられるものでした。「生」の素材を学生に見せる際の配慮や、内容のまとまりの面など改良すべき点もありますが、総じて成功していたのではないかと思います。

須田（解析学）



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・授業中のスライドで、キーワードに色を付けているのは良かった。
- ・しっかり調べているので、内容的に充実していた。
- ・情報量が多いために早口になる、という事態は改善されてきたと思う。
- ・きわどく扱いづらい話題についても、まじめなトーンで講義できていた（少なくとも悪ふざけで性のことを扱っているような雰囲気にはならなかった）。
- ・院生質疑が、講義全体を俯瞰する感じで良かった。

### 【改善すべき点】

- ・ただ事例を並べただけで、全体の構成としてまとまりがなかった。
- ・平易な言葉で伝えることができていなかった。
- ・抽象的な議論と具体例の間の結びつきについての説明もやや不足していた。
- ・スライドに文字がやや多い。
- ・具体例を表示する操作に若干手間取っていた点。
- ・ミードの研究を紹介しながらアメリカ社会への影響を言及したのが良かった。
- ・講義の最初に、（性的なものを扱う）きわどい話題であることを断るべき（性の話題を扱うこと自体は言わなくても良いと思うが、図を使うとき、スライドをめくる前に注意を促した方が良い？）。
- ・今日の話の全体的な問題設定がほしい。
- ・今日の講義が、福田さんの中でどういう位置づけになるのかの説明がほしかった。
- ・提示された資料から何を読み取れば良いのかがよくわからなかった。
- ・ジェンダー・セックス・セクシュアリティの差異、基本的な用語の確認、専門用語の説明がほしい。
- ・Webサイトをスクリーンに出すとき、字が小さいので拡大した方がよい。
- ・ショッキングな内容だった、という感想が得られることは本来の目的からして良かったのか？
- ・分析の手法、女子割礼など、テーマを一つに絞って授業を構成しても良かった。
- ・話のペースが単調になりがちだったので、緩急をつけたい。

# 文学のミカタ①——「文学」の定義とその研究方法

2018 年 5 月 24 日実施 / 担当：山根直子（日本近代文学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

「文学」というと、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。小説？ 詩？ 純文学だけを指す？ ラノベやマンガは？ 「文学」は身近なものでありながら、その定義を問われると、困ってしまいませんか？

また、皆さんは「テキスト」と「作品」、「作家」と「作者」の違いをご存知ですか？ 実は、これらはそれぞれ全く異なる概念なのです。一体どのようにちがうのか？ この問いには、文学理論が深く関わっています。

今回は、文学の定義を確認し、従来の主要な文学研究の「ミカタ」を学びます。特に、私の専門である日本近代文学の「ミカタ」を中心にをご紹介します。高校までの「国語」とは一味違う、「文学の見方」を知るきっかけにしてもらえたら幸いです。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**文学の定義や文学研究の多様性を学び、文学に対する多角的な視座を養うきっかけを得る。

**講義の進め方：**【～15 分】学生に文学の定義について質問。文学の定義の紹介（以下全て PPT で講義）。【～30 分】学生に文学研究のイメージを質問。その後、主要な文学理論などを紹介。従来の文学研究の見方を学ぶ。実際に文学作品を例に挙げ、その文学理論の有効性を検討する。【～45 分】日本近代文学の研究手法の紹介。日本近代文学研究の歴史を辿り、文学理論の取り入れられ方、現在良いとされる研究方法などを説明する。高校までの国語教育がどの研究方法に則っていたのかを確認する。【～60 分】どの研究方法に関心を抱いたか、将来性を感じたかを学生に質問し、自由に議論してもらう。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**今回『文学』の定義とその研究方法というテーマを選んだ理由は、大学の講義では（特に日本文学系の授業において）あまり扱われていないテーマだからです。個別の文学作品をとり上げ教員が自分の研究方法を示すことや受講生各自に先行研究やゼミでの議論を通して学ばせることは非常に大切です。しかし、個々

の作品を扱うだけでは、ジャンルとしての「文学」の定義や研究方法そのもののあり方にまで思索を巡らせることは難しいと感じたため、今回はこのテーマを選びました。

本来これは 60 分の授業には相応しくない大きなテーマです。情報量が多く進行速度も速かったため、受講生の皆さんに難しい印象を与えてしまいました。また、文字が主体である「文学」は、扱う文字数がどうしても多くなり PPT では読み難いと感じられた方が多かったようです。取り上げた作品の概要や専門用語が説明不足で、入門的な授業としては不親切であったと反省しています。反省点の多い講義でしたが、研究方法のあり方に独自の疑問を持つ受講生がいたことを嬉しく思いました。文学研究は自分独自の研究方法・文学理論を作ることでもあります。そのために、まず従来の方法に疑問を持つことが必要です。自分の中に生まれた問いを大切に、ぜひ育ててみてください。次回はレジュメを中心とした授業形式にしようと思います。情報量を絞り語句の説明を含めたわかりやすい構成を心掛けたいと思います。

**2 回目に向けて・その他：**情報量を絞る。用語等の説明を丁寧に行う。レジュメを用いる。時間配分に余裕を持たせる。



## ◆院生質疑と回答

### ①文学研究者は普段どのようにして研究をしているのか？

（質問意図：今回の発表で、文学研究者の普段の様子があまりイメージできなかったが、それを明らかにすることは多くの参加者にとって有益ではないかと考えたため）

⇒回答：文学者はテキストに徹底的に読み込み、それに関連する資料にも目を通す作業を日々繰り返している。資料収集といったプロセスもある。

### ②文学者や文学と政治の関わりについて感じていることは？

（質問意図：今回の講義の後半で政治が扱われていたため）

⇒回答：文学者の政治的発言の一部が陳腐極まりないものに過ぎない点について同感。ただ、それをもって文学が政治に対して全く無意味で無力であるというのは早計。文学の存在意義は世界観の再構築への扉を開くことであり、政治という枠組みを大きく揺るがしうる力を秘めている。

## ◆アシスタントコメント

PPTでの発表に講義担当者が慣れていなかったこともあり、レジュメをそのままスライドに写したという感の内容であったことは否めない。

情報量が多く、文学研究の道具立ての説明は洗練されていたが、それらの相互関係が分かりにくかった。また、文学の実例がいくつか提示されていたが、参加者にうまく伝わっていたかは微妙。むしろ、実例部分はうまく抽象化した方が良かったのではないかと、という指摘があった。次回以降の授業ではレジュメなどを用いての発表も考えるのではないかと思った。ただ、経験が全くないという割にはスライド一つ一つには工夫が見られており、そちらを改善しても面白いと感じた。コメントが相次いだ情報量についても、むしろ文学研究の奥深さや複雑さ、歴史的経緯を知るといふ点では優れた講義であったとも言えるかもしれない。いずれにせよ、参加者からあれだけのコメント量を引き出したという点ではかなり高い質の講義であったと思う。

杉谷（政治学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 文学研究について、疑問や興味を持ってくれた受講生がいた。
- ・ 授業を聴くような気持ちで聴けた。
- ・ 作家や作品といった普段は気にしない区別から導入した。
- ・ 研究の引用が多い点。研究の思想的背景に気配りできている点。

### 【改善すべき点】

- ・ 情報量を減らし全体的に説明不足にならないように気をつける。
- ・ 要点のみ説明するか、あるいは抽象化して話す。
- ・ 山根さん自身の言葉で説明する。
- ・ 図式化したり、列挙したりしながら説明する。
- ・ 授業の焦点・理解してほしいことを絞る。
- ・ スライドを読みやすいように作る。
- ・ 講義の目的をスライドの初めにもってくる。
- ・ フォントの使い分けに気をつける。
- ・ 1つのスライドに載せる重要なことは1つにする。
- ・ スライド全体や文字の色使いに気をつける。
- ・ 引用と要約にメリハリをつける。
- ・ 引用をするときは短くする。
- ・ 進行速度が速く、受講生に考える時間をあげられるように気をつける。
- ・ 話始めは身近な話から始める。
- ・ 難しい単語を使ったときは補足を入れる。
- ・ 一回の講義で導入する用語の数を絞る。
- ・ 講義中における間の取り方・話し方を工夫する。
- ・ 授業が単調にならないように気をつける。
- ・ 他の講義との関連性が話せるようにする。
- ・ 座って講義をするより動きながらしゃべる。
- ・ 作家の人物紹介や参考文献リストを載せる。



# 数学における解析学

2018 年 5 月 31 日実施 / 担当：伊縫寛治（解析学） / 通常回（1 回目）

## 講義紹介

この講義では、数学における解析学と呼ばれる分野についてお話ししたいと思います。解析学に含まれる数学の単元の例として、微分積分といった極限操作を用いるものが挙げられます。この単元は、理系の学生であれば大学 1 回生から学び始めますが、登場する定義が少し複雑であるために苦手と感じる学生が多いようです。

しかしこれらの定義は学生を困らせるために煩雑になった訳でなく、数学者が厳密に考えた結果であり、曖昧さを回避するよう書かれているため複雑に見えると思われます。今回の講義では、数学における定義などがどのような経緯で厳密なものとなり、どのように扱われているかを知ることが目標とします。より具体的には次の 4 ステップに分けてお話をしたいと思います。

- ①解析学と呼ばれる分野について
- ②反例いろいろ
- ③数学において厳密に考えるとは？
- ④論理式の練習

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**数学的な厳密性は論理学に由来するものであると知ってもらう。

**講義の進め方：**【～15 分】数学における解析学では $\infty$ を考慮した専門分野であることを説明する。 $\infty$ を考慮した数学的な内容は直感的な理解ではうまくいかないことがあることを説明する。【～30 分】いくつかの例を通して $\infty$ を考慮した数学的な内容は直感的な理解ではうまくいかないことがあることをなんとなく理解してもらう。【～45 分】論理学（特に $\exists$ と $\forall$ ）について説明する。形式言語における記号の順序と任意に定めた変数は今後固定するという事に注意するよう説明する。【～60 分】さきほどの例をもう一度挙げ、形式言語に慣れてもらう。

## ◆講義を終えて

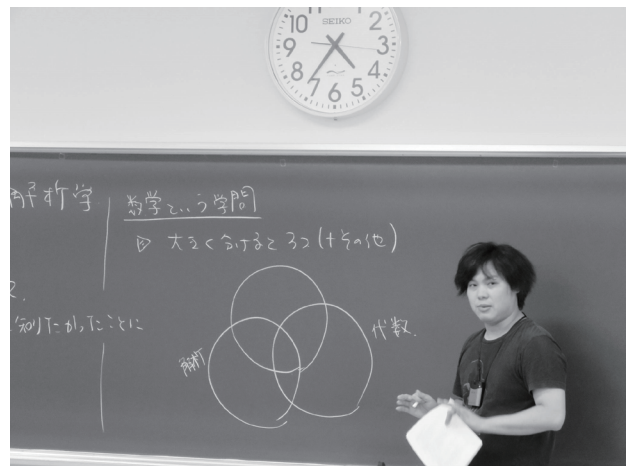
**コメント・感想：**今回講義をやってみて、皆さんが意外と自分の話を聞いてくれていて、嬉しく思いましたしそ

して驚きました。個人的に、講義中にいきなり質問が飛んできてくると実は嬉しかったです。ただ、内容が少し難しかったようで改善の余地がある気がします。また講義内容も全体的に少し欲張りすぎたかなと反省しています。

授業の始めでも話しましたが、理系の大学生なら必ず習う「解析学」について、学部 1 回生の頃の自分に教えたかったことを話しました。学部 1 回生の頃の自分は、「イプシロン・エヌ論法」や「論理式」が特に「ワケワカラン」でしたので、その辺に焦点を当てて講義したつもりです。今回の講義で「イプシロン・エヌ論法」や「論理式」が少しでも理解できたと思ってもらえたなら幸いです。

しかし、「60 分の講義中に本来話したかった数学の面白さなどが全然話せなかったな」と後になって思いました。これは自分の力不足によるものだと思います。そのため、もし今回の講義で数学に興味を持ってもらえたなら、講義中に気になったところなどをいろいろと調べてみて欲しいです。そうすると数学がもっと興味深いものになると思います。最後になりましたが、講義を聞いてくださった皆さまありがとうございました。

**2 回目に向けて・その他：**講義中に質問が飛んできてくると前提に内容を少し減らしておく・講義中に強弱をつける（興奮ポイントできちんと興奮する？）。



## ◆院生質疑と回答

①数学は答えが決まっている学問であるように思うが、  
「答えが一致していない」という話はどういうことか？

（質問意図：「数学」というものに対する自分の持っていた固定観念をもう一度振り払いたいという思いと、恐らく多くの数学に馴染みのない人々が抱いているであろうこの問いに対する答えは多くの人にとって有益であると考えたため）

⇒回答：厳密にはそうかもしれないが、数学は数式を作って解いたら終わりということではなく、いろいろなアプローチで解析を行っていくという側面もある。今日の授業でも、「無限」というテーマについて高校数学以上のアプローチのいくつかを提示したというかたち。

## ◆アシスタントコメント

数学の授業はやはり難しい。昨年度の解析学の授業も、途中まで頑張ってついていこうとしたが、振り落とされてしまった。今回も例にもれず、途中で訳が分からなくなってしまった。しかし、今まで高校レベルの数学で扱いきれなかったことが、大学院レベルの数学のツールを使うとアプローチが可能になるという発想は新鮮であったし、それは多くの学問（例えば政治学）でも同じであるように感じた。

杉谷（政治学）

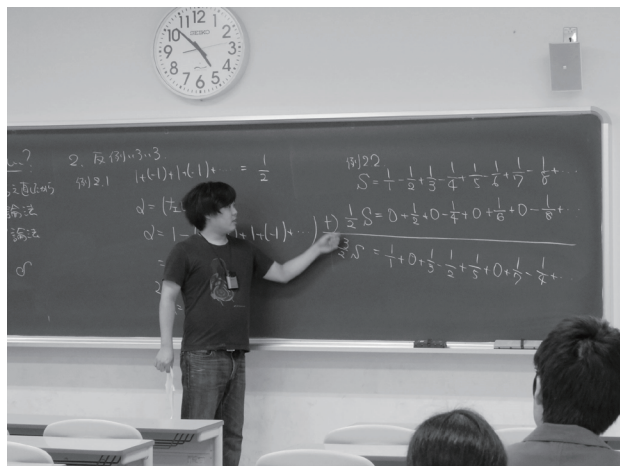
## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 首かけマイクを使った板書の講義はとてもやりやすかった。
- ・ 全体的にできるだけわかりやすく説明しようとしているのが伝わった。
- ・ 板書の使い方が良かった。
- ・ 講義の構成・流れが良かった。
- ・ 高校と大学で習う数学の違いを説明していた。
- ・ 図式化や受講者の聞く姿勢の設定をしていた。

### 【改善すべき点】

- ・ 少し講義内容を欲張りすぎないように気をつける。
- ・ 数学の面白さが伝えらるよう工夫する。
- ・ 授業中眠くなるという場合は受講者に書かせるという対策をとる。
- ・ レジュメの文字（記号）づかいをそろえる。
- ・ レジュメの例のバランスを考える。
- ・ レジュメに書き込む空白欄を作る。
- ・ もう少し基礎的な説明をしっかり入れる。
- ・ 細かい用語の説明を忘れないようにする。
- ・ 英語の表現の補足を入れる。
- ・ 強調する用語の説明を繰り返す。
- ・ 受講者に目を向けて話す。
- ・ 途中から難易度が上がらないように気をつける。



# フィールドの風景・探究の現場

2018 年 6 月 7 日実施 / 担当：福田真郷（文化人類学）・山守瑠奈（海洋生物自然史学）  
・村上絢一（歴史学：司会） / 特別回（異分野ディスカッション）

## 講義紹介

大学の研究者といえば、研究室や実験室で一日中過ごしている、といったイメージはないでしょうか。しかし、現在の京都大学総長・山極寿一氏がアフリカでゴリラを追いかけたように、大学の敷地を遠く離れてフィールドに向かう研究者もたくさんいます。この「総人のミカタ」にも、そんなフィールドで活躍する院生がいます。今回のディスカッションでは、文化人類学の福田さんと海洋生物自然史学の山守さんのお二人にご登壇いただき、フィールドワークの実際と、その方法についてお話をうかがいます。フィールドの選定、道具、宿泊先や食べ物など、現地で体験する諸相から、調査と文献・テキストとの関係まで、興味深い論点ばかりです。主に国内で撮影された多くの写真をもとに、お二人が目にする風景をのぞいてみましょう。当日は多数のご参加をお待ちしております。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**物理的に大学を飛び出して、自然や動物、大学人でない一般の人々と交流するなかで学問をすることの魅力と苦勞を伝える。

**講義の進め方：**【～5分】主旨説明。【～40分】講義の振り返りとフィールドワークの実際。登壇者相互の質問。【～90分】フロアとの質疑応答。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想（福田）：**海洋生物自然史学という他分野のフィールドワークについていろいろな話を聞くことができ、非常に良い機会だった。自分はフィールド経験が少ないので自身の体験をあまり多く話せなかったが、山守さんの話は共通点などもあり非常に興味深く聞いた。フィールドワークの実際の苦勞や風景の写真の紹介をしたが、自分の話を振り返ると、あまり楽しさややりがい、成果などについては伝えることができていないように見え、興味を持ってもらえたかどうかという点に怪しい。お話したように、フィールドワークは確かに苦しい部分もあるが、もちろん楽しいこともある。前提として、

楽しそうと思うことについて研究を始めることが大事だと思う。楽しい瞬間を追い求めることは、何事においても大切にしてほしい。

**コメント・感想（山守）：**福田さんとのディスカッションを通して、文系フィールドワーカーの方の興味深いお話を聞けました。「天候」に左右される自然系フィールドワークに対する、「人」に左右される文系フィールドワーク。人との交渉や駆け引きは本当に難しそうだと思いますが、その大変な実地調査のお話を熱を込めて語る福田さんは楽しそうで、フィールドワークに対する熱意を感じました。文理それぞれの、一見縁遠いフィールドワークにも、たくさんの共通点がある。現地に行き、その人たちの暮らしに溶け込む。海に行き、海洋生物と同じ潮の満ち引きのリズムで行動する。ちょっと無理やりでしょうか。「あの土地が好き」「あの人たちの生活が気になる」「海が綺麗」「あの生き物の形の意味は？」気になるから、好きだから、その土地に飛び込む。机上に本とペンを投げだして（フィールドノートはしっかり持って）現地に飛びこんだ探求者の考え方は、意外と似ているのかもしれないと思いました。

**コメント・感想（村上）：**この「総人のミカタ」を含め、学部段階では座学で過ごす時間が比較的多いように思います。そこで学部生の皆さまには、フィールドワークを含むさまざまな「探究の現場」があることを知っていただければ、きっと学問そのもののイメージもより豊かなものになるだろう、そう考えて本日の主旨としました。登壇者のお二人がどのような現場で思考し行動しているのか、具体的に分かる回になったと思います。とりわけフィールドワークを遂行するまでの準備や苦勞のお話には、学問的な新知見を獲得するまでの「一筋縄では行かなさ」が示されており、当事者としての矜持すら感じられました。まずは一步、現場に飛び出してみるとそこには講義室では得がたい豊かな体験がある。そのような体験に下支えされたお二人の学風がうかがえたように思います。登壇されたお二人と板書を担当された三升さんに感謝致します。



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 今まで参加していなかった人も見受けられた。
- ・ ディスカッションとしては盛り上がった。
- ・ 1回生から質問が出た。
- ・ サンプルや資料をいかにして論文にまとめるか、という論点で全体の議論を回収できた。
- ・ フロアからの質疑の時間を十分に確保できていた。
- ・ 研究の雰囲気を伝えることができた。

### 【改善すべき点】

- ・ 最初の自己紹介を充実させるべき。
- ・ 一問一答形式に陥っており、登壇者同士の議論が深められても良かった。
- ・ 「インフォーマント」など専門用語が断りなく用いられる。
- ・ 司会が登壇者の発言をフォローするなど工夫が必要である。
- ・ 議論の「落としどころ」はあらかじめ登壇者と司会で打ち合わせをした方が良い。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ 内容がとても踏み込んでいて面白かったです。
- ・ フィールドワークの話がもっと聞きたくなりました。
- ・ 整理された進捗で理解しやすかった。
- ・ フィールドワーカーのリアルな声がわかってとても面白かったです。厳しい現状もあるのだなと思いました。



# フラクタルと呼ばれる図形

2018 年 6 月 14 日実施 / 担当：伊縫寛治（解析学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

この講義ではフラクタルと呼ばれる図形についてお話ししたいと思います。そもそもフラクタルという言葉は 30 ～ 40 年前に誕生した言葉で、厳密な言葉の定義はありません。しかしフラクタル図形は徐々に重要性が認識され始め、今でも研究されている対象です。数学的な立場においても、やはり重要性が認識されてきています。

今回はフラクタルの数学的なモデルとして有名な Sierpinski gasket（シェルピンスキーのガスケット）を例に数学的な性質を調べます。そして時間があれば、なぜをそのような性質持つのかを説明をしようと思います。より具体的には次の 4 ステップに分けてでお話をしようと思っています。

- ①マンデルブローによるフラクタルの提唱
- ② Sierpinski gasket（シェルピンスキーのガスケット）について
- ③面積が 0 の計算と長さが  $\infty$  の計算
- ④その結果が得られる説明

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**フラクタルの重要性がどのような経緯で認識され始めたのかを知ってもらう。

**講義の進め方：**【～ 15 分】フラクタル幾何学（マンデルブロ）を引用し、なぜフラクタルという図形を考える必要があったかを説明する。【～ 30 分】Sierpinski gasket の定義（どんな図形か）を説明する。必要であれば図を見せる。【～ 45 分】面積と長さや体積を計算する（四角形）。面積と長さを計算する（シェルピンスキーのガスケット）。（必要であれば、等比数列の和の公式の証明がついたプリントを説明する）【～ 60 分】四角形や立方体の相似次元について（説明という扱い）説明し計算する。シェルピンスキーのガスケットの相似次元について（説明という扱い）説明し計算する。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**まず講義をやってみて、前回よりも聴講者が増えていて良かったです。また授業の最後にも、いろいろな質問が来たりフリートークが盛んになってい

て良かったです。

今回は自分の専門分野である「フラクタル」について話しました。この専門分野は一つ一つ細かく説明しようと思うとかなり煩雑になるため、図やイメージを中心用いた授業を構成して 60 分でボンヤリとでも分かってもらえるように話しました。ただ、イメージや説明を簡略化したために、かえってややこしいところがあったかなと思います。自分の力不足のため、このようになってしまい申し訳ありません。

ところで今回授業をしていて、「仮定していること（前提としていること）」が多いなと自分が感じました。つまり「そのまま聞いていると納得できるが、掘り下げてみると（必ずしも正しいとは限らない）気になるところがある」ということです。もし今回の授業を聞いて、気になること（もやもやすること）があればいろいろと調べてほしいです（前回と同じことを言っていますが……）。そして、「なるほど！」と納得してもらい、フラクタルが面白いものと思っていただけたら幸いです。最後になりましたが、講義を聞いてくださった皆さまありがとうございました。

**1 回目以降の改善点と手応え・その他：**学部 1 回生にも親しみやすいテキストを作ろうと思った。授業の前半はそれがうまくいったと思う。しかし後半に入って数学的な内容になるほどうまくいかなかったと思う。



## ◆院生質疑と回答

①論文の文体は？（質問意図：歴史学の論文を執筆している中で高校数学の証明と論理の組み立て方がよく似ていると思ったから）

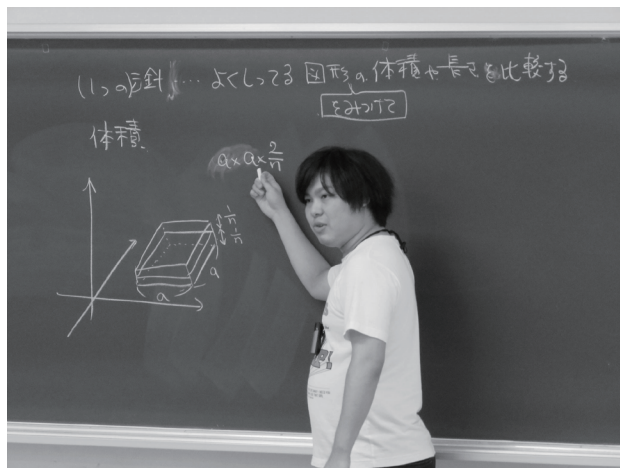
⇒回答：ある議論を前提に論理を展開する。まったく独自の論理を構築するものもある。

②数学者がふれる「神秘」とは？（質問意図：対象に魅了される瞬間を聞きたかったから。また、数学の素人である私にはフラクタルの話が自然界に隠された秩序を見つける学問に思われたから）

⇒回答：大学入学以来フラクタルが面白いと思い、研究を続けてきた。

## ◆アシスタントコメント

対数のたの字も忘れた文系院生の私にも面白く聞かせていただきました。フラクタルを提唱したベノワ・マンデルブロから丁寧に学説を説明されたこと、受講者みずから図形を描き「手を動かす」講義にされたこと、レジュメを読み上げず受講者との対話の中でお話されたこと、などが今回の講義が成功した理由として挙げられます。大学1・2回生にも程良い質と量の内容でした。ところで、吉田南構内では「フラクタル日よけ」「シェルピンスキーの森」が知られますが、思わぬ形で応用されるフラクタルにはまだまだ議論を展開する余地がありそうです。総人のミカタとしても異分野との接点になる論題としてまたお話をうかがいたいと思います。村上(歴史学)



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・授業の始めの掴みは、板書計画どおりうまくいっていた。
- ・難易度も配慮されていた。
- ・声の大きさ・読み上げで終わらせていない授業だった。
- ・字が綺麗だった。

### 【改善すべき点】

- ・授業のオチをうまくまとめる。
- ・伊縫さんであれば、非数学者と数学者の両方が、自然と講義へのモチベーションが持てるように、講義の流れや構成を工夫できたと思う。
- ・講義中の何気なく使った専門用語などの言葉をきちんと説明する。
- ・視覚的な説明を入れるなどのレジュメの構成を工夫する。
- ・相手の理解度に合わせながら、（必要に応じて）繰り返し説明する。
- ・説明を簡略化したり受講者の知識量をはかるために、受講者に話をふったり質問を投げかける。
- ・黒板の色使いに気をつける。
- ・数学的な不思議・面白さと一般的な現象を説明できる不思議さ・面白さの両方が分かるように講義を構成する。



# 文学のミカタ②——「文学」の役割とその未来を考える

2018 年 6 月 21 日実施 / 担当：山根直子（日本近代文学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

そもそも「文学」って何の役に立つの？ このような問いを聞いたこと、あるいは、自分でも抱いたことはありませんか？

文学はいわゆる役に立たない学問と見做されがちです。最近では、国立大学における文系学部廃止がまことしやかに囁かれ、文学部は縮小の傾向にあります。

けれど、本当に「文学」は役に立たないものなのでしょうか？ 役に立たないとすれば、なぜ私たちは「物語」を作り、読むのでしょうか？ 「文学」を研究する意味は一体どこにあるのでしょうか？

今回は、「文学」の役割とはなにか、なぜ私たちは「物語」を欲するのか、文学研究をするとはどういうことなのかを、作家や批評家・研究者たちの言説を参考に、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

語』の役割」とした方が相応しかったかもしれない。

「文学」の役割は、「物語」としての役割の他にも多々あるだろう。「文学」の何に重きを置き、抽出するかは研究者によって千差万別である。その中で、アカデミックな世界だけでなく、一般社会にも通用するものを、いかに打ち出せていけるか。それが、今後の文学研究者に必要とされていることなのではないかと、受講生との話を通して感じた。

一般社会における「文学」は「役に立たない」という言説に対抗するには、「文学」を専門としない人々に語りかける能力が必要とされる。これは、専門分野に閉じこもっていても得がたいものであり、異分野（他者）が交錯する総人や人環のような環境でこそ、培えるものかもしれない。また、「文学」は学際的な要素を持つものであり、総人・人環のように異分野が交錯する場合は、「文学」を研究するには非常に適した環境であると、異分野の院生との議論を通して再確認できた。

1 回目以降の改善点と手応え・その他：読みやすさを考慮して PPT ではなく、レジュメに変更した。また、専門用語には注釈を加え、難しい語彙は極力使用しないようにした。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**「文学」の役割、「物語」の必要性、文学研究の必要性を考える。

**講義の進め方：**【～15 分】文化庁の国民の読書に関する調査を参考に、読書人口の減少を確認し、その理由を考える。【～30 分】日本文学の成立過程を確認し、文学がなぜ生まれたかを考える。【～45 分】「大きな物語」が失われたとされる現代のポストモダン的な状況を確認する。【～60 分】作家や臨床心理学者の言説を参照に、「文学」の役割、「物語」の必要性を検討する。講義は全てレジュメを用いて行う。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**昨今、「文学」は「役に立たない」という言説が広く流布されている。そこで、本講義では「文学」がなぜ誕生し、どのように利用されてきたのかを見ていくこと、さらに、作家や分析心理学者の言説を参照し、「文学」の役割を示せれば、と考えた。

しかし、今回は「文学」というより、「物語」の役割の一端を示す形となった。講義担当者の関心が主に「物語」に向けられているため、そうなった。タイトルは『物



## ◆院生質疑と回答

①物語がもつアイデンティティの安定化の機能を重視するのであれば、物語の一般性が分析対象になりやすいのだが、むしろ文学は物語の特殊性に注目しているように感じる。実際のところ、どうか？（質問意図：社会学が一般的平均的な、ありふれた物語から時代的なトレンドを抽出するのに対し、文学はむしろそこからの偏差を重視しているように感じたため、実際の文学研究者がどう考えているのか知りたかった）

⇒回答：一見すると物語の特殊性に注目しているように思われるかもしれないが、そこから、人間に普遍的に共通するものを抽出しようとしているので、特殊性にこだわっているわけではない。

②物語の重要性はわかったが、物語と文体などとの関係はどうとらえているのか？（質問意図：メディウムスペシフィックな特性を文学者がどこに見出しているのか知りたかった。その端的な例のつもりで文体との関係を挙げた）

⇒回答：文体に注目するのはむしろ言語学者で、文学者はそこまで文体に注目しないことも多い。

## ◆アシスタントコメント

前回同様、半期 15 コマかけて構成しても良いだけの大きなテーマを扱った内容で、情報量の多い充実した講義だった。それだけに、全体的にやや慌ただしく進めてしまったのはもったいなく感じた。もう少し論点を絞って、その部分に重点をおいた講義にするのも一案だと思う。とはいえ、講義者の問題関心が色濃く反映され、また、それが話し方からも十分に伝わる熱量のある講義になっていた。この点においては、成功した講義だったと思う。もう少し時間をかけて、さらに詳しく話を聞いてみたいと思った受講生も多かったのではないだろうか。

院生質疑は、担当者の専門分野や問題関心から、やや紋切り型の質問となってしまった。それ自体は一長一短だと思うが、ひょっとしたら、回答を含めて、既視感をもった受講生もいたのではないか。今から振り返って、同様の内容を聞くにしても、もっと講義者の視点を引き出せるように、尋ね方を工夫できたら良かったというのが、個人的な反省点である。

真鍋（社会学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ レジュメ形式にした点。
- ・ レジュメを学生に読み上げさせた点。
- ・ 受講生が読みに躓いたときにフォローした点。
- ・ 最後の話は熱がこもっていて思いが伝わった。
- ・ 考えさせられる内容で良かった。
- ・ 量は多いと感じたが、内容が整理されていてわかりやすかった。
- ・ 導入を世論調査から入るのは良かった。議論ができる内容で、興味深いと思った。
- ・ 話の流れはわかりやすかった。聞いていて納得できることが多かった。

### 【改善すべき点】

- ・ 資料の読み上げになりすぎるとよくない。
- ・ 講義の進行が駆け足になってしまった。
- ・ アドリブ的にしゃべるような努力ができた方が良い。
- ・ 本が読まれないことと文学の役割のあいだにはギャップがある。
- ・ 教員の話に自分から想像してコミットしていくのは大学 1 年生だと難しい。
- ・ 本、文学、物語、読書、の定義を与えた方が良い。
- ・ 全体的に物語という主題は共通しているので、もっと差異を強調できた方が良かった。
- ・ 単に読み上げてもらうだけでなく、もっと解説を入れた方が良い。
- ・ 文学の役割といいつつ、結論は物語の役割になっている。
- ・ 読み上げはマイクをもって回った方が良かった。
- ・ 「誰にとっての」という視点が欠けていた。文学が大事だと共有していない人にとって、どうなのかという視点をもっと意識できた方が良かった。
- ・ 話が大きいので、重要な要素を取り出して、丁寧に講義した方が良い。

# どこからが観光？ どこまでが移動？：観光学入門

2018 年 6 月 28 日実施 / 担当：谷川嘉浩（哲学・観光学） / 通常回（1 回のみ）

## 講義紹介

最近観光しましたか？——この問いに、「イエス」、つまり、「最近観光した」と思ったなら、どこに行ったのでしょうか。この講義では、こうした素朴な観察から始めることにします。

「観光」は私たちの生活の中に、ありふれた形で確認することができます。フェイスブックが観光先のログと化している友人があなたにもいるでしょう。けれど、観光学において、まともに「観光」を定義しようとしている人はいないに等しいのです。定義しているように見えても、本論に生きてこない定義を序論で申し訳程度にやっているだけというのが実情です。

この講義では、「観光」ということで、私たち（＝当日教室にいる人たち）はどういうことを想定しているのかを考えてみましょう。また、当日は、観光学（Tourism Studies）という複数形に込められた意味合いをシリアスに受け取ることで、まともに必要十分な観光の定義を考えるのではない仕方、「観光」を考え、「観光学」をイメージしてみることにします。

嫌いというわけでもないけれど、基本的には家にいたいし、ずば抜けて観光するのが好きではないという方もいるかもしれません。というか、私がそうです。そんな人間が、観光学のどこを面白いと思ったのかという点まで話せるといいなと思います。

学会成立を追い、その系譜を描く。【～60分】時間が足りなければ、前の話の続き。最後に、自分が観光学と出会った経緯、観光学を面白いと思わせたジョン・アーリの『観光のまなざし』について紹介する。以上はスライドを用いる。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**観光学という分野があることに驚いた方も多かったようでした。普段来ない参加者が来てくれたことも嬉しかったです。

他の講義は2回分ある中で、1回ですべてを賄おうとした結果、やや詰め込み気味になったかもしれません。申し訳なく思う一方で、「入門」的な位置づけである限り、観光学という分野の概観と、自分独自の研究・視点の両方に言及することは避けられないことでした。今後の授業編成に宿題として残したいと思います。

感想を聞いていると、学問分野（Discipline）でない、観光学という学際的な分野（Studies）の特性にかかわるものが多くありました。

「観光学の理念的な学際性と、実態との乖離を意識しながら、冷笑的にならずに、自分はどう研究していくのか」という私個人の関心を、総合人間学部、人間・環境学研究科という「学際」を理念に掲げる環境において、実態を意識しつつどう振舞うのかという個々人の問題につながってもらえたような気がしています。

翻って、観光学の中の私だけでなく、研究科の中の私について、改めて見つめる機会になりました。ありがとうございました。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**観光の必要十分な定義の不可能性。「観光」は、どんな視座から見るとかに応じて内実を変えるフレーム／プリズムであるということ。その視座の一覧に代わるものとして、観光学内のさまざまな分野があること。

**講義の進め方：**【～15分】観光の経験についてフロアに聞き、観光概念を自明に使っているということを確認する。微妙な事例をいくつかスライドに表示し、何が観光に該当するか、フロアに聞く。【～30分】観光を定義する既存の説明を紹介し、現在の観光学は読者の共通理解を前提に議論を進めていることを示す。【～45分】歴史的な説明を加えたあとで、現代の観光学にあたるものを形作る分野を紹介する。余裕があれば、英語圏での





## ◆院生質疑と回答

①**観光の誕生はいつか？**（質問意図：宗教的な目的を帯びた特に前近代社会の「巡礼」と今日私たちが経験する「観光」との関係、歴史的な側面から問おうとしたから）

⇒**回答**：19世紀におけるマス・ツーリズムの成立が一つの画期となった。特定の国家の国民に主体が限定された「観光」からの脱却はそれより時代が下る。

②**観光学はどこまでできる？**（質問意図：観光学を総合人間学部で学ぶにはどうすれば良いのか提示して欲しかったから）

⇒**回答**：その気になればどこでもできる。ただし指導教員に観光学への関心があるかは別。

## ◆アシスタントコメント

今回の講義では観光学という学際的な学問領域に対し、哲学の立場から検討が加えられました。観光学の研究史、観光現象の氾濫、日常性との関係、等々の検討素材を経由して、なお執拗に「観光」を〈定義すること〉にこだわった点に今回の講義者の立場がうかがえます。「観光学者は、観光の定義を（実質的に）諦めている」という現状から逃げることなく、真摯に向きあった中で生み出された貴重な成果だったと思います。これはあらゆる学際研究が抱える課題への一つの回答とも言えるでしょう。

さて今回は「観光の誕生はいつか」という質問を用意しました。わが国では熊野古道や観音霊場といった中世以来の「巡礼」地が知られています。時代が下って近世（江戸時代）ではいわゆるお伊勢参りが有名ですが、こちらは「巡礼」の性格とともに「観光」の性格も見いだせるようです。こうしてみたとき、宗教的な意味を帯びた土地への移動や「旅」というものが、「観光」とどのような関係にあるのか、歴史的な視点からも検討することで、また次の問いに進めるように思います。 村上（歴史学）



## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・観光学の現状批判をしながら、シニックになり過ぎない程度という力加減が良かった。
- ・到達目標を示した点。
- ・アニメの例など、自身の関心を例示した点。
- ・抽象的な考えを観光に当てはめていくという谷川さんのスタイルが出ていて良い。
- ・Studies と Discipline の問題なので、総人らしい問題につながっていた点。

### 【改善すべき点】

- ・パソコンが何度かフリーズした。
- ・せっかく体験談を集めたのだから、もっと使っても良かった。
- ・マイクを持ったまま笑うのが気になる人がいるかも（笑うときは離す）。
- ・観光の定義を広げていくと、異化作用と何が違うのかという問題になる。観光の独自性をどう扱うのか、観光学という Discipline の扱いがどうなるのかという疑問につながる。
- ・観光をやっている人が自分の Discipline に依拠しているというまとめが、これに批判的なのかどうかかわらなかった。
- ・定義をアップデートしていったが、どこが変わったのかももっと強調できたら良い。
- ・観光は旅と一緒に論じた方が良い。
- ・差異を経験することとは、どういうことなのか。例えば、ストリートビューの場合は？ 観光は、具体的な身体経験や移動がやはり必要に思う。
- ・用意した資料を使わなかった。
- ・講義が1回だけだと新興ジャンルは同じパターンになりそう。2回あることで、バリエーションが増える。ミカタの講義が2回あることの意義はこの点にある。

# 海洋生物の自然史——生物の多様性とさまざまな共生系 2

2018 年 7 月 5 日実施 / 担当：山守瑠奈（海洋生物自然史学） / 通常回（2 回目）

## 講義紹介

異なる種類の生物が相手を利用し、または互いに助け合って生きて行く系、共生系。共生系は海洋環境を複雑化し、生物相を豊かにしてきました。この講義ではさまざまな海洋生物の間の共生系が生物多様性に、そして生態系にどのような影響を与えてきたかを見ます。そして、人の活動が生態系に与えていく影響を、共生系の視点から考えていきます。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**海洋生物の共生系について理解し、環境問題について共生の視点から考える。

**講義の進め方：**【～15分】1 回目の復習。動物門、共生。【～30分】共生系がどのように種分化に寄与してきたか。【～45分】日本の豊かな海洋環境における共生系。【～60分】生態系への人の介入が生物多様性にどのように響いていくか。

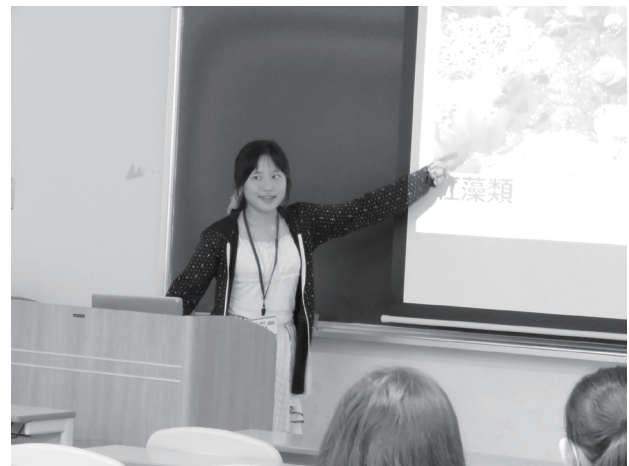
## ◆講義を終えて

**コメント・感想：**前回は「生物の多様性を形作る共生系」についてお話させていただきましたが、今回は、「共生系を支える多様な環境」を取り上げました。全海洋面積のほんの 0.2% しかないのに、40% もの海洋生物を擁するサンゴ礁。そこには、大きな生物の体表や巣穴に小さな生物が住み込み、その住み込み共生者にさらに別の共生者が居着く、という「住み込み連鎖」によって形作られた膨大な多様性が見られます。その住み込み連鎖はサンゴ礁だけでなく、磯や干潟といった多様な環境で巣穴形成者を起点として展開され、それぞれの環境で固有の生態系を生み出してきました。

ですが、人の短い歴史の中で、日本の尊い海岸線は次々と開発の手がかかり、多様な生物を育む豊かな海岸環境は単調なコンクリートの塊へと姿を変えていきました。そして、今もなお、各地で海岸は改変され、沿岸生物たちは絶滅やその危機に追い込まれています。

このまま開発を続けて、本当に良いのか。本当に守るべきものは、何か。将来生物に関わる人もそうでない人も、自然環境について深く考えていただけたらと思います。

1 回目以降の改善点と手応え・その他：羅列的になってしまうお話に、ストーリー性を持たせるよう手を加えました。結果、完全に並列つなぎにはならなかったとは思いますが、もっと起伏に富んだストーリー展開にできるなど、工夫の足りなさを感じました。



## ◆院生質疑と回答

①個別具体的な話題が多かったが、一般論のような研究はあるのか？（質問意図：講義の内容を聞いて疑問に思ったので）

⇒回答：ある程度の傾向について言及した研究はある。また、具体的な種の研究から、進化の過程に関する情報が得られたりする。

②生物多様性はなぜ重要なのか？（質問意図：それが重要だということは常識だが、その理由を聞くことはそれほど多くないため尋ねてみた）

⇒回答：多様性が重要である一つの理由は、例えば医薬品として使える物質が得られる可能性があるといった意味での有用性があることである。

## ◆アシスタントコメント

今回の大きなテーマであった生物多様性という概念は、聞いたことこそあるが具体的にどのようなものなのか、またなぜ重要なのかについて改めて考える機会は多くないため、意義深かったと思われます。全体的に良質な講義であり、学生の反応もよく成功していました。生物という題材は誰にでも興味を持ってもらいやすいものですが、それに頼ることなく、その見せ方や会場とのやり取りも工夫されていたと思います。検討会でも意見が出ていましたが、政治的な話題に触れる場面でもこの程度ならまず問題にならず、むしろ講師自身の見解を聞くことは受講者にとって興味深いはずです。基本的に講義は今のやり方でうまく行くはずなので、あまり迷わずにその持ち味を活かせれば良いと思います。

須田（解析学）

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 前回の復習や補足から入るのは良かった。
- ・ 素材が豊富だし、トークや冗談の盛り込み方も良かった。
- ・ 導入として最近の話を入れるのは良い。
- ・ 文字と図のバランスが良い。
- ・ 実物も回ってきたというのものがしめて良かった。

### 【改善すべき点】

- ・ 環境問題の話し方が、中途半端になってしまった点。
- ・ 講義全体を通して何を伝えようとしたのか、というテーマがわかりにくい。
- ・ 暗い話題が入るから、というので、軸がぶれた感じもした。
- ・ 生物の名前いうときにごにょごにょ感がある。
- ・ マイク使っても良いような気がした。
- ・ 最後にまとめがあっても良い。
- ・ 一回、途中で節目があっても良い。
- ・ エンターテインメントとして完結していて面白いし、良いと思うが、講義として考えさせられるかということ、そういう感じではなかった。もっと悩みみたいなのを前に出しても良かったのでは？
- ・ ハンドアウトなども用意しても良かった。
- ・ 自然史／誌の区別をせっかく紹介したから、講義の内容や山守さんの研究がどちらよりなのかも説明してほしかった。
- ・ 15分余ったので、どうするか？ 小まとめのスライドや、目次を途中で出して次のセクションではどんな話題をやっているかという説明をしても良かった。



# 文理の双極："似"で"非"？ "非"で"似"？

2018 年 7 月 12 日実施 ／ 担当：伊縫寛治（解析学）・山根直子（日本近代文学）  
・萩原広道（発達科学） ／ 特別回（異分野ディスカッション）

## 講義紹介

文理選択——。大学までの学びの過程で、ほとんどの人が一度はこの選択に迫られたことでしょう。文系・理系のそれぞれのイメージは広く共有されており、それらは互いに大きく隔たったもののようによびまわられています。しかし、学問の地平において、文理の極はそんなに離れた位置にあるのでしょうか。そんな疑問を胸に、今回のディスカッションでは、まさに文系・理系の代表格ともいえる「文学」と「数学」をさまざまな切り口から見比べてみたいと思います。日本近代文学の山根さん、解析学の伊縫さんのお二人にご登壇いただき、研究の方法論から鑑賞者・研究者としての態度に至るまで、相違点や共通点を浮き彫りにしていくことに挑戦します。果たして、文理の双極はどのような点で接点をもちうるのでしょうか。議論の行方が楽しみです。

## ◆講義の目標・内容について

**講義の目標：**素朴に感じている「文系・理系」という分類の差異や共通点を整理する。一見すると遠い位置にあるように思われる分野間にも接点があることを知る。

**講義の進め方：**【～5分】イントロ。【～15分】研究者の生態。研究者になろうと思ったきっかけ。【～45分】論点① 消費者から研究者へ。論点② 研究のスタンス：一義が多義か。論点③ 理論と実証：「哲学—文学」と「数学—物理」の類比関係。【～75分】フロアとのディスカッション。まずは院生に開く。その後、学部生にも。【～90分】アウトロ。視点①高校の学びと大学の学び：国語教育と数学教育。視点②役に立つ／立たない問題：文学研究・数学の社会的意義。視点③結局のところの研究目的は？：学問分野として、一研究者として。

## ◆講義を終えて

**コメント・感想（山根）：**数学と文学。まさに文理の極である両分野を専門とする二人のディスカッション。この企画を聞いたときには、はたして成立しうるのか不安に思いましたが、実際に行ってみると、似ているところが複数あり、驚きました。私は根っからの文系で、数学

をひたすら避けて生きて来たのですが、今回のディスカッションで、数学も面白いかもしれないと、はじめて思いました。私が苦手としていたのは、数学ではなく、数学教育であったのかもしれませんが。何を面白く思うかは個人差がありますが、それでも学問は万人にとって面白くあるべきなのかもしれませんね。そして、その面白さを伝えるのも、研究者の大切な務めの一つなのではないでしょうか。研究者として、自分の専門分野の面白さを人々に伝えられるようになりたいと、思いを新たにしました。

**コメント・感想（伊縫）：**ディスカッションに来てくださった皆さまありがとうございました。文学を研究している人とディスカッションをするということが今まで無かったのでとても新鮮でした。個人的に、文学研究者の書く論文と数学研究者の書く論文の比較したとき、文学研究者の書く論文は私が思っていた論文とかなり違って、それがとても印象に残っています（縦書きに書く、基本的には単著、論文が日本語、など）。もう少し話したいと思うようなことがいくつかありましたが、時間の関係で話せなかったのが残念です。もしもう少し話し合うことが出来たら、文学と数学の相違点や類似点が浮き彫りになっていたのではないかと思います。また機会があれば、今回のようなディスカッションが出来たらと思います。

**コメント・感想（萩原）：**文学と数学という一見するとまったく異なる学問分野にも、相似した特徴があることが浮き彫りになったのではないのでしょうか。実際の研究の営みや、雑誌掲載された論文を見聞きしながら登壇者にお話しいただいたので、一定のリアリティもあったように思います。ただし、話が平行線のまま進行しがちで、登壇者同士で交錯するような議論がほとんどなかった点は大きな反省点といえるでしょう。文学研究 VS. 数学研究、とまでは言わないまでも、もう少しバチバチとやりあうような場面があっても良かったのかもしれませんが。それはともかくとして、2018 年度前期の「総人のミカタ」は今回で終了です。懇親会で、ある受講生が「ここに来ると『総合人間しているなあ！』って感じがする」と仰っていました。とても励みになります。現状に甘んじることなく、もっともっと総人ならではの「場」として機能するよう、スタッフ一同がんばっていききたいと思います。

## 検討会でのコメント（一部）

### 【良かった点】

- ・ 司会のフォローが上手だった。
- ・ 板書が整理されていた。
- ・ 「査読」など研究者にとっては当たり前だが初学者には難解なキーワードを補足できていた。
- ・ 打ち合わせの通り着地点が明確でおさまりのある議論となった。

### 【改善すべき点】

- ・ 二人の議論に深まりがみられなかった。
- ・ 見本の論文を回覧するタイミングは休憩時間でも良かったのではないか。配布するなら同じ内容にした方が良い。活用の仕方にはまだ工夫の余地がある。
- ・ 登壇者の話す姿勢がフロアに向いていなかった。
- ・ 「それってどういうことですか？」という質問が出ない分が、臨場感の少なさに繋がっていたのではないか。
- ・ 打ち合わせを丁寧にした分共通理解ができすぎてしまい、臨場感・緊張感に欠いた。

### 【学部生からの質問・アンケート自由記述など】

- ・ 話題が展開していくのが面白かったです。
- ・ （文学）知らない用語が多かった。
- ・ （文学）具体例に冗長なものが多いかなあ。



◆「総人合宿アンケート」にもとづく分属希望

2017 年度から、総合人間学部新入生歓迎合宿に「総人のミカタ」メンバー（有志）も参加している。このときに実施したアンケート調査から、新入生の分属希望（合宿実施時点＝各年 4 月）の結果を図 1 および図 2 に示す。

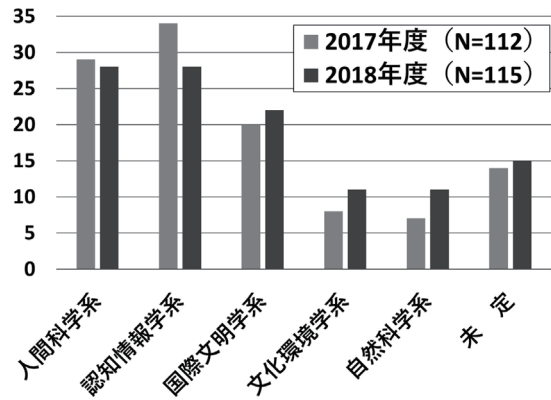


図 1 分属希望（主専攻、第一希望）

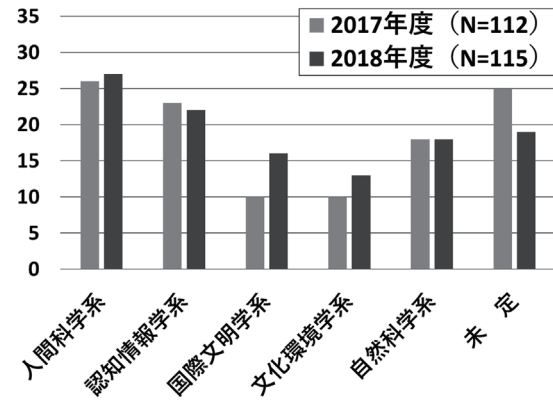


図 2 分属希望（副専攻、第一希望）

◆「総人のミカタ」受講者の推移

半期ごとの受講者の推移（平均値）を図 3 に示す。単位認定のない正課外活動であるにもかかわらず、3 期で平均 9.4 名、延べ 365 名が受講した。なお、受講者に院生聴講者は含まれていない。

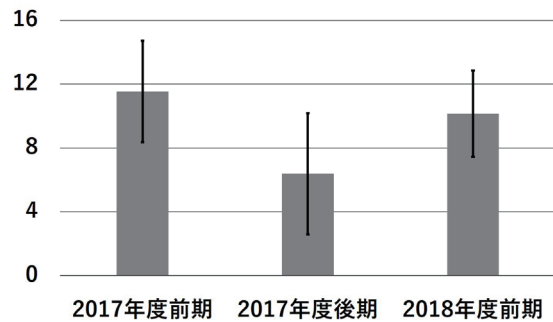


図 3 受講者数の平均値（エラーバーは標準偏差）

◆「受講者向けアンケート」の結果（一部）

「総人のミカタ」の通常回（＝初回、異分野ディスカッションを除く）における受講者アンケートの集計結果（一部）を表 1 に示す。なお、アンケートの回収率は 2017 年度前期で 84%、2017 年度後期で 66%、2018 年度前期で 83% であった（質問項目によって回答数は前後する）。アンケートは 7 件法で実施し、7 が「当てはまる」、1 が「当てはまらない」とした。なお、アンケートの詳細および他の質問項目については、118 頁を参照のこと。

表 1 受講者向けアンケートの結果（一部）

質 問	2017 年度前期			2017 年度後期			2018 年度前期		
	平均	標準偏差	回答数	平均	標準偏差	回答数	平均	標準偏差	回答数
講義を受講する前に、この専門分野に興味がありましたか	4.9	1.7	94	5.2	1.5	35	5.4	7.1	78
今日の講義はおもしろかったですか	5.9	1.1	94	6.0	0.9	35	6.0	1.1	78
今日の講義を受けて、この専門分野に興味がわきましたか	5.5	1.4	93	5.5	1.1	34	5.4	1.1	78
今日の講義は、ほかの一般教養科目と比較しておもしろかったですか	5.6	1.3	89	5.8	1.1	35	-	-	-



## 第3部 特別企画

# 【卒業生企画】総人の卒業生の話を聞いてみよう！

2017年12月6日実施 / 人間・環境学研究科棟 333 演習室

## 概要

「総人のミカタ」がもつ機能のひとつに、いろいろな選択肢があるぶんかえって迷ってしまいがちな総人生のサポートをする、というものがあります。しかし、講師が大学院生である以上、講義の内容はどうしても学問を中心とした話題に偏ってしまいます。本企画では、大学院進学以外の総人生のロールモデルを提示することを目的としました。

寒さも増してきた京都の、しかも年末前の土曜日ということで、多くの学生が用事があったり、家から出るのが億劫だったり、という部分もあったのか、会自体はこじんまりしたものになったのはやや残念でしたが、その分、参加した学部生からの質問や感想も出て、興味深いお話をたくさん聞かせていただけた、充実した企画になったように思います。登壇者のおふたりにお話いただいた総人での4年間は、自分と似ているところもあり、全然違うところもありで、この学部の学生の幅の広さ（と同級生なのにお互いを知らなかった交友関係の狭さ）を改めて実感しました。

また、後半の就職してからのお話は、今まさに経験していることゆえのリアルさがあり、参加した学部生にも、そして僕達院生にとっても、とても新鮮なものでした。他の卒業生の方にもアンケートを取ってくれていましたので、おふたりの他の方のお話も見ることができ、総人の良いところ、直した方が良いところ、というのも改めて浮き彫りになったように思います。総人のミカタの今後の活動にも活かしていきたいと思います。 真鍋（社会学）



## 企画についての情報

### 【登壇者】

- ・ Sさん（2014年卒、27歳男性）  
現在のお仕事：メーカー（研究開発職）  
総人時代の学系：自然科学系
- ・ Iさん（2015年卒、25歳女性）  
現在のお仕事：公務員  
総人時代の学系：文化環境学系

### 【当日の流れ】

#### 14:35～15:25 大学時代を振り返って

総人に入学した動機、経緯  
1～2回生の頃の生活と勉強  
学系（研究室）を決めた理由と時期  
卒論を書いてみての感想

#### 15:35～16:25 大学生活・学びと就職後の生活

就職を決めた時期  
今の職集を選んだ時期・理由  
働き始めたときに苦労したこと  
大学生活とのギャップ  
大学生活は仕事にどう活きているか / いないか  
総人での4年間を振り返っての感想

#### 16:35～17:30 フロア（学部生）からの質疑

## ◆企画当日の発言録（一部抜粋）

### ◎総人に入学した経緯は？

S：どうしても一人暮らしがしたかった。それなら関西方面ということで京大にした。自分のやる事が決められず、理系の中でどこの道に進むか決まらず、自由な切り替えが効くことから総人にした。数学も好きで理学部とも迷いはしたが、大学入学時に分野を狭めたくなかった。自分の中のバランス感覚がなりたつのが総合人間学部だった。入学後は物理、化学、つまみぐいをしたが、光合成を軸に研究していきたいと3回生の終わりには考えた。総人なら研究室のバリエーションはあるが、自分の研究をより専門的にするため、農学研究科に行った。

I：単純に京都に行きたかった。高校時代に教育実習の方が京大総人だった。なんとなく京都に行きたいというので、京都でできれば国立大学で、高校2年生くらいから志望校を京大にした。そのなかで総人は教育実習

の先生がユニークな先生で、印象に残っていた。高校時代にピアノを学んでいた。音楽も学んでみたかったが、他の大学では現実的ではなく、総人では芸術関係のこともできそうだった。高校は進学校で、先生達は生徒を東大に行かせたがる傾向が強かった。京大の受験者は少なく、しかも総人受験者は全部落ちていた。私は先生にそのデータを見せられて逆に火が付いた。

### ●就活のときに気をつけたことや役に立ったことは？

S：エントリーシートを出して面接に来てくれと言われていくと、いきなり最終面接だった。就職に関しては研究室の雰囲気にあまり左右されない方が良い。研究室は学術に残る人がいるところ。進学したら良いやってなる前に、踏みとどまって考えるべき。研究に集中する場なので、ともすると就職のことを忘れがち。

I：個人プレイみたいな感じ。サークルの友達には理系しかおらず、みんな院に行った。就職する友人は少なく、まして公務員に行く友人もおらず、最初は問題集で筆記試験対策をした。また大学受験をしている気持ちだった。面接対策はいろんな人に聞いた。大学の中にもキャリアサポートの部署があるので、そこに行ったり、ハローワークで模擬面接をやったり。一番役に立ったのは、総人の同級生に練習をしてもらったこと。友達に、ラインで声を掛けたら快く受けてくれて、自分のことを知っているだけに、いろいろなことを返してもらった。そこで初めて学部力を感じた。

### ●総人4年間を振り返って思うことは？

S：あまり明確な目標を決めて頑張らないというのはあった。漠然とこうなりたいと言うのはあったが、あまりにも明確な目標があるとそれが遠すぎて、そのギャップに苦しむことになる。なんとなく方向性を決めて、1、2回生でサークルを頑張る、3回生で海外旅行をすとか、4回生で研究室とか、それぞれの段階で自分にできることをやっていくと、知らず知らずのうちに進んで行って、幸せになれるんじゃないか。4年間のスパンで目標とか計画を立てない方が良くかなと思う。計画を立てているわけではなかったけれども、過ごしていく中でそう思った。電磁気学で、ある点と点があって、それらが直接相互作用することを遠隔作用というけれども、実際はそうではなくて、周りの場を通じて力を及ぼし、それがさらに周りを呼んで、結果として目標に達する、それを聞いたときこれだと思った。自分のできる範囲で絶えず自分のペースで何かをやって、その結果、目標に近づくのだと感じる。会社では設計をしなければならぬが、それにいきなりアプローチするのではなくて、

まずこの外縁を調べる、そういうところから始めて何とか今自分で設計ができる技術者になろうとしている。そこは会社に入っても通じるものがある。

I：最近職場でキャリア研修があり、そこで紹介された考え方が印象的だった。山登り型と川下り型という。山登り型は目標があってそれに向かって一直線に進む。やればやるだけ近づくからモチベーションもある。目標がはっきりしている人はそれで良い。ただそういう人は割合としては多くない。川下り型は自分一人で筏に載って下って行くが、どこに流れていくか分からない、少し先は見えるけど、その先はわからない。分かれ道もある。自分がどこに行きつくか分からない。たぶん私もそう。最後にどうしたいかはわからないが、その都度分かれ道に来たらどちらか選ばなければならない段階はある。その川下り型でどうやったら上手く最後終着できるか考えたときに、いろんな情報を取り入れたり、いろんなことに興味をもってチャレンジしたりする方が、すごくバリエーションが増えて面白くなる。そんな考え方がある。話を総人4年間に戻すと、総人はいろんなことが学べると言われるけれど、その気になればいろんな情報を取ることができるし、いろんなことにチャレンジすることができると思う。私自身はそこまでできなかったと思う。やる気さえあればなんでもできてしまうところ。川下り型には向いている学部だと思う。

S：大学の友達や人のことは、会社の人達（の関係）と比べて違うと思う。また話したときの感触も違う。自分の大学時代の友達に関しては議論をする人が多かったと会社に入ってからそう思う。雑談でも良いけど、なにかについてみんなでちょっと議論する、そういう人達が多かったと思う。

司会（谷川）：僕の友達は、会社に入ってから議論をするように思われたらしい（笑）。

S：自由に議論するのは京大の雰囲気だろう。

I：総合人間学部って文系と理系どちらからも入り、学際的なジェネラリストを育てる目標があると思うが、今一つその環境を生かしきれなかった。思っている方に行かない、その辺のもどかしさがあった。卒業するときに、たまたま総人の総代をして卒業証書もらった。最後みんなの前でしゃべるとき、そのときぱっと思ったのが、「総合人間学」という学位が授与されたけれど、総合人間学ってなんでしょう、本当にわからなかった。今もわからない。いろんな分野の融合を起こして、スペシャリストでありつつジェネラリストを育てる（目標には）中々そこまで行きつかない、私だけの問題かもしれないけど。それは残念だったと思う。卒業証書が授与されるまで考えていなかったけど、「総合人間学」って何言っ



てるんだろうと思う。

●現役の総人生にメッセージを！

S：頑張りすぎないこと。受験勉強と同様に、頑張りすぎると燃え尽きる。就職活動でもそう。頑張りすぎて就職後に燃え尽きる人もいる。やり過ぎない方が良く、マラソンの視点でほど良く頑張れば良いと思う。

I：将来のことを考えたりするとき、人と比べたり、どうしたら良いか分からなくて不安にもなる。近いところだと卒論とかも同じ。なんとかなる、なるようになる、という感覚でいる。頑張るな、というのではなく、目標があれば頑張れば良いし、目標が無いなら無いなりに模索するのも必要。最終的には何とかなるそういう運命にあると思う。特別なことをするのでなくて良い。

総合人間学部では文理の垣根を越えて勉強することができる。それが、私がこの学部を志望した理由であるのだが、この書き方だと幾分か印象良く聞こえてしまう。別の書き方をすると、何をしたいか具体的に定まっていなかった、恥の多い受験生であった。流行りものに飛びついて騒ぎたがる人々のように、最もホットな学問と言っても過言ではない認知科学に興味があるという当たり障りのない理由を纏い、長い時間をかけても何を勉強・研究したいかはっきりさせることができないという恥ずべき現状を誤魔化し続けていた浪人生であった。

そんな状況の新入生であった私が総人のミカタに出会ったのは、入学して間もない4月のある木曜日だった。その存在はビラやら告知やらで知っており、ふらっと寄ってみたという感じであった。最初に抱いた感想は、聞いていた通り文理を問わずにさまざまな研究をしている院生がいるなといったものだった。そして、院生各々がさまざまな事情を抱いて人環に進学しているということを知った。

それから何度通ったことだろうか。正直なところ、講義を聞きに行くというより院生と喋りに行くというような日もあり、情性で通い詰めたことがあるのを否定できない。私にとって「総人のミカタ」は一種のコミュニティのようなものになっていたのである。

考えてみると、私ほど院生とパイプを持っている学部生はいないのではないだろうか。前述のように総人のミカタに携わっている院生には、もちろんそれぞれの研究の専門があり、院に進学して研究を続けようと決心した各々の歴史があって現在も研究に勤しんでいる。彼らから得られるのは彼らの専門研究がどのようなものであるか、またその面白さだけに止まらない。アカデミックな世界で生きることの楽しさや苦悩を、私は彼らから十分に受け止めたつもりである。これが私の今後の進路を考える上で大いに役に立つであろう。

ある回の講義で総人のミカタの結成の動機を知り、私は文字通り衝撃を受けた。それは数年前の総合人間学部及び人間・環境学研究科の解体騒動であり、総人のミカタはその騒動を受けての同学部・同研究科のアイデンティティ探求運動の一環なのである。そもそもその騒動を知らなかった自分が受けた衝撃はことさら大きかったのだが、それをきっかけに自分が所属する

この総合人間学部の生い立ちを考え、その良い面と悪い面、つまりはアイデンティティを考え始めたのである。それは何であろうか。書き始めたら埒が明かない。いくつか例を挙げると、学生数が少ないため教員と学生との距離が近いこと、同じ学部に全く異なる研究をしている人がいることなどがあるだろう。また、悪い面としては、ここが扱っているトピックは他の学部で研究しても変わらないという実情などが思い当たる。けれども、私はアイデンティティを探求し、総人や人環のあるべき姿を模索するという営みに価値を感じ、それに携わる幸福を覚えているのである。「総人のミカタ」に出会えたことは自分にとって僥倖であったと言える。

# 【2017 年度末シンポジウム】

## 「研究を他者に語る」の先へ——教養と学際未来を考える

2018 年 3 月 2 日実施 / 総合人間学部棟 1102 講義室

### 概要

2017 年 4 月より活動を開始した総人のミカタは、大きくふたつの目標を掲げている。ひとつは、その名のとおり総合人間学部生のチューター的役割（＝味方）を果たすことであり、もうひとつが、多様な専門分野に属する院生が相互にその分野の「ものの見方」を提示することで、院生の研究・教育能力の向上に資すること（＝プレ FD 活動）である。この一年間、模擬講義に加えて学際研究着想コンテスト、そして大学教育学会での報告を経験し、後者の目標に関して、「総人のミカタ」のもつ意味が鮮明となってきた。これを共有し、総人のミカタのみならず総人・人環の将来について議論することが、このシンポジウムの目的である。総人のミカタの活動背景には、総合人間学部、人間・環境学研究科が掲げる「研究を他者に語る」という教育理念がある。端的に言って、「研究を他者に語る」とは、多様な分野＝専門外の他者が存在する学部・研究科の特徴を生かし、自身の研究を他者に語ることを通して、自己相対化できる能力を涵養することを目指すものだといえる。総人のミカタで得られた経験は、今後、この理念のもとで総人・人環が発展していくために、必ず貢献できるものだとの確信している。さらにいえば、総人のミカタをめぐるシンポジウムでの議論は、部局固有の文脈を越えて、教養と学際未来を考える糸口を与えてくれるだろう。

### 企画についての情報

#### 【ゲスト登壇者】

- ・ 杉山雅人（京都大学大学院人間・環境学研究科教授・研究科長）
- ・ 成瀬尚志（長崎大学大学教育イノベーションセンター准教授）

#### 【シンポジウムの目標】

- ・ 今年度の 4 月から始まった総人のミカタの取り組みを整理・紹介する。
- ・ 総人のミカタを通して得られたものを共有し、これからの展開を考える。
- ・ 総人、人環という部局固有の問題をより広い文脈に位置づける。

#### 【当日の流れ】

14:00 ～ 15:20 第一部 総人のミカタの一年

- 1 総人のミカタの活動報告
- 総人のミカタからの問題提起
- ゲストからのコメント

15:35 ～ 16:45 第二部 「研究を他者に語る」の先へ

- 杉山雅人「いかに語り、伝えるか：専門領域と学修段階の違いを越えて」
- 成瀬尚志「ソーシャルアクションとしての研究」
- 総人のミカタからのコメント

17:00 ～ 18:00 全体ディスカッション



### ◆発表の概要

総人のミカタ報告概要：「研究を他者に語る」こと、そして「語ること」で自己相対化の能力を養うこと、という理念を腑分けし、整理することで、そこに欠けている視点を 2 点指摘する、という内容の報告を行いました。ひとつは、自分の専門分野の外にいる「他者」といっても、学部生に対して語る場合と、違う専門の院生や教員が相手になる場合では、その経験の質が異なり、一括りに論じるには問題があるということ、もうひとつは、この理念に基づいた活動を続けていくためにも、その背景



に、「国際高等教育院問題」という歴史的な出来事があったことを自覚する必要があるということです。報告のスタイルについては至らない点もありましたが、内容に関しては多くの方の理解を得られたようでした。

**杉山報告：**総人のミカタや今回の問題提起を好意的に受け止めたうえで、卒論の異分野教員への発表や教養教育実習以外の取り組みを紹介していただきました。そして、こうした取り組みが、他学部以上に総人・人環にとって重要であるという認識を、改めて強調されていた点が非常に印象的でした。

**成瀬報告：**社会的に「良いこと」を、他者を巻きこめる工夫を加えて展開する「ソーシャルアクション」という視点で、総人のミカタを捉えるというご報告をいただきました。私達の取り組みへの好意的な評価だけでなく、「研

究を他者に語る」という理念の前提にある「研究は個人で取り組むもの」という価値観の限界についてもお指摘いただき、これから活動をさらに展開するためのひとつの指針が得られたように思います。

## ◆企画を終えて

### ①カリキュラムの問題

複数の参加者の方から、とりわけ総合人間学部において、履修や進路選択の参考となる体系的なカリキュラムがない、少なくとも機能していない現状を問題視する意見が提起されました。こうした批判に対して、学生の自

2017年度 分野越境型院生FD「総人のミカタ」総まとめ企画

## シンポジウム

# 「研究を他者に語る」の先へ 教養と学際未来を考える

2017年4月より、学部生への模擬講義企画「総人のミカタ」の活動が始まりました。この活動の背景には、自身の研究を他者に語ることを通して、自己を相対化する能力の涵養を目指す「研究を他者に語る」という総人・人環の教育理念があります。今年度の総人のミカタで得られた経験は、この理念のもとで総人・人環が発展していくために、必ず貢献できるものと考えています。

このシンポジウムの目的は、こうした総人のミカタで蓄積された経験を共有し、総人・人環の将来について議論することです。さらにいえば、このシンポジウムでの議論は、部局固有の文脈を越えて、教養と学際未来を考える糸口をも与えてくれることでしょう。

**3月2日(金)**  
**14:00 ~ 18:00**

14:00 | 第一部 「総人のミカタ」の一年  
15:15 | 第二部 「研究を他者に語る」の先へ

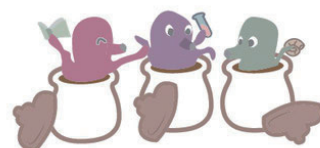
於 総合人間学部棟 1102 講義室

参加費無料 申込不要 飛び入りOK

## ゲスト

**杉山雅人氏** 京都大学大学院人間・環境学研究科 教授 研究科長  
専門分野 | 地球化学、分析化学、水圏化学、陸水学

**成瀬尚志氏** 長崎大学大学教育イノベーションセンター 准教授  
専門分野 | 高等教育、哲学



主催：人間・環境学研究科院生による総合人間学部生向け  
模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会  
後援：京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部  
お問い合わせ：sojin.no.mikata@gmail.com または webページ  
総人のミカタ 検索



由や総人・人環の固有性を重視するためには、理学部や文学部のような積み上げ式のカリキュラムに体系化することは望ましくないという反論もなされ、どちらかに結論を下すことの困難さが、ディスカッションの中で改めて浮き彫りになったように思います。

しかし、体系化を受け入れるか拒むかという二者択一を迫る前に、もう少し、「いかなる体系化が可能か」ということについて、議論できていたら良かったのかもしれない。というのも、体系化を求める意見の背後には、進路に迷い、決めきれない学生が一定数いることへの問題意識があり、これを解決する積み上げ式以外の体系化の形を模索することが、今後の総人・人環を考える



うで肝心だからです。当日の議論では、体系化＝積み上げ式というイメージが、あまりに強すぎたのではないのでしょうか。

私がこうした後知恵を思いついたのは、シンポジウム後に、参加していたある学部生の話の小耳にはさんだからです。彼の意見は、積み上げ式とは別の体系化を探すための示唆に富んでいたように思います。彼は、ひとつの講義が専門的な内容になるのは当たり前だが、講義の中で、他の教員の講義との関連についても説明してもらいたい、そうやって、いろいろな学問のあいだにあるネットワークを見せてもらいたい、といった旨を話していました。彼のいうように、それぞれの講義が他の講義とも関連づけられていれば、次に何を履修するか、どういった進路に進むのか、ということ、今よりも容易に想像できるようになるかもしれません。こうした試みから、積み上げ式とは違う形で、迷いがちな総人生に履修や分野選択の道標を与える「総人らしい体系的なカリキュラム」を考えることは、十分可能だといえるでしょう。

この点については、今回のディスカッションを踏まえたうえで、今後、議論が発展していくことを期待します。また、私達からも継続的に意見を提案し、議論を活性化できればと考えています。

## ②「研究を他者に語る」ことの可能性

シンポジウムのタイトルにもある「研究を他者に語る」という理念については、3つの報告のすべてで、それぞれの視点から課題と可能性が指摘されました。こうした報告を受けた後で、「研究を他者に語る」という理念が考案される際に念頭にあったこと、ということについても言及がありました。かいつまんでいえば、この理念の根本にあったのは、学問が細分化する中で、小さな研究課題に安住するのではなく、他者から投げかけられる「だから何？」という問いかけに答えるために、「学問が分化する以前のエネルギー」というべきものを相手に見せることだった、という旨だったように思います。

これは要するに、「研究を他者に語る」とは、自己相対化の能力涵養や教育機関として果たすべき総人・人環の社会的役割といったこと以前に、自分の「問い」を他者と共有するために、相手の知的好奇心をかき立てるように語ること、さらにいえば、相手を知的好奇心の根源へと誘うことだといいかえることができるでしょう。そして、普段の研究ではこの「だから何？」という問いかけを忘れがちだったり、他者に語りを届けることが容易ではなかったりするからこそ、「研究を他者に語る」ことは理念として提起されたといえます。

これを踏まえると、「他者」を分節化した私達の報告は、その議論自体はいかに妥当であっても、より根本的な問いかけの次元を見落としてしまっているように見えるかもしれません。しかし、それでもなお、こうした根源的な問いかけの可能性を含む制度について考える際には、私達の報告は重要な役割を果たすものだと考えています。そこで以下では、シンポジウムを経た後で、私達の報告をどのように位置づけなおすことができるのかについて、触れておきたいと思います。

総人・人環ではすでに、異分野教員への卒論発表や教養教育実習、そして杉山先生が報告の中で提示された学際教育演習などが、この理念に基づいて実践されています。







す。しかしながら、こうした一連の取り組みの目的や関係について、明確な説明が与えられているとはいえません。先ほどまとめたカリキュラムの問題同様、現状ではこれらの取り組みがそれぞれ独立して運用されているわけです。

このように、理念を共有しているとはいえ、実際にはバラバラに運用されている現状を問題ととらえるのであれば、報告で示した分節化は、唯一ではないにせよ、これらに関連づけ、体系化していくための有効な指標となりえます。例えば、異分野教員への卒論発表と教養教育実習は、報告に従えば、段階的なものではなくむしろ相補的な制度として位置づけられます。また、新しい取り組みを構想する際にも、それがどういう位置づけになるのかを意識することで、思い付きだけで進めるよりも無理のない設計が可能になるでしょう。

とはいえ、「だから何？」という問いかけに直面し、それに答えることは、知識や能力の蓄積によって達成されるというよりも、ひとつの飛躍する出来事として経験されるといった方が適切かもしれません。仮にそうであるならば、個々の取り組みの目的や関係を示すまでもなく、その機会となるハコさえ提供できれば十分だという見方もありえるでしょう。

しかし、仮にそうした機会が与えられていても、「だ

から何？」という問いかけを重要なものとして受け止める態度が備わっていなければ、その機会は無駄になってしまいます。さらに、こうした一連の取り組みだけが、問いかけに直面する唯一の機会というわけではなく、日常的な研究活動や実生活の中で、根本的な問いかけに気づくこともあるでしょう。これを踏まえれば、「研究を他者に語る」という理念を制度化する際に目指されるべきなのは、他者に語る機会を与えることではなく、そこで直面する問いかけに応じようとする態度を形成することであるはずです。

そして、単に他者に語る機会を与えられるだけよりも、その機会がどういうものか、また他の機会とはどう関連しているのかを理解したうえで参加する方が、こうした態度を形成しやすいように思われます。これは、成瀬先生が提示した「フレームワーク」に対応する問題といえます（調理実習で、同じように自由にメニューを考えさせる場合でも、弁当を作るという課題の方が、単に自由に考えるよりも学生の積極的な参加を引き出したという例が挙げられていました）。こうした点で、根源的な問いかけを成立させるためにも、報告での分節化は有効な視点を提示しているのではないのでしょうか。これについても、これから総人のミカタの活動を継続していく中で、さらに考えていきたいと思います。 真鍋（社会学）





# 【院生向け企画】学振申請書（DC・PD）検討会

1回目：2018年4月15日実施 / 2回目：2018年5月6日実施 / 吉田南総合館東棟404室

## 概要

学振の申請書の書き方に困っている院生の方は多いのではないのでしょうか。京大でも書き方講座が実施されていたり、採用された過去の申請書を見る機会もあったりしますが、実際に自分の研究について書くとなると、話は別ですね。

申請書を書くときは、指導教員や研究室の先輩にアドバイスをもらって修正を重ねると思います。しかし、専門分野が近く、自分の研究を理解している周りの人の意見だけでは、審査員にも上手く伝わるかわかりません。審査員の中には、自分の研究領域には詳しくない人も含まれているからです。

そこで、今回、さまざまな分野が集まる人環の特性を活かして、お互いの申請書を読み合わせる会を開くことにしました。普段、違う分野で研究している人からもらった意見や感想、そして書き方のスタイルの違いは、これから申請書を書き進める参考になることでしょう。

とはいえ、なかなか筆が進まなくて、途中までしか書けていない人もいるかもしれませんが、そうした書きかけ・箇条書きの段階でも大歓迎です！検討会に参加して、人に説明し頭の中を整理することも、執筆を進める重要な時間です。

また、今年は書かないけど参考にしたいという院生も、同じく大歓迎です。いろいろな人の申請書を見ることで、自分が書くときのイメージが掴めると思いますよ！！

## ◆参加院生の感想

**感想①：**学振検討会には来年自分が申請書を書く際の参考にしようと、情報収集を目的に参加しました。検討会では、参加者が持参した申請書の下書きを読み、自分なりに気が付いた点を伝えたり、意図の取り辛い点について話を掘り下げながら、表現などを一緒に検討したりしました。

学振に関しては、研究科主催の説明会や、研究室の先輩の申請書などの情報源はあります。しかし、実際に自分の申請書を書く段階になると何をどのように書いて良いものか悩むため、人に相談しながら推敲できる機会は非常に貴重だと思います。初対面同士でしたが、フレンドリーな空間で楽しむことができましたし、遠慮せずに指摘し合える場だったとも思います。

特に、自分の研究に関して専門ではない人や研究内容を知らない人に見てもらえることは大きなメリットだと参加していて思いました。その場で自分の研究内容を説明しているうちに頭の中を整理することができますし、普段意識することのない言葉の使い方や前提知識の説明不足にも気が付くことができます。加えて、学振に通っている先輩方からの確かつ信憑性の高いアドバイスをもらうことができる点も非常に魅力的です。

来年、自分が申請書を書く際にも是非企画して下さると嬉しいです。よろしくお願いします。

田中瑠莉（人環M1・文化人類学）

**感想②：**今年、学術振興会特別研究員制度に応募しようと思ったものの、同じように周囲に応募する人が見当たらず、情報収集が困難だと感じていました。しかし、「総人のミカタ」の学振検討会に参加したことで、有意義な情報がたくさん得られて驚きました。参加して良かったな、と思っております。

具体的に良かった点は、多様な分野の申請書を実際に見られたことです。例えばネットにも申請書の例は見つけられるのですが、自分の分野に近いものは見つかりませんでした。しかし検討会に参加したことで、自分と全く違う分野からかなり近い分野まで、さまざまな申請書を見ることができたため、「どのような言い回しや形式が伝わりやすいか？」「採択されやすい申請書のポイントはどこか？」といった点を総括的に理解することができました。またフォントや文字詰めなど、細かな書式テ

## 企画についての情報

### 【企画の目標】

- ・ 申請書の検討を通じ、分野間の交流と対話を促す。
- ・ 自分の専門分野を振り返り、異分野との距離感を知る力を養う。

### 【当日の進め方】

- ・ ミカタメンバーのうち、前年度に採択された人の申請書を参考に検討する。
- ・ 参加者が持ち寄った申請書を回覧し、互いに書き方・まとめ方を批評する。

クニックを教えてもらえるのもありがたかったです。

また参加して感じたのは、学振応募を検討している院生なら皆興味を持つイベントだと思うので、もっと宣伝をしてさまざまな分野の人に参加してもらい、歴代の採択された申請書をファイリングできれば、蓄積され得たデータとしてとても有効になるのではないかな……という

ことです。

総じて、専門が遠い近いにかかわらず丁寧にメンバーの方々がコメントをくださり、親身になって相談にのっていただけたので、とても助かりました。ありがとうございました。

三宅香帆（人環D1・国文学）

分野越境型院生FD「総人のミカタ」出張企画

人環院生向け

## 学振申請書(DC・PD)検討会!!

「学振とるぞ!」と意気込んでみたものの、いざ申請書を書くとなると、何をどう書けば良いのか分からず、途方に暮れている方も多いのではないのでしょうか。京大内部では、そんな院生のために申請書の書き方講座や、採用された過去の申請書を見る会などが催されています。でも、実際に自分の研究について書くとなると、もう少し深掘りした企画が欲しくありませんか?

もちろん、申請書を書くときは、指導教員や研究室の先輩にアドバイスをもらって修正を重ねることでしょう。しかし、専門分野が近い人の意見だけでは、審査員にも伝わる申請書には至らない可能性があります。なぜなら、審査員の中には、自分の研究領域には詳しくない人も含まれているからです。

そこで、今回、さまざまな分野が集まる人環の特性を活かして、お互いの申請書を読み合わせる会を開くことにしました。異分野の院生からもらう意見・感想や、書き方のスタイルが分野ごとに異なることへの気づきは、これから申請書を書き進める上で非常に有益な情報となることでしょう。

さらに、本企画では、書きかけ・箇条書きの段階での申請書も歓迎します! 検討会に参加して、他者に説明することで頭の中を整理することも、執筆を進める重要な時間です。また、今年は書かないけど今後の参考にしたいという院生も、同じく大歓迎です。いろいろな人の申請書を見ることで、自分が書くときのイメージが掴めると思いますよ!

### 「総人のミカタ」との関係

しばしば言われるように、申請書の執筆は自分の研究を捉えかえす貴重な機会です。また、異分野の申請書を読んでコメントするためには、相手の研究のポイントを掴む力も重要になります。本企画は、申請書執筆のハウツーを共有するというよりも、こうした力を磨くことに重きを置いています。そして、院生が学部生に模擬講義を行う「総人のミカタ」という企画も、自分の専門分野を見つめ直すこと、異分野の論点を掴んで自身との距離感を学ぶこと、という2つの力を涵養することを目指しています。詳しくは裏面をご覧ください。

4月15日(日)  
14:30 ~ 18:00

@吉田南総合館 東棟404資料室

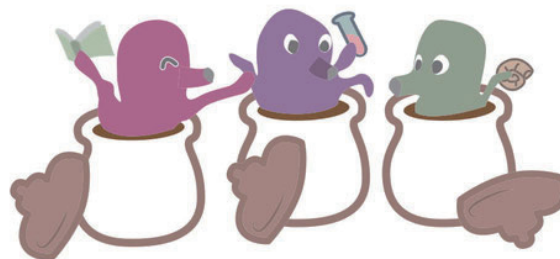
申込〆切 4月12日(木) 23:59まで

※飛び入り参加も歓迎ですが、読み合わせに十分な時間が取れない可能性があります。  
※参加費は「無料」です。

参加を希望される方は、上記〆切までに

[sojin.no.mikata@gmail.com](mailto:sojin.no.mikata@gmail.com)

までご連絡ください。読み合わせる申請書は、4月15日(日) 11:00までに同アドレスに添付して送るか、直接1部お持ちください。今回は都合がつかないという方も、GW中に2回目の検討会を開催予定ですので、同様にご連絡いただければ、ご案内メールをお送りします。各SNSでも情報を発信していきますので、ぜひチェックしてください!



主催：人間・環境学研究院院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会

後援：京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部

お問い合わせ： [sojin.no.mikata@gmail.com](mailto:sojin.no.mikata@gmail.com) または web ページ

詳細はこちら▼



web ページ



facebook



twitter



LINE

総人のミカタ 検索



総人のミカタ  
SOJIN NO MIKATA





# 京都大学吉田南総合図書館 × 総人のミカタ コラボ企画

2018年7月2日～2018年8月3日実施

総人のミカタは、吉田南総合図書館の主催する「論文・レポートのススめカタ」第三弾のキャンペーンに協力した。京都大学吉田南総合図書館報の『かりん』(No. 10)に、総人のミカタ代表の真鍋公希が「古典と選書——総人のミカタを振り返って」を寄稿したことがきっかけである。この文章では、総人のミカタの活動報告だけでなく、「選書」という行為に焦点が当てられる。それは以下のような内容である。蔵書検索システムによって「関連する本を容易にリストアップすることができますが、データベースは優先的に読む『べき』本を選んでくれません」。それに対して、総人のミカタの面々は、駆け出しの研究者として、良質な出会いの「選書＝選別」を提示しうるのはないか。

河野・山路さんをはじめとする図書館職員の方々が、この文章に注目してくださり、キャンペーンに協力することになった。吉田南総合図書館に、メンバーの卒論・修論が展示されただけでなく、執筆上の体験が「卒論・修論体験談2018」(卒論編・修論編)という小冊子にまとめられ、230部以上配布された。また、2018年8月2日(木)には環 on(人間環境学研究科棟1F)にて「く座談会」総人のミカタが催され、須田・杉谷・萩原・三升が登壇し、谷川が司会を務め、卒論・修論の「失敗」に焦点を当てた会話が繰り広げられた。キャンペーンを通じて、学問の入り口となる卒論・修論というテーマを通じて、私達なりの「選書」を実践できたのではないだろうか。

谷川(哲学)



## 論文・レポート執筆のススめカタ 第3弾 卒論・修論執筆応援 キャンペーン

2018.7.2(月) - 8.3(金)  
@吉田南総合図書館

「相談」レファレンスサービス

「展示」リアル卒論・修論

「体験談」先輩たちはこうしました。

「展示」おすすめ図書



「座談会」  
総人のミカタ

<日時>  
8月2日(木) 17:45～

<場所>  
環 on(人間・環境学研究科棟1F)

<内容>  
総人のミカタの先輩たちが公開座談会を開催! 論文執筆に関する生の声を聞いてみませんか? 詳細は別途チラシを作成してお知らせします。どうぞ楽しみに!

平日9～17時に調査・相談カウンターにて、卒論・修論に向けた文献の探し方や管理方法、テーマ選びなどに関する相談などにお応えします。

先輩たちの提出した本物の論文を展示します。  
人環の修論・博士論文のリストもご覧いただけます。

<好評!>  
執筆当時についてまとめた体験談を配布します。  
今年は総人のミカタver.と教員ver.がありますよ!

卒論・修論の書きかたに関する所蔵図書の展示を行います。  
展示の本は全て貸出ができます。  
おすすめ図書のリストも配布しますので、ぜひ参考にしてくださいね。

今回の「卒論・修論執筆支援キャンペーン」は「総人のミカタ」のみなさんに色々と協力いただいています! ロゴが入っている企画は「総人のミカタ」さんの協力企画です。



## 【コラム】他大学出身者のミカタ（あるいは「総人のミカタ」について語るときに私の語ること）

三升寛人（人間・環境学研究科 修士課程 1 回生）

私は総合人間学部出身者ではないし、まして京都大学の他学部出身者でもない。偏差値 60 にも満たない、どこぞの小さな地方国立大学出身の人間である。今から一年前、何とも幸運なことに、私はこの人間・環境学研究科で学ぶ権利を得ることができた。試験を終えたある日、ぼんやりツイッターを眺めていた私が発見したのは、「総人のミカタ」なる、謎の組織のアカウントだった。味方？見方？何じゃそれ？インターネットでその組織について調べれば、その内部事情は、「文系学部廃止騒動」や「領域交差型院生 FD」といった、何だか物々しいキーワードに包まれている。その中でも唯一はっきりしていたのは、その謎の組織が大学のお墨付きを得ているということだけだった。もしそれが事実なら、何らかの政治的主張に絡んだ（いかにも京大的な）ヤバイ学生組織でもないだろう。私はもともと、中学・高校時代には生徒会執行部の中で、学部時代には大学祭実行委員会の中で活動してきた人間だった。昔から、そういう類の（普通のサークルや部活動とは一味違った）活動が好きな質だったのだ。もしできることなら、院生になってからも、そういった類の組織にコミットしてみたい。その謎の組織にアタックしてみない理由は、どこにも見当たらなかった。

そして迎えた今年 4 月、入学式のオリエンテーションで案内された通り、私は木曜 5 限に「総人のミカタ」の講義室へと向かった。初回には、新入りでありながらズケズケと講義後の検討会、そして検討会後のカンフォーラでの食事会にまで参加したのを、今でもよく覚えている。以後、今年度前期の「総人のミカタ」講義には毎回出席しつづけた。それには、私が思っていた以上に、「総人のミカタ」という空間が居心地の良い空間だった、ということがある。「総人のミカタ」という空間は、私がこれまでの人生で見たことがないような「ハンパない」人々の集う場だった。自分の専門分野だけにとどまらない「ハンパない」量の知識を有する人、他人とのコミュニケーションの能力が「ハンパない」人、講義や運営に関して「ハンパなく」目を行き届かせられる人。そこに集うのは、どの人をとっても魅力的な人達ばかりで、そこは、私が心から尊敬したいと思える人達の集う、夢のような場だった。その場で交わされる議論は、いつも私の知的好奇心を刺激した。ここまで刺激的な空間に居合わせたことは、おそらく人生で初めてだった。

かくて「総人のミカタ」は、大学院で学ぶ私の、「週に一度のお楽しみ」になった。毎週、木曜日が待ち遠しかった。木曜 5 限には「ミカタ」がある。あの人達に会える。そんなことだけを考えながら、この半年近く生活してきたと言っても、まったく過言ではない。

そんな「総人のミカタ」について、その活動の理念や存在意義について詳しく語れるほど、私はモノを知っているわけではない（し、そもそもここで、そんな大それたモノ言いは期待されていない）。しかし、この「総人のミカタ」が、他大学出身の私にとって一体どういう存在であったのか、ということだけは、ここで改めて述べておきたい。

まず、「総人のミカタ」は、人環の新参者である私の大きな「味方」であった。「総人のミカタ」で知り合った諸先輩方は、いつも「末っ子」の私を可愛がり、気にかけてくださった。彼らはどんなときでも、まだ右も左も分からない私の模範となる存在で、私はかなり心強い味方を得ることができた。「総人のミカタ」は、私にそんなつながりを提供してくれる場であった。このつながりが得られたことを、私は他の誰よりも誇りに思う。

それと同時に、「総人のミカタ」は、他の大学、あるいは他の研究科ではなかなか得られない問題意識（＝「見方」）を提供してくれる場でもあった。もしも私が、他所の大学のまったく別の研究科に進学していたなら、自分の専門分野を研究するだけで十分だと思っていたことだろう。しかし、それだけでは十分でないのだ、ということ。「総人のミカタ」は示してくれた。「総人のミカタ」は、「人環」というマンションに同居する、自分の「ご近所さん」の研究にちょっとお邪魔する機会を与えてくれる。そして、そのマンションの住人として、ちょっと離れた階であっても「ご近所さん」のことくらいは知っておいて当然なのだ、それこそがそのマンションで上手な暮らし方なのだ、ということを教えてくれる。

これから先も、「総人のミカタ」はどんどん発展していく、と私は強く信じている。たとえタテカンがすべて撤去されてしまおうとも、どこかの学生寮が潰されてしまおうとも、この「総人のミカタ」という文化だけは、いつまでもずっと残っていてほしい。「総人のミカタ」について語るときに私が語ることは、概してそんなところだ。

# 「総人のミカタ」に関する研究活動

2017 年 10 月 27 日実施（第五回 京都大学 学際研究着想コンテスト）

2017 年 12 月 2 日実施（大学教育学会 2017 年度課題研究集会）

総人のミカタでは、総人のミカタという院生 FD（プレ FD）の試みと理念について、反省的に言語化する機会を意識的に作ってきた。京都大学生協の『らいふすてーじ』（2017 年 10 月号）や『京都大学総合人間学部広報』（第 59 号）をはじめとする広報活動と並行して、自身の実践と理念を再検討する研究活動を行ってきた。後者の中で特筆すべきなのは、着想コンテストへの「次世代型大学教員の構想——学際と FD を問い直す」プロジェクトの申請と、2017 年 12 月に関西国際大学尼崎キャンパスで開かれた大学教育学会での研究発表「学際性を要請するプレ FD——京都大学大学院人間・環境学研究科における院生発案型プレ FD『総人のミカタ』をめぐる」である。

それらの機会を通じて、私達は、研究科の掲げる「学際教育」という研究と教育をまたぐ理念を再考した。学際では、「分野内での自分の位置を棚上げして、『自分の専門分野』を代表する必要」があるので、「分野の本質を問い直す姿勢を涵養する機会」となりうる。また、教育の現場では、「専門内では接しえない予想外の発想に直面」することがあるので、「他者と触発し合う関係を構築する機会」となりうる。こうした機会を生かし、自己変容を達成し、「新たな問題設定や領域生成」を可能にすることが必要だろう。

こうした機会を生かし、「新たな問題設定や領域生成」を起こすような共同体へと大学を変えるには、新しい文化を生み出さねばならず、従って、新しい学問文化を内面化した大学教員の集団を育成しなければならない。それゆえ、専門性を涵養しつつも未完成で柔軟な院生に、「開かれた精神」を体系的に養う環境を整えることが必要である。その先にあるのは、「学際／専門」と「研究／教育」の好循環により、「研究を育て合う大学」という将来像である。着想コンテストでは、以上のように、総人のミカタの背景・趣旨・理念を再定式化した。

さらに、大学教育学会の研究発表では、そうした理念と具体的な活動内容を報告に加えて、先行研究を踏まえ、開かれた「態度」の内実を「自省性（reflexivity）」と「適合性（adequacy）」に分節化し、記録・報告書の分析を通じた意義と効果の検討を行った。前者は、自己の専門性を宙づりにして、他者（非専門家、他分野の専門家）の視線を取り込むものであり、後者は、自身の専門を中心に「学問の地理感覚」を養う必要を説くものである。最後に言い添えたいのは、本報告書に収録された真鍋公希の論考（5～15 頁）は、こうした「総人のミカタによる、総人のミカタの研究」という文脈の切っ先に位置している、ということである。谷川（哲学）

## 第五回 京都大学 学際研究着想コンテスト

2017 年 10 月 27 日実施

京都大学生協の関連組織で、生協職員と学部生から成る X-academy（クロスアカデミー）が主催する学内向けのイベントに、総人のミカタメンバーの一部が登壇した際に、学生が学内向けに学問との接点を提示していく試みという点で、X-academy と総人のミカタの活動が共鳴するものがあると意気投合した。その折、京都大学の学際融合教育研究推進センター主宰の「京都大学 学際研究着想コンテスト」が開かれることを知り、学部生・院生・教員・職員が入り混じったメンバー構成で、大学改革など大学を取り巻く問題を扱うようなプロジェクトで申し込むことになった。

論文や書籍で大学問題を既に扱ったことのあるメンバーの意見を受け、議論以前に会話の土台が必要だという視点から、大学問題を共有するアナログゲームを作るという計画を立てた。その過程で「大学改革を学ぶ会」という研究会を開き、高等教育論、日本の大学改革の状況、ゲーム・スタディーズについての知識を共有した。「学生の立場を入り口にした大学論の足場づくり——『大学問題』共有ゲームという対話型アプローチ」と名づけられたプロジェクトは、一次選考を通過しただけでなく、二次選考では「最優秀鼎賞」を受賞し、現在は、有志が制作のために活動している。谷川（哲学）

# 次世代型大学教員の構想 — 学際とFDを問い直す

チームメンバーの専門分野：  
教育学 哲学 社会学 言語学  
心理学 文学 発達学 物理学  
歴史学 数学 政治学 地学

INTERSECTIONAL FUTURE FACULTY DEVELOPMENT

## 1. 日本の旧世代型大学教員像

### 1.1 専門家として

専門分化による学問の発展  
・他分野に興味・理解のない「専門バカ」の増加  
・大学がお互いに話の通じない 専門家たちの「聖域」に  
そこへ……  
・複雑な社会問題 (e.g. 温暖化、貧困) に対応する必要性  
→ 単一の専門分野では対処できない  
→ 分野を超えた「共同研究」へ



### 1.2 研究者／教育者として

日本の大学 | ドイツ型の研究大学として出発  
・進歩するのは「研究」のみ  
・教員たちは教育より研究を重視  
大学の役割は「研究」だ！  
そこへ……  
・大学進学率が50%超 (=ユニバーサル化) (M. Trow)  
→ 教育ニーズの多様化  
→ 教員は教育能力開発が必要に (いい研究者が、教育者とはならない。逆もしかり)  
大学の役割は「教育」だ！

## 2. 日本の大学における二つの対症療法の失敗

### 学際 (分野を超えた共同研究)

- 自分の専門分野を出ない「寄せ集め」の研究
- 形式的な交流に留まり他分野から学ばない
- 自分の研究を広い文脈に位置づけられない
- 分野間の相互作用の喪失「クソツボ化」
- 結局は「従来型の専門バカ」のまま

### FD (Faculty Development / 教員の能力開発)

- 自分の「研究第一」で学生と向き合わない
- FDという用語へのアレルギー
- 教育の目的は「後継者育成」
- 研究の重視と教育の蔑視「クソツボ化」
- 結局は「従来型の研究者」のまま

他方「研究が疎かな教育者」が誕生  
・最新の研究を教育に反映できない  
・学生の機嫌取りのない講義  
・「従来型の研究者」と経歴し合う「クソツボ化」

学際も教育も、非専門家と接触できる。なのに……  
「学際」分野内での自分の位置を棚上げて、「自分の専門分野」を代表する必要  
→ 分野の本質を問う姿勢を涵養する機会「あんなに、できていない！」  
FD 専門内では接しえない予想外の発想に直面  
→ 他者と触れ合おう関係構築する機会「あんなに、できていない！」  
従来の学際/FDに欠けていたもの「開かれた精神」

## 3. 解決策としての領域交差型院生FD

### 3.1 「領域交差」(J. Derrida)とは

他分野との協働を通じて、自分自身や自分のディシプリンが変容することで、新たな問題設定や領域生成が可能になること  
→ これを達成すべく、「開かれた精神」を養うプログラムを開発・運用 (2017.4より活動中)  
→ 複数の分野の大学院生を対象とした「総合的な能力開発プログラム」

### 3.2 なぜプログラムか？/なぜ院生か？

プログラム開発 | 個人の取り組みでは「クソツボ化」は変わらない  
→ 変化を生み出すには、新しい文化をつくる必要がある (S. Beauvoir)  
→ 新しい学問文化を内面化した大学教員の集団を育成  
院生 | 学問に触れたての学部生と、完成された教員のあいだ  
→ 専門性を涵養しつつも未完成で柔軟  
→ 次世代の大学を担う存在

### 3.3 プログラム内容

① 学部生向け講義 | 学問の地平を共有していない学部生に対し、自分の専門をわかりやすく説明することで、自明視していた分野内の「常識」が相対化される。  
② 異分野院生との講義後討議 | 学問の地平を共有している院生の視点から、自分の専門がどう「見られる」かを知る。  
③ 領域交差ディスカッション | 素朴な印象論を入口にして、分野間の差異を掘り下げ、互いの専門の位置関係を知る。

「開かれた精神」とは？  
① ② ③ 他者からどう「見られる」かを知り、自身を相対化する能力  
→ 反省性 reflexivity 能力  
④ 他者の専門の特性を「見極める」能力  
→ 適合性 adequacy (J.T. Klein)

## 4. 未来の大学へ

### 4.1 プログラムの拡張可能性の検討

「開かれた精神」に関する「理念的探究」  
→ 「領域交差」の可能性の条件を追究  
参加院生の意識変化を調査・分析  
→ 領域交差的な研究態度の養成過程を解明  
既存の大学教育プログラムとの比較考察 (e.g. 山口ほか「未来の大学教員を育てる」)  
→ 継続・応用可能な制度を設計

### 4.2 次世代型の大学教員像

「開かれた精神」を身につけた研究者・教育者へ  
→ スタイルが未完成の院生から、学際/専門と研究/教育の好循環を作り出す！  
「研究を育てる大学」  
→ 共同研究で他分野との関係を意識しつつ、自分の役割を担う  
→ 専門 | 学際  
→ 外部の視点を取り入れて専門研究を進展させる  
→ 教科書的反映に留まらず、最前線の研究を反映した教育を行う  
→ 研究 | 教育  
→ 社会を反映する学生の反応を通して、社会の中に研究を位置づける  
→ さらに、研究者だけでなく、専門家と非専門家の橋渡しができる人材も輩出

## START 大学生が直面するジレンマ

- ・就活しなきゃ！
- ・面接では本音を……
- ・やたらとグループワーク
- ・早く社会で活躍しなきゃ
- ゼミを休むと怒られる
- 盛り上げが苦手
- 課題でバイトに入れない
- 数百万の奨学金返済

授業にバイトにサークルに、なんたがっている忙しい  
卒論、コミコ、人間力……  
結局大学って何を学ぶところ？  
・周りに相談してみた  
→ 「学生なんだから」と……された

## STAGE 1 ジレンマの背景を調査

・ジレンマから生まれた「素朴な疑問」  
→ 大学の歴史を調べて、問題を明らかにする  
→ 先行研究から分かること：  
a) 大学制度や教育理念の変化  
b) 学生の増加/多様化  
c) 社会に求められる人材の変化  
d) 大学の位置づけの国際的変化  
大学「国際大学の誕生」 大塚「大学改革 1945 - 1999」 古沢「大学とは何か」 若原「大学 シリーズ」 大塚  
・さまざまな変化が大学を取り巻いている  
これまでの取り組み  
2017.09 大学教育の専門家を集めた研究会  
2017.09 大学理事/文部省官僚へのブレ調査  
2017.10 大学職員へのブレ調査

## STAGE 2 背景には社会的な問題が！

「大学生が直面するジレンマ」は、  
「大学を取り巻く社会的問題」の縮図になっている！！  
・社会のいろいろなアクターの要望が学生に集中  
・問題を解決するために、まずは問題を共有する必要がある  
・みんなの問題の存在を忘れている  
→ 学生経験者：卒業すると学生目線が失う  
→ 当時の視点に囚われてしまう  
→ 現役学生：無自覚のまま問題に翻弄される  
今の学生、学生だった人、これから学生になる人……  
みんなで問題を共有できるツールは……ゲームだ！  
a) 政策提言 | × (解決策を練る以前に問題共有できていない)  
b) 本や論文 | × (もともと興味のある人しか読まない)  
e.g. 「ゆとり世代の大学論」 坂「大学改革」 藤  
c) ゲーム | ○ (対話のプラットフォームとして最適)  
→ 問題認識と対話の両方を達成できる (H. バラジウム)  
→ 異なる立場の気持ちに分かる (役割取得) (C. ロード)  
→ みんなで大学の問題を考えるきっかけに

## STAGE 3 問題を共有する方法を探る

・ゲーム開発の要点：「ゲームの面白さはジレンマにある」 (清水「シンジュー×コウジ」)  
・「ゲーム＝軽薄で安直な発想」ではない：  
→ 真面目な問題解決にも使われる (京都大学「クロスロード」 藤本「シリアス・ゲーム」)  
→ 現代人は多くの時間をゲームに費やす (マクゴニガル「ゲームとは何か」が参照)  
→ 社会的、楽観的な積極性などの能力が涵養できる  
・ゲームのデザイン：  
a) プレイの中で学生の背後にある社会問題が見える  
b) 学生の志向タイプに応じた勝利条件  
→ 勉強、就職、大学生活、仲間関係……(クラーク「高等教育システム」)  
c) 調査に基づいたリアルなイベント設定  
→ e.g. インターン (就職 vs 勉強)、奨学金 (進学 vs 家計)  
・ゲームを通じた足場づくり  
→ 問題共有のためにプレイ人口を増やす  
→ ゲームを面白くする  
e.g. ゲームデザイナーとの研究会、ゲームバランスの調整  
→ 研修への活用 (先行事例：「TATEWARU」)  
「学生の意見を聞いて大学改革して！」ではない！  
「学生の立場をくつから大学改革して！」  
・ゲーム開発後の研究へ：  
→ 効果分析 (ゲームによる対話の活性化)  
→ ワークショップの開催と参加者調査  
→ 類似ゲームとの比較研究  
・従来の会議とは違う  
問題共有へのアプローチ

## STAGE 4 「大学問題」共有ゲームをつくる！

あなたは○○大学の新生入生。  
苦しい経験を乗り越えて、ようやく始まる「華の大学生活」を夢見ていた。しかし、○○大学は類い稀な大学改革の波に揉まれていた。数々のイベントによって生じるジレンマをくぐり抜けて、あなたは無事卒業することができようか？  
ジレンマを乗り越えて、大学生活を生き残れ！！

## STAGE 5 ゲームを通じた足場づくり

その後の展開  
・学生を入口に、大学の問題を社会に接続  
→ さらなる対話のために……  
→ 学生以外の視点を引き出すゲームの開発  
e.g. 「総長ゲーム」 「文科省ゲーム」  
・ゲームがもたらす未来の大学：  
Before  
自分の立場/経験に囚われた主張の応酬  
保護者「私が学生だった頃は……」  
企業「最近の学生はこんなことも知らない」  
教授「文科省は悪役」「学生は勉強しない」  
執行部「留学生を増やして大学ランキング UP」  
After  
立場の違いを超えた建設的な議論が可能に  
みんなが少し変わると、大学も変わる

# 学生の立場を入口にした大学論の足場づくり

「大学問題」共有ゲームという対話型アプローチ



「総人のミカタ」企画書

2017.01.29

1 はじめに

「総合人間学部って、なにを勉強するところなの？」この質問に直面したことのない総人生はいないだろう。むしろ自己紹介をするたびにこの質問を投げかけられるといってもいいはずなのだが、僕はこの質問の答えにいつも窮してしまう。なぜなら隣の研究室の人が具体的に何を研究しているのかさえ知らないから、自分の所属している学部なのに、「ごった煮」という以上に説明することなんてできないうし、自分の専門を説明したとしても、次には「それは他の学部と何が違うの？」という質問が寄せられるからだ。総合人間学部が学際性を謳ってきたとはいえ、対象が新しくったり、いくつかの視点をミックスしたりすれば学際的な「研究」になるほど甘くないわけで、学生がしている研究のほとんどは結局のところ、ゼミの先生の専門内に収まることになるのだから、僕が質問に窮してしまうものもある意味当然なわけだ。

2015 年 6 月には「文系学部廃止」騒動もあった。文部科学省が出した通知の中心的な対象は、人文社会系、とりわけ教育学部のいわゆる「ゼロ免」過程だったから、文理融合型の総合人間学部が直接対象にされていたわけではない。とはいえ専門が文系の僕にはやはり強い衝撃があったし、2013 年に設置された国際高等教育院に対する反対運動のさなかに学部生だった僕には、とても他人事とは思えなかった。実際、総合人間学部や東京大学の情報学環といった学際系の学部・大学院に対する否定的な評価もあるようだし、最近では「役に立つ理系／役に立たない文系」というステレオタイプを超えて、理系の研究に対する風当たりさえ強いみたいだ。まさに現在、学問・大学の存在自体が問い直されるということだろう。

こういう現状を経験しているから、前学部長の高橋由典先生が掲げた「研究を語る」という課題を中心にした総人・人環のミッション再定義にはすごく共感する。それは他の学部との差異化という総合人間学部のアイデンティティに関わる問題を解決するのと同時に、現在の日本の大学・学問が置かれた状況に対する、アカデミズムの側からの真摯な応答にもなりうると思うからだ。

しかし、このミッション再定義にはまだ不安も残る。なぜなら、そこには学生の視点が欠けていると思うからだ。いろいろな専門の先生がいて、「よくわからないけどおもしろそうなき雰囲気がある」のは総合人間学部の魅力の一つだが、そういう理由で総人に進学したということは、裏を返せば自分のしたい勉強を決められなかったということでもあるのだ。学生が昔より受け身になっているという話はよく聞くけど——実際にそういう統計があるのかはわからない——周囲にもそういう人がたくさんいるように思うし、こんな企画を提案しておきながら、正直なところ、僕自身も全く積極的な方ではない。印象論は全く学問的ではないのだが、やはり総人人生には、いろんな学問に興味はあるけれど、受け身だった

決められなかったりする人が多いと思うのだ。

ミッション再定義の中にある「教養教育」という概念に一抹の不安を覚えるのは、その真に興味があきりしている積極的な学生像が見え隠れするからで、そこが少し現実離れした印象を与えてしまうのだと思う。積極的な人たちだったら、きっと一般教養科目も生き生きと聞くだろうし、勉強会や自主ゼミにもどんどん参加しているのだろう。しかし、受け身になってしまいがちな総人生の多くには、まずは眠っている関心を目覚めさせ、学問と出会い、知的営為へと誘うことが重要なのではないか。

そしてその方法は、一流の研究者である先生から触発されるだけではないはずだ。むしろ、もっと身近な存在である院生と一緒に考えることで、学問の魅力と楽しさを共有できる瞬間もあるはずだし、そんな時間はきっと、日々研究に悪戦苦闘している院生にも大きな糧となる経験だと思う。

こんな思いが重なって、今回、みなさんに声をかけさせてもらった次第です。これから実践に移していく中で、たくさん問題もあると思いますが、みなさんと一緒に乗り越えていたら、そして自分たちの研究にも、総人・人環の将来にも、よい肥やしとなるような活動にしていけたらと思います。

2 「総人のミカタ」企画案

2.1 背景と目標

はじめに、「総人のミカタ」を立ち上げるに至った背景と、その目標およびその具体的な内容について説明する。

背景——総人、人環のミッション再定義

「総人のミカタ」を立ち上げる直接の背景には、前学部長の高橋由典先生が提案した『研究を語る』という教育課題』を中心とした総合人間学部、人間・環境学研究科のミッション再定義がある。そこでは、従来の学際教育という理念は、教育の現状という点から他研究科との差異化という点からも固有性を保ちえないことが指摘され、それを補完する一貫した教育理念として、『研究を語る』という教育課題』が提起されている。これは「対話を根幹とした自学自習」という京都大学の理念にも適合的で、私たちもきわめて画期的なものだと考えている。

この提案は現在、研究科の HP でも言及されており、新たな試みとして「卒業論文を異分野の教員に向けて発表すること」と「大学院博士課程者による一般教養科目の教育実習」が、将来的な制度化を視野に入れて、昨年度から試験的に運用されてもいるなど、学部・研

1 シンポジウム資料内「研究を語るという教育課題」、「将来構想に関する答申（概要及び詳細）」（以下、「答申」）を中心に参照している。

究科の活動に反映されはじめている。また、将来的なカリキュラムの改編では、主に 1 回生に向けた入門的な「総人・人環ゼミ」の開設と、そこでの院生の参加<sup>2)</sup>なども打ち出されている。以上のような学部・研究科や教授会の動きには強い共感と期待を抱いている。しかし同時に、私たち院生も人間・環境学研究科の一員であるのだから、教員に任せきりということにはもどかしさを感じてしまう。むしろ院生である私たちだからこそ、できることもあるのではないだろうか。本企画を立ち上げるに至った背景と動機は、このようなものである。

### 最終目標と中期目標

本企画は、総合人間学部・人間・環境学研究科企画 WG が 2015 年 9 月 25 日にまとめた「総合人間学部・人間・環境学研究科の将来構想に関する提言：最終答申」の理念・目標に賛同するものである。そのうえで、現在、試行段階の「卒業論文を異分野の教員に向けて発表すること」と「大学院博士課程者による一般教養科目の教育実習」とは別に、院生が主導する初年次教育を想定した講義を、本企画の運営委員会が主体となって実施していくことを計画している。この活動によって、最終的には、院生主導の講義／ゼミナールの正規カリキュラムへの早期制度化を目標としている。

「答申」が目指すカリキュラム改革は、北米などで実践されているとはいえる、日本国内ではまだ行われていない<sup>3)</sup>革新的なプログラムである。それゆえ、その試験的導入や制度化にはリスクも伴い、必然的に計画は慎重にならざるを得ないだろう。その点で、院生自らが中心となって企画・運営を行う本企画には、学生の根点を取り入れたり、柔軟に活動できたりという点で大きな利点がある。本企画は、運営上は、いわば規模の大きな自主ゼミ・勉強会なのである。しかし、その目的が学部生の学力・院生の教育力の向上のみならず、先述のように早期制度化のための交渉を前提とした実践であるという点で、一般的な勉強会ではな

い、したがって、本企画はその実践において、大学での講義形式を模倣し、院生と学部生との関係を講師と学生という関係に重ね合わせ、その非対称性を利用して進行される<sup>4)</sup>。また、各回の講義計画は事前に設計し、講義終了後には毎回、院生による反省会を行う。この際、学部生にはアンケートを配布しておき、その結果も検討したうえで、今後の講義設計にフィードバックしていく。これは院生の反省と講義の改善を図るのと同時に、参加した学部生のリアルな意見や感想を集積することにもつながる。このデータは、「答申」で検討している他の提言を具体化していく際にも貴重で有益な資料となるだろう。さらに、院生同士や院生と学部生との間に面識が生まれ、学部・研究科内での交流を活発化させるような効用も期待できる。以上のようにこの企画は、参加した学部生・院生にとつてのみならず、学部・研究

科にとつても非常に実りある結果をもたらす可能性が大だといえる。しかしながら、私たちの個人的な活動では限界があり、学部・研究科からの支援が必要である。具体的には、学部生への PR の機会や説得力を増すための部局からの公認、実際に実施する教室および備品等の支援を要求したい。

このように、本企画の運営とフィードバックを通して、その教育的有用性を検証し、十分な成果を挙げられたと確認できれば、その上で私たちは、これを正規のカリキュラムに組み込むことについて、教授会と議論の場を設けられればと考えている。それは、学部・研究科の理念と対立するものではなくない。そしてその際に、院生のインセンティブや学費・生活費のために、「答申」にあるように<sup>5)</sup>それを教育業務と位置づけ、非常勤講師などの雇用契約を結ぶ必要があるとも考えている。

このように本企画の最終目標とは、院生主導の講義／ゼミナールのカリキュラムへの制度化を促し、そこで院生の雇用を生み出しながら、学部・研究科の教育活動の一層の発展に協力することである。この点で、私たちの企画は一般的な課外活動とは異なっている。そして中期的には、院生有志による自主的な講義の運営・フィードバックを通して、最適な講義のあり方を探り、同時に参加者の研究・教育能力の向上を目指している。

### 2.2 理念と効用

ここでは、本企画が、総合人間学部、人間・環境学研究科の「ミッション再定義」に挙げられている 2 つの教育目標、すなわち「知の越境による学問の相対化」と「他者に語る言葉の獲得」<sup>6)</sup>を私たちがどのようにに解釈したのか、および、本企画によってどのような効用を挙げることが期待できるのかを説明する。

#### 「他者に語る言葉の獲得」

「他者に語る言葉の獲得」とは、今回のミッション再定義によって新しく提示された理念である。この理念は、一般教養科目においては「前提となる知識を共有していない学生」が対象となるために、研究者が日夜追及している分野内での「小さな差異」ではなく、学問と社会とのあいだの「大きな差異」を語っていくこと<sup>7)</sup>に、その原型がある。そしてこの理念は、一学部・研究科のアイデンティティ再定義の問題を越えて、一方で短期的な利益の最大化を優先する合理的な思考が強力となっている社会の変化と、他方で学問システム自身の高度な機能分化による複雑化によって、社会的な存在意義が問い直されている日本の大学・学問界全体にとつても、必要不可欠なものだといえる。

このような状況においては、複雑で容易に理解することができない上に、社会に広く浸透

2 「答申（概要）」4p および「答申（詳細）」5p、8p

3 「教育実習の導入」2p

4 これはもちろん、アクティブ・ラーニングと呼ばれるような相互作用を重視した教授法を否定しているのではない。

5 「答申（詳細）」8-9p

6 「答申（概要）」2p

7 「文系部会」3-6p

している目的合理的な思考とも距離がある<sup>8</sup>。学問に対して、興味・関心を抱けない人々も一定数存在するだろう。そして、これから研究の道に進む者に求められることの一つは、彼らのように前提知識どころか共有された関心を持っていない人に対して、学術的営為のおもしろさとその知的成果を伝え、共通理解を築き上げていくことである。もちろん、これを行するためには、豊富な経験と高度な能力が必要となる。

本企画が複数の専門分野に所属する院生のリレー形式を採用している理由はここにある。すなわち、リレー形式では比較的関心のない専門分野の講義を受講する場合が存在するたために、講師は関心のある受講生との対話のみならず、関心のない受講生に対して、興味を呼び覚ますよう働きかける必要性が生じてくるのである。講義の中にあえてこのような状況を作り出すことで、上述した能力を養うことが期待できるだろう。

もちろん、本企画が実質的には自主ゼミである以上、関心のない学生がその回に参加することを期待するのは難しく、参加者のほとんどが学問に大きな関心がある学生だろう。とはいえ、本企画に参加する真面目な学生であっても、分野によって相対的に関心の濃淡はあるだろうから、興味を持ちづらかった分野であってもおもしろみを感じさせるような工夫を、院生が熟慮し施していくことは必要である。また、新入生を主な対象としているため、そもそも何に関心があるのかはまだはっきりしていない学生も一定数いることが想定できる。したがって、PR などを積極的に展開し、多くの参加者を集めることができれば、関心を喚起するために「研究を語る」能力を訓練する環境を整えることは可能だろう。

### 「知の越境による学問の相対化」

「知の越境による学問の相対化」という教育目標は、およそ四半世紀にわたって総合人間学部が志してきた学際性を引き継ぐものである。ここで総合人間学部、人間・環境学研究科が目指している学際性とは、私たちの理解によれば、既存の専門性を離脱することで、複数の学問分野の方法を足し合わせたり、学問の枠組みを横断したりするものではない。私たちが理解している学際性とは、専門性を深めることで、学問の新たな可能性を切り拓いていくことである。そして、専門性を深めることは、個別の領域の最先端を追求することだけではなく、その領域が歴史的に積み重ねてきた視座や問題意識に目を向け、それを自らのものとしていくことでもある。このような、自身の専門分野への深い理解を築くことではじめて、研究を「他者に語る言葉」を獲得できるのである。要するに、一般的には矛盾しているようにも見える学際性と専門性は、総合人間学部、人間・環境学研究科にとっては、コインの表と裏の関係にあるのだ。

本企画においては、講師となる院生は講義の準備にあたって、自身の専門を改めて学びなおす必要性が生じる。過去に見た映画を見なおした時、以前とは異なる印象を受けることがあるのと同様に、過去に学んだ基礎的な知識も、経験や知識が増えた院生になって、それを他者に教えるために復習するときには、別の見え方をすることは容易に想像できる。そのよ

<sup>8</sup> もちろん、学問の存在意義の一つはまさにその点にあるのだが。

うな経験によって、専門に対する理解をより深めることができるのだ。また、参加する学部生から、自分では当たり前すぎて思いもよらなかったような質問が投げかけられることもあるだろう。これも、自らの専門に対する理解の促進に重要な契機となりうる。そして、異なる専門の院生と講義を計画し、実践し、反省する中で、彼らの専門と自らの専門の視座の違いを自覚することも期待できる。これもまた、他の専門を比較することを通して、自らの専門の特徴を捉ええす経験である。このように、本企画が専門の異なる院生のリレー講義の形式をとっているのは、複数の専門の寄せ集めとしてではなく、「真」の意味での学際性を志向しているからである。

この理念に基づいて、各講義では、ただ専門分野の議論や学術史を紹介するのではなく、その分野の視座の特徴を伝えることが目指されることとなる。そのため受講生も、ある授業だけでは十分な理解はできないとしても、他の専門の授業にも出席することで、それぞれの分野のあいだの視座や方法的な差異を見出すことができるであろう。このような、自身の専門の、自明にさえ思えるような根本的な前提を、異なる分野を参照項として捉えかえし、意識化することで、その前提が孕み、したがって現在の専門分野が抱える限界を知ることができるのである。そのような自分の専門の抱える根本的な限界を知ることではじめて、一般的な意味での学際的な研究——既存の領域を横断し、これまでのパラダイムを書きかえるような独創的で斬新な研究——が可能になるのだ。

### 学部・大学院での交流活性化

総合人間学部、人間・環境学研究科が抱える問題の一つに、学生間の交流の少なさを挙げることができる。これは、所属する専門が多様で、履修する科目が一致することが少ないという、学部・研究科が構造的に抱えざるを得ない状況に起因するものである。この問題に対して、学生有志による「総人合宿」なども行われているが、1度きりの合宿だけでは、なかなか持続的な効果を生み出すことはできないだろう。

このような交流の少なさは、自分の所属するゼミをなかなか決めることができなかつたり、人間・環境学研究科への内部進学の動機づけにつながらなかったりといった、学部生の進路選択にも少なからぬ影響を与えているように思われる。

本企画においては、講師となる院生のあいだで、計画や反省をするために議論する機会を幾度となく設ける必要がある。また授業では、講師によってスタイルは異なるが、一方的に院生が説明するだけというような形式はできるだけ避け、学部生との相互作用をつくりだすように計画される。学部生にとっても、年齢が比較的近い院生が講義をすることで、より親しみやすい授業となることが推測できる。加えて、講義終了後に茶話会の時間を設けると、本企画自体は一つの交流スペースとしても機能する。このように本企画を継続的に実践することは、院生間や院生と学部生のあいだの交流を活性化することにつながり、組織全体の魅力を高めることにも貢献できるだろう。



## 2.3 運営計画

### 2017 年度前期運営計画案

現在計画している講義の形式は、具体的には以下のとおりである。

対象	主に総合人間学部の 1 回生		
日時	毎週木曜 4 限（講義 60 分+茶話会 30 分）		
講師	人間・環境学研究科の院生（講義を実践するのは 5 名）		
形式	一講師あたり 2 コマを担当するリレー形式		
	最終 2 コマでは講師を 2 組に分けてディスカッション（合計 12 コマ）		
内容	所属している専門分野の基本的な視座を解説する専門分野の「おもしろさ」や「魅力」を伝える		
講義理念	参加者との相互作用を重視し、院生とともに考えることで学問を体験する		
	複数の専門分野を知ること、それぞれ視座の特徴を感得する		
	あるテーマについて文理を横断した討論を行う（ディスカッション）		
その他	院生は講義後、参加した他の院生とともに反省会を行う		
	毎回アンケートを配布し、また講義を撮影するなど、記録を残すまた広報活動として、以下の事を実施する予定である。		
	<ul style="list-style-type: none"><li>● Facebook ページ、twitter アカウントの開設</li><li>● web ページの開設</li><li>● 学部ガイダンス後の茶話会への参加</li><li>● 総人合宿への参加</li><li>● ビラ等掲示</li></ul>		

文責：京都大学大学院 人間環境学研究科 修士課程真鍋 公希  
(koki0210manabe@gmail.com)

総人のミカタ アンケート

(通常講義)

- ・ このアンケートは企画の改善と成果報告を目的としたものです
- ・ このアンケートの回答や個人情報、上記以外の目的では用いません
- ・ このアンケートに協力しなくとも、みなさんに不利益が生じることはありません
- ・ アンケートの分析や成果報告は、個人が特定できないように処理したうえで公開されます
- ・ 記録と広報のために写真・動画を撮影します。掲載に問題がある方はお申し付けください

学生番号： (        ) 学年： (        ) 回生                      性別：    男・女・その他

終わった後に、以下の質問に答えてください

- Q1 講義を受講する前に、この専門分野を知っていましたか  
知らなかった                      1    2    3    4    5    6    7                      知っていた
- Q2 講義を受講する前に、この専門分野に興味がありましたか  
興味はなかった                      1    2    3    4    5    6    7                      興味があった
- Q3 今日の講義はわかりやすかったですか  
わかりづらかった                      1    2    3    4    5    6    7                      わかりやすかった
- Q4 今日の講義の内容を、よく理解できましたか  
理解できなかった                      1    2    3    4    5    6    7                      理解できた
- Q5 今日の講義はおもしろかったですか  
退屈だった                      1    2    3    4    5    6    7                      おもしろかった
- Q6 講師のしゃべり方は聞き取りやすかったですか  
聞きづらかった                      1    2    3    4    5    6    7                      聞きやすかった
- Q7 講義の進め方は効果的だったと思いますか  
効果的ではなかった                      1    2    3    4    5    6    7                      効果的だ
- Q8 講義の内容は難しかったですか？簡単でしたか？ちようどよい場合は4を選んでください  
難しかった                      1    2    3    4    5    6    7                      簡単だった
- Q9 今日の講義を受けて、この専門分野に興味がわきましたか  
興味はわかない                      1    2    3    4    5    6    7                      興味が出た
- Q10 次回以降の総人のミカタにも参加したいと思いますか  
思わない                      1    2    3    4    5    6    7                      思う
- Q11 講師への質問やわからなかった用語などを自由に書いてください

Q12 今日の講義の感想や、良かったと思う点／改善したい点／思う点を自由に書いてください

総人のミカタ アンケート

(ディスカッション)

- ・ このアンケートは企画の改善と成果報告を目的としたものです
- ・ このアンケートの回答や個人情報、上記以外の目的では用いません
- ・ このアンケートに協力しなくとも、みなさんに不利益が生じることはありません
- ・ アンケートの分析や成果報告は、個人が特定できないように処理したうえで公開されます
- ・ 記録と広報のために写真・動画を撮影します。掲載に問題がある方はお申し付けください

学生番号： (        ) 学年： (        ) 回生                      性別：    男・女・その他

終わった後に、以下の質問に答えてください

- Q1 ディスカッションは、参加しやすい雰囲気でしたか  
参加しづらい                      1    2    3    4    5    6    7                      参加しやすい
- Q2 あなたは、ディスカッションに参加できましたか  
参加できなかった                      1    2    3    4    5    6    7                      参加できた
- Q3 今日のディスカッションはわかりやすかったですか  
わかりづらかった                      1    2    3    4    5    6    7                      わかりやすかった
- Q4 今日のディスカッションの内容は、よく理解できましたか  
理解できなかった                      1    2    3    4    5    6    7                      理解できた
- Q5 今日のディスカッションはおもしろかったですか  
退屈だった                      1    2    3    4    5    6    7                      おもしろかった
- Q6 講師のしゃべり方は聞き取りやすかったですか  
聞きづらかった                      1    2    3    4    5    6    7                      聞きやすかった
- Q7 ディスカッションの進め方は効果的だったと思いますか  
効果的ではなかった                      1    2    3    4    5    6    7                      効果的だ
- Q8 今日の内容は難しかったですか？簡単でしたか？ちようどよい場合は4を選んでください  
難しかった                      1    2    3    4    5    6    7                      簡単だった
- Q9 今日のディスカッションを受けて、登壇した講師の専門分野に興味がわきましたか  
興味はわかない                      1    2    3    4    5    6    7                      興味が出た
- Q10 次回以降の総人のミカタにも参加したいと思いますか  
思わない                      1    2    3    4    5    6    7                      思う
- Q11 講師への質問やわからなかった用語などを自由に書いてください

Q12 今日の講義の感想や、良かったと思う点／改善したい点／思う点を自由に書いてください

【資 料】

日程：\_\_\_\_\_年\_\_\_\_月\_\_\_\_日

講義担当者：\_\_\_\_\_

記録者：\_\_\_\_\_

参加学生（のべ）：\_\_\_\_\_人

総人のミカタ 講義記録

時間 (目安)	内容（簡単な要点）	機能（該当すると思うものすべてに○）	メモ・コメント
～15 分		主題設定・導入 知識伝達 具体化 応用・練習 体系化・整理	
～30 分		主題設定・導入 知識伝達 具体化 応用・練習 体系化・整理	
～45 分		主題設定・導入 知識伝達 具体化 応用・練習 体系化・整理	
～60 分		主題設定・導入 知識伝達 具体化 応用・練習 体系化・整理	

▲参加院生全員と学部生（有志）が、毎回この記録をとりながら講義を聴講している。この資料は、京都大学高等教育研究開発推進センターが開講している研究科横断型教育プログラム「大学で教えるということ」（集中講義）での配布資料を参考に作成された。なお、当該プログラムについては、高等教育研究開発推進センターの Web サイトを参照されたい。<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/crossing/>



# 編集後記

総人のミカタのメンバーと話していると、自分の専門とはかけ離れた知識がポロっと出てくる。そういう発見がなんだか面白くて、総人のミカタはこんな面白い機会を得るための土台なんだろうなボンヤリとらえています。今になって思うと、軽い気持ちで総人のミカタに参加した自分が、メンバーとして受け入れられ、授業をし、こうして報告書作成まで手伝っていることがとても不思議です。

(伊縫寛治)

真鍋くんから「ミカタ」の企画を聞いたのは2017年の年明け頃。当初は院生メンバーの一人として協力する予定でしたが、その後、縁あって教員サイドから「ミカタ」に関わることになりました。メンバーの熱意溢れる講義や討論に積極的に加わるかわりに、それを一歩引いて眺めざるを得なくなったことに一抹の寂しさを感じますが、そんな僕にとっても「ミカタ」は多くの貴重な経験と洞察を与えてくれる得がたい企画です。

(佐野泰之)

総人出身者が抱えているであろう問題意識を必ずしも共有しているとは言えない私が、この活動に携わっている理由は、総人・人環の問題がある種の普遍性を持っていると感じたからだ。教養教育や学際。大学のこれからを考える上で避けては通れない課題が総人・人環にはたくさんある。大学問題という泥沼の中でいかに足掻くか。本活動を通じて、私はその足掻き方を学ばせていただいたと思っている。

(杉谷和哉)

総合人間学部発足から四半世紀余り、ようやく今になってあるべき学部教育の姿が、本学部の存在意義に関わるものとして議論されるようになったと感じます。こうした流れの中から生まれた「総人のミカタ」はある意味でカリキュラムの補完を目指すものですが、院生によって運営されていることで独特の立ち位置を獲得しつつあるように思います。その良さを活かした形で、その必要のなくなる日まで活動していけることを望みます。

(須田智晴)

ほんの偶然から入った総人のミカタだったが、メンバーとは昔からの友人だったように感じている。ここでの親しい関係から受けた影響は大きかった。例えば、自分自身の博論の内容は如実に変化し、元々抱いていた教育（学）への関心が具体化した。前者は、活動や読書範囲の拡大、後者は、『人間・環境学』掲載のFD論文として現れた。この報告書をまとめ、自分への影響を振り返ったとき、総人のミカタは、何よりもまず、一つの共同体だったと思う。

(谷川嘉浩)

「国際高等教育院」騒動以来、いろんな活動にそれなりに関与してきました。けれども、総人・人環の教育に実質的に切り込むこと

はできず、胸のうちにずっとしこりが残っていました。そんなとき、真鍋くんに誘ってもらって「総人のミカタ」に関わり始めました。とても嬉しかった。「総人のミカタ」は、「ぼくのミカタ」でもあります。活動の理念を見失わずに、これからも一步一步進んでいきたいです。

(萩原広道)

こんなところまで来れるとは、全然想像できなかった。自分が一番、驚いていると思う。2年前にこの企画を思いついた時には、「自分がするんだ」という謎の使命感と根拠のない自信があった。今は、正直ちょっと息切れをしていて、そんな使命感も自信もない。でも、みんながいれば、何とかなるだろうという安心感はある。本当に、周囲の人に恵まれたと思う。メンバーには感謝してもしきれない。ありがとう。これからも、よろしく。

(真鍋公希)

人環に入ってまだまだ日の浅い私にとっても、総人のミカタはかなり心強い「ミカタ」でありました。このような場を提供してくださった「ミカタ」の諸先輩方に対しては、どれだけ感謝してもし尽くすことはありません。そして、これからは、この総人のミカタにメンバーとして参加した私自身も、総人学部生のみならず、私のような他の人環院生の「ミカタ」ともなれるよう努力して参ります。これからも、どうぞよろしくお願いします。

(三升寛人)

新参者でして長々と述べることもないのですが……研究室の先輩に誘われて入った「総人のミカタ」、最初ひそかに「総人ってそんな味方が必要なほど敵が多いのか、すごい学部だなァ」と思っていたら、最近「見方」との掛詞であるという事実を今更知りました。だからこの名前なのか。はやく気づけという話です。いつも企画運営や報告書の編集をほがらかにこなす（すごいです）メンバーの皆さま方、本当におつかれさまでした。

(三宅香帆)

まずは本報告書の作成にあたり編集の労をとられた萩原さんをはじめ、メンバーの皆さまに御礼申したい。また、発足の当初から今日に至るまでの一年半の間、これだけの人を集め続けた真鍋さんの熱意には心から敬意を表したい。これから総人のミカタを訪れる学部生に、先に学ぶ者としてどれだけのことができるか。この報告書を読み直すことで、志を持った仲間達の「ものの見方や考え方」を汲み取り、その問いに答えようと思う。

(村上紓一)

「総人のミカタ」に入った動機は、教育の経験を積むためでした。しかし、今ではそれ以上に、異分野の研究者と交流し、自分の研究を高める貴重な場になっています。メンバーの講義を聞いたり、議論したりすることで、未知の考え方に触れることができ、それが自分の研究に大きな刺激を与えてくれています。今後も総人・人環の人々にとって、さまざまな考え方に触れられる場として機能していったほしいです。

(山根直子)

## 「総人のミカタ」活動報告書 2017 年度前期～2018 年度前期

---

2018 年 10 月 1 日 発行

編 集 人間・環境学研究科院生による総合人間学部生向け  
模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会  
発 行 京都大学大学院人間・環境学研究科 学際教育研究部  
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
電話 075-753-6533  
Web サイト <https://sojin-no-mikata.jimdo.com>  
E-mail [sojin.no.mikata@gmail.com](mailto:sojin.no.mikata@gmail.com)

---

デザイン・装画 = 萩原広道／印刷・製本 = オリンピア印刷株式会社

© 2018 by Sojin no Mikata

Printed in Japan.

